
こんにちはR P Gさん。わたくし、都市開発系ゲームから来た者ですが。

稲荷竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんにちはRPGさん。わたくし、都市開発系ゲームから来た者ですが。

【Nコード】

N8528DB

【作者名】

稲荷竜

【あらすじ】

都市開発系ゲームかと思ったら、RPGだった……！
建築や整地などの能力をもって異世界に飛ばされた主人公。彼は時々きりそこがシムシイやマイラみたいな世界観だと思っていたが、いきなり魔獣に襲われたり魔王に襲われたりして、思い知る。

「この世界、ファンタジーRPGじゃねーか！」

RPGな世界観で都市開発系ゲームのスキルはあまりに強力だった。

山を一瞬で消し去ったり大災害から逃げ出す人々を救ったりするうちに、神扱いされてしまう。

あらゆるRPGなお約束をスルーする、来る世界を間違えた主人公の楽勝すぎるノンストレスな大冒険、ここに開始。

1話

いきなり異世界に飛ばされてしまったら、どういつ行動をするべきだろう？

『いきなり異世界に飛ばされる』

これはもう、ありえない話というか、物語にしたって誰も思いつかないような新機軸というか、過去にも未来にも僕が体験したものが唯一であり、どんな本を紐解いてもネットでも検索しても絶対に出てこないような特殊なシチュエーションだと思う。

だからこういった時のためのハウトウがあるわけもないのだが、それでも悔やんでしまう。

もっとならうで小説を読んでおけばよかった。

さて、状況は草原スタートである。

目が覚めたら雄大な草原の上におり、周囲の景色を見回せば遠くに山が、近くに洞窟みたいなものが見えるものの、雲に覆われた空は昼か夜かも判然としない。

着ているものは飾り気のない部屋着のジャージだ。

ポケットを探っても元々何だったのかもわからない、ぐしゃぐしゃに丸まった紙が出てくるだけであり、食料も連絡手段も持ち合わせではないなかった。

部屋でゲームをしていたままの姿だ。

ゲームに吸い込まれたというような気がしたのだが、気のせいではなかったらしい。

視界の左側にアイコンがある。

見慣れたアイコンだ。建造や整地といった項目が並ぶそれは、何も無い土地に建物を建てていき、交通網やインフラを整備して人口を増やしていったりするゲームのそれによく似ていた。

つまるどころ、僕の役所は市長とか、村長とからしかった。

何もない。

ならば、建てればいい。

そうだ、周囲にはちょうどいい平原が広がっているじゃないか。都市経営系ゲームの世界に飛ばされ、どうやら能力があるらしいことは視界左のアイコンでわかるのだけれど、まだ実際には試したことがないのだ。

自分に何ができるか、実際に知っておく。

これは大事なことだ。

だから僕はアイコンにカーソルを合わせて、建築コマンドを選ぶ。見つかるのは道路や消防署などの近代的なものだった。

まさに都市開発　　という感じで、発電所、水道局、駅なども見つけることができた。

ともあれ、最初は住居だろう。
意識すればカーソルが合う。

そして、カーソルを合わせると、視線の先に青白く光るキューブ状の何かが出現した。

さらに集中すれば、そこに建物ができあがるのだろう。

資材は

ない。

木材も鉄材も、少ししかなかった。

二とか三とかいう頼りない数字が並ぶ。

建造物にアイコンを合わせて建てようとしても、資材がないせいか不可能だった。

一番小さな建物を建てるにも五から必要というのが微妙にいやらしい。

やれることは　　整地だけだ。

整地というのはつまり、平らでない道を平らにして、そこに建物を建てやすいようにする技術である。

周辺が平らな現在では意味があんまりないコマンドだった。

遠くの山でも均すしかないのだろうか。

あるいは近くの洞窟か。

そう考えて、洞窟の方を眺めれば

「ダンジョンからモンスターが逃げたぞ！」

そんな、鋭い女性の声とともに。

洞窟から、全長三メートルはあるう、全身の皮膚が緑色の、一つ目の化け物が出てきた。

モンスターが出たぜ。

ここに来て、僕は、たぶん初めて本格的な混乱に見舞われた。

異世界に飛ばされる。

まあ、慌ててもしょうがない。そういう日も生きていればあるだろう。

周囲に何も無い。

しかし視界にはコマンドやカーソルがあって、資材さえあれば建物を建てることはできる。

けれど　モンスターが出た。

しかもそいつは、一直線に僕の方へと向かってきている。

このままだと死ぬ。

こうして頭が動いているのだから、そうそう混乱もしていないんじゃないかと思える人もあるかもしれない。

しかし、モンスターが出て、こちらに走ってきて、目の前でその巨大な腕を振りかざすに至った今現在まで、僕の体は一ミリだって動いていないのだ。

「そこのお前、逃げる！」

女性の悲痛とも言える叫び声でした。

でも、全身は固まっていて動けなかった。

固まったまま。

視線が一つ目の巨人に向いている。

ということはつまり、僕の視界の先に出現している、青白く光るキューブ状の何かも、巨人と重なるように出現しているということだ。

結果とかを予想したり、対抗手段を講じようと思ったわけではない。
何かを考える余裕はなかった。

だから、ついつつかりというぐらい、何も考えず

そのモンスターを整地した。

ジュツ、という音とともに、青白く光るキューブ状の何かがい

っそう光を強くする。

そして、次の瞬間、『モンスターのいた草原』であったはずの一边が三メートルぐらいの四角いその空間は『何も無い土がむき出しになった場所』へと変化していたのだ。

僕はふらふらと、整地が終わった場所に歩く。

すると、カリカリッという小気味よい音とともに、視界の右下に文字が浮かび上がった。

『肉 を取得しました』

肉か。

……肉かあ。

いや、今どういう必然で肉なんていうアイテムを取得するのかを考えれば、その肉が何肉かなんていうのは、簡単に判断ができるんだけど。

僕は考えないことにした。

ともかくわかったことは 何かを整地され視界から消滅したあとの空間には、アイテムが漂っており、僕はそのアイテムを回収できるということだけだ。

荷物が増えたり、体重が増えた感じはない 僕自身が四次元ポケットみたいな感じなのだろう。都市開発ゲームの資材だって、お前どこにしまってるんだよという感じだし。

肉だってそうだろう。

胃袋におさまりましたと考えたくはなかった。

僕ががんばって辛い現実と折り合いをつけようとしていると、ガシヤガシヤと音を立てて鎧姿の女性が近付いてきた。

美人だ　　と言ってしまっているのだろうか。

表現に悩むのは、別に彼女がブサカワ系だとかポチャカワ系だとか、そういう意味ではない。

声の印象から感じていたよりも、よっぽど幼い少女だったからだ。

金髪に金色の瞳の少女。

鎧姿ではある……戦うような格好をしてはいるものの、身長は百四十ぐらいじゃないか？

よくよく見ていけば、頭の左右、こめかみのあたりに黒い角らしきものが生えていたりもする。

それに、彼女の背中側で揺れる、太い、爬虫類のような　　強いて言えば、竜めいた、黒い尻尾も見えた。

ただし、翼はない。

なのでドラゴンというよりは、でっかいトカゲ系の印象が強かった。

純正の人間、ではないのだろうか。

さらに考えたら、声もどことなく舌足らずというか、幼げで甲高いというか、甘い感じだった。

その子が背負ったでっかい剣をひきずるようにしながら僕に近寄り、笑う。

「驚いた。サイクロプスを一瞬で消滅させるなど……強いのだな、

お前は」

感心したような、惚けたような表情だった。

だが口調が男っぽいというか、どこことなく上から目線な感じでギヤップがある。

ひよっとしたらこんな見た目でも、僕より年上なんていうことがあるのかもしれない。

……そうだったら嫌だなあ。

僕はロリババアという属性は嫌いではないのだが、三十歳ロリババアとか四十歳ロリババアにはときめかないタイプなのだ。

百歳越えてほしい。

半端に現実にいそうな感じにまとまらないでほしい。

そういった願いを、ロリババアに対しては抱いている。

普通に幼い、あるいは人間では考えられないような年齢でいてほしい、見た目と声が幼く口調が男っぽい少女が、さらに言葉を重ねる。

「あれはレベル九十のサイクロプスだ。普通の冒険者では束になっても太刀打ちできないような凶悪な魔物のはずなのだが……それを一瞬で倒すとはな。いや、驚いた。魔術師か？ レベルはどのくらいになる？」

……んんん？

レベル九十のサイクロプス？

冒険者？

魔術師？

そもそも レベル？

何かおかしい。

僕は、都市開発系ゲームに来たんじゃないのか？

どういことなのか。

現状を確かめたくて、僕はたずねた。

「……あの、ここはどついう世界で？」

女の子はきよとんと首をかしげた。

それから、悩むように角に手を当てて。

「どついう世界とは不思議なことを……そうだな、強いて言えば
」

王様が治める専制君主国で。

地方は貴族によって統治されていて。

モンスターが出て。

そんな、彼女にとっては常識的であろうことを丁寧に語ってくれ
て。

そして最後に

「我ら冒険者が剣と魔法で身を立てていく　そんな世界だ」

少なくとも都市開発系ゲームじゃないよと。

「そういつつおんなの意味にとねることを言った。」

2話

「とりあえずサイクロプス討伐をギルドに報告しなくてはいけない。だが、実質的に倒したのはお前だから、一緒に来てほしい」

そんなような事を言われて、彼女と街へ行く流れになりつつあった。

彼女

「ああ、私の名前はレヴィアという。竜人族のレヴィアだ。そちらは？」

レヴィアは僕の名前をたずねて来たのだけれど、ここで僕は困った。

普通に名乗ればいい。

そりゃそうなんだが　この世界観で果たして実名を名乗って、おかしく思われないかどうか不安になったのだ。

僕はある限り目立つたり奇異の視線にさらされたりするのが好きじゃない。

人の中心に立つのが苦手なタイプなのだ。

服装の時点でどうしようもなく目立っている気もするのだが、可能な限り目立つ要素を増やすのは避けたいところだった。

それに、話してしまえば、様々ないらぬ質問をされるかもしれない。

どうやってここに来たのか　などというのは、僕は今一番聞か
れたくないことであった。

ゲームをしてたら吸い込まれた。

そんなあり得ないような、ありきたりなような、何ともゲームと
いう概念のない世界にいる人相手には説明のしづらい経緯である。
なのでそのあたりスルーして色々とレヴィアに話したいのだが。
名前を名乗ったら『珍しい名前だな。どこ出身だ?』みたいな流
れになりそうなんだよなあ。

咄嗟に嘘をつけるほど器用でもない僕は、困り果てて、黙り込ん
でしまう。

彼女は、その沈黙をこう解釈したようだ。

「まあ、名前を名乗るのにためらう事情の者も、いないではない。
家柄、人種……過去。人を縛るものは数多いからな。名を捨てて新
しい土地でやり直したいという気持ちは尊重しよう」

そうじゃないんだけど、面倒なのでそういうことにおこう。

さて、街を目指すには山を越えなければならぬらしい。

山というのは、この世界に来たばかりの時に周囲を見回したら見

えたやつだ。

レヴィアが言う。

「このあたりは平原だろう？ 実は、峻険な山に囲まれていて、開発が遅れているのだ。だからこそサイクロプスなんていう危険な魔物が出るダンジョンも、長らく放置されていたというわけだな。その山をこれから登って帰るのは、少々気が滅入る話なのだが」

確かに、彼女の小さな体には大変そうである。

……もつとも、腕力や体力は見た目相応ではないだろう。大きな剣を振り回していたり、重そうな鎧を身にまとっていたりする。装備一つとっても、明らかにただの少女ではない。

「あの山さえなければ、隣国との交易ももう少しどうにかなるだろうに」

やれやれとため息をついて笑う。

僕は、なんとなく述べた。

「じゃあ、整地しようか？」

レヴィアが笑う。

「整地か。できればそれは、もちろんいいのだろうが……木を切り出したり土を掘り返したり、山には魔物だっているから、国家を挙げた数十年がかりの一大作業になるだろうな」

「いや、一瞬だけ……」

「一瞬！？ 馬鹿な……サイクロプスを消し去る手腕は認めるし、すさまじいとも思うが、相手は山だぞ。山というのは、サイクロプスよりもずっと大きく、ずっと重い。そんなもの、どのようにして

消し去るといふのだ。そんなことができるのであれば、神が起こす天変地異をおいて他にないだろう」

「そこまで大したものじゃないけど」

「やれるというなら、やってみせてくれ。もしできるなら、あらゆる責任は私がとろう」

んー……いや、できるんだろうけど。

あらゆる責任をとろうと言われると、少し尻込みする……できるからこそ、騙すみたいになって申し訳ないのだ。

なので、念を押す。

「本当に大丈夫？」

「竜人族に二言はない。もともと、山を消すなどということは、ありえないという風に思ってはいるがな。もしそんなことができるなら、一つだけ何でも言うことを聞いてやるといふ約束さえしたっていい」

なぜフラグを補強する……

これでさらなる念押しが必要になってしまったじゃないか。

「……本当にできちゃうと思うから、あんまり自分の首を絞めるようなことは言わない方がいいと思うけど、それでも本当に大丈夫？」
「何度聞けば気が済むのだ。本当に、大丈夫だと言っているだろう。我ら竜人族は嘘をつかないし、約束は必ず守る。まあ、それでも、いくら考えたところであの山を一瞬で消すなどということはありえないはずもないがな」

敗北フラグがすごい勢いで建てられていく。

この子、発言全部がフラグなんじゃないか？

僕よりよっぽどベテランの建築家である。ただしフラグの。

念を押せば押すほどレヴィアを追い詰めていく感じがすさまじい。
この子は自分の首を絞めるプロなのか。
どんな専門分野だ。

まあ、それだけありえないっていうことだと思っただけけれど……

「どうした、怖じ気づいたのか。私にここまで言わせてたのだ。も
しできないなどと言ったら、相応のものももらうぞ。たとえば
それとか」

レヴィアが僕を指さす。

正確には 僕の着ているジャージを、だ。

「見たことがない服だ。素材も、綿でも麻でもない。光沢はあるが、
絹という感じでもない。よほど高価な物に違いがないと、私の優れ
た観察眼は判断したぞ」

「どやあ、という感じで言うが、その観察眼は大したことがなかつ
た。」

上下で六百円のポリエステル製ジャージである。

彼女が何でも一つだけ言うことを聞くと言っているのに、これでは
賭けの対価が釣り合わない。

まあ、整地はできるし、実際に今も山全体を覆うように青白く発
光するキューブ状の何かが見界には出現しているので、もう整地ま
であとはクリッカー一回という感じだ。

そもそも賭けに負けないのだから対価がフェアかどうかはもはや
関係ないのだけれど……

一応、言い添えておくことにする。

「この服はそんなに価値のあるものじゃないよ」

「いや、そんなはずはない。少なくとも、大陸にあるすべての国を渡り歩いてきた私が、今まで一度も見なかったことのない布だ。……ははあ、わかったぞ。さては価値を隠そうとしているな？」

「いやいや、そんなことはなくって、本当に価値がないんだけど」「わかったわかった。存外交渉上手だな、お前も。ならばこうしよう、もしもあの山を一瞬で整地できることがあるとすれば、今後、お前の奴隷となりお前のことはご主人様と呼ばう。誇り高く、強く、孤高である存在がお前に永遠の忠誠を誓うのだ。ここまで譲歩されれば、その珍しい服を賭けざるをえまい？」

「……あの、今ならまだ間に合うから、そういった、奴隷になるとかいう約束事はやめにした方がいいんじゃないかな」

「いいや、竜人族は発言を撤回しない。一度決めたならば生命を懸けて貫き通すのが、我らの生き様だ。それに、それにだ、何度も言うが、私は今まで大陸中の国々を旅してきたし、その中ではさまざまに戦士や魔術師だって見てきた。その私が『山を一瞬で消し去るような技術は存在しない』と言っているのだ。この判断は、間違いがない。そう確信している」

「意地になつてるだけじゃあ」

「そうではない。私は、私の経歴を信じているのだ」

どうやら絶対の自信を持っているようだった。

なるほど、戦士も魔術師も、山を一瞬で消し去るなんていうことは、できないだろう。

どんな剣技もどんな魔術もそこまでの範囲や威力をもっていると考えるにくい。

まして魔術やなんかが対モンスターの手段としてのみ考えられているならばなおさらだ。

地形を変える魔術。

そう述べてしまえば、なるほどそれはすさまじい境地だという感想を抱かざるを得ない。

しかし整地という技術は、それらとは成り立ちが違う。

もとより地形を変えるための機能であり、地形を変えられないと使い物にならない技術なのだ。

彼女の敗因は、都市開発系ゲームを知らなかったことである。

……さらなる説得を試みてもいいのだが、話せば話すほどドツポにはまっていく感じがある。

彼女が『わかった。ではもし整地できたらこの命を捧げよう』とか言ってリアル自殺しだす前に止めるのが吉だろう。

「じゃあ、やるよ」

「うむ、やるといい。……おっと、一瞬だからな。私は私の言葉に責任を持つ。だから、お前も一瞬だという自分の発言には責任をとるべきだ。そうだよな！」

ここに来て僕があまりにゆらがないので、ちょっとだけ不安になったように彼女は言う。

まあ、負けたって僕は服を失うだけだ。

「いいよ」

安請け合いして、整地を開始する。

大したことはなかった。

山に合わさった青白いキューブ状の何かピカッと光る。

すると、山がジュッ、という音を立てて、消滅した。

一瞬過ぎて描写の余地もない。

僕は申し訳ない顔でレヴィアを見た。

レヴィアは口を固く結び、目を泳がせたまま、プルプルと全身を小刻みに震わせていた。

……なんだこの申し訳なさは。

僕は視界右下に次々と『土』を取得しました』『木』を取得しました』『石』を取得しました』などの文字が出たり消えたりするのを見ながら、言葉を探した。

しかし見つからず。

最初に沈黙を破ったのは、レヴィアだった。

「私に間違いはなかった」

プルプル震えたまま、どこか言い訳くさく続ける。

「私は、そう、お前が山すらも一瞬で消し去れる大魔術師だということから最初から見抜いていたのだ！ だからこうして奴隷になるなど口走ったのだ！ つまり、最初から全部計画通りということになるな！」

絶対嘘だった。

目が泳ぎすぎである。

一応フォローしておく。

「……いや、あの、そんなに気にしなくってもいいんだけど」

「竜人族は嘘をつかない！」

今の言い訳は嘘にカウントされないのだろうか……
嘘とはなんだ。

哲学的なことを考える僕に向けて、彼女は。
それはそれは、恥辱の果ての敗北宣言のように。

「……これから誠心誠意お仕えます、ご主人様」

震えた声に、真っ赤な顔で、レヴィアは親の仇を見るように僕を
見ながら、言った。

2話（後書き）

2016/01/21

いただいた感想をもとに修正

3話

「とりあえずサイクロプス討伐をギルドに報告しなくてはいけないのですご主人様。だが、実質的に倒したのはご主人様ですので、ご主人様が平らにした道を通り、一緒に来てくださいますかご主人様」

そんなようなことを言われて、今度こそ彼女と街に行くことになった。

やけくそさを感じさせる口調である。

もう『ご主人様』が語尾みたくなってるじゃねーか。

「あの本当……無理しなくっていいんだけど」

「無理などしていない。竜人族は無理などしない」

これ以上会話をしても、譲歩を引き出せそうもなかった。

羞恥に打ち震え屈辱を噛みしめながら無理をして従順っぽく振る舞っているレヴィアを伴い、僕は街を目指すことにした。

「街はここから、割合近い場所にあるぞご主人様。二時間ほど歩けば着くぞご主人様」

いや、徒歩二時間は近くねーよ。

と、思うのは僕の、つまり現代人の感覚であり、レヴィアなどのこの世界の人にとっては『徒歩二時間』というのは遠くもなんともないのかもしれない。

この世界の人。

僕は未だに、この世界がどんなところか、想像を巡らせられないでいる。

だが、その疑問も街に入れば解決するだろう。

街には様々な人が生活をしているはずだ。

旅行でもなんでもそうだが、現地の人の生活から、その世界観を推し量るのはそう難しいことではないだろう。

まあ、レヴィアがモンスター退治、しかも結構な強敵を相手にするのに、装備していたのが剣と鎧という時点で、そこまでの文明レベルは期待できない。

せいぜい中世か、もっと昔かだろう。

それにしだって

「そういえば、なんで強敵っぽい魔物に挑むのに、一人きりだったの？」

数は力だ。

当たり前の話である。

一人よりも二人、二人よりも三人。強敵に挑むのであれば、文明レベルがどうあれ集団を構成したいと思うのは、人の常ではないのだろうか。

レヴィアはただの一人だった。

仲間が潜んでいた様子も、洞窟内にいた様子も、ない。

今こうして、僕と二人きりで街を目指しているのが、何よりの証拠だろう。

ちらりと見れば、レヴィアは視線を泳がせていた。
わかりやすい。

何かを隠している　と、それは言葉で言うよりもよほど雄弁な
表現力で僕に伝えてきた。

「いや、その」

たっぷり十秒ほど口ごもった後、レヴィアが言いにくそうに口を
開く。

「……竜人族だからな！」

……理由になるのか、それ。

便利だなあ、竜人族。

この先どのような疑問や不可解を他者に感じさせることがあるう
とも、彼女は「竜人族なら仕方ないな！」と押し切っていくのだら
うか。

ここまで来るともう、竜人族というものの正式な定義が気になっ
てくる展開である。

まあ、それも、街にたどり着いてからでいいだろう。

街には様々な人種だって、いるはずなのだ。少なくともレヴィア
がサイクロプス討伐を受けたギルドぐらいはあるはずで、そこには
竜人族だけではなく、様々な種族がいるというのは想像に難くない。

まあ、この世界にどのぐらいの人種がいるかはわからないので、
人間と竜人族だけしかないというような展開だって、考えられる
のだけだ。

その後、一時間ほど無言で歩いた。

僕が没コミュニケーションというのもあるが、無言の理由は主にレヴィアにある。

かわいそうなのだ。

彼女は僕にしまった約束を心底後悔しているようだった。それでもプライドのせいで撤回してとは言えないらしい。

まあ、この世界に放り出された僕としては案内役が欲しいところだったので、レヴィアの存在はありがたいのだけれど、街に着いて今後の方針が固まったら、早めに解放してあげたい気持ちでもあった。

そんなわけで、何を話しかけても痛々しいという状態のレヴィアと並んで歩く。

しばしして 街が、見えてきた。

見えてきたと、思う。

それは一見して、水に浮かぶ巨大な亀を思わせる建造物だった。

街一つを『建造物』と表現してしまうことに対し違和感を覚えななくてもないけれど、城壁でぐるりと囲まれた街はそれ自体が一つの要塞めいている。

城壁はドーム状になっており、もちろん、完全に上部をふさいではいないのだけれど、かなり上の方まで街をカバーしていた。

そんなものが堀の中にあるのだ。

どうにも跳ね橋が見えるのでそこから出入りできるのだろうが、あれを上げてしまえば、完全に要塞と化すだろうことが想像できる。

「あそこは人間族の大都市の一つだな」

それまで無言だったレヴィアが口を開く。

僕としては彼女にあまり触れないことで気まずさを緩和していたのだけれど、彼女の方は無言という状況に気まずさを覚えていたのかもしれない。

街が視界に入った途端に『ネタができた!』とばかりに、嬉しげな顔さえして突然話を始めた。

「入口は東西南北に一つずつ、計四つだ。百年前、魔王がいた時代に造られたもので、門さえ閉じれば、魔獣の軍勢の侵攻に耐えうるような、頑強な造りとなっている。内部では食料の自給自足が可能で、三ヶ月は籠城できる計算のようだな」

「ずいぶんと堅牢なんだね」

「そうだな! ちょっとやそつとでは攻め落とされないような、そういう場所だ。もっとも、今は戦争もないし、魔獣も時折ダンジョンからわき出る程度でしかないので、そういった堅牢さを見る機会はあまりないが」

ちよつと話に乗ったたら、すごく嬉しそうに反応された。

どうやら彼女は彼女で、沈黙に気まずさを覚えていたという予測は、当たっていたようだ。

悪いことをした。

で、悪いことついでに、ちよつと質問が浮かんだんだけど。

「なあ、街から煙が上がってない?」

煙というのは少々遠慮した表現かもしれない。

火柱が時折見えるので、『火の手が上がってない?』とか『中で燻製でも作ってるの?』という聞き方の方が、いくらか実情を表わすだろう。

すっげえモクモクしてる。

街はドーム状の城壁に囲まれている。

あの構造だと、火の手があがったらさぞかしよく燻されそうだった。

レヴィアが街に眼をこらす。

「……おかしいな。たしかに火の手には弱いであろうとは思ったが、そうそう大規模な火災が起こるような治安の悪い場所ではなかったはずだが。街は衛兵が見回っているし、火を扱うにしても個人宅ではまずしない。料理なども日に三度、所定の場所に近隣住民全員で集まって行なうほどの注意ぶりなのだ。燃えるというのは、まず考えにくいのだが」

「でも実際、煙は出てるっていうか ほら、見てよ。跳ね橋のところにも人が集まっている。必死に外に出ようとしているよ」

「……ふむ」

レヴィアが考えこむようにうつむいた。

そして、不意に顔を上げて。

「大事件ではないか!?!」

「そのようだね」

しかも、堅牢な造りが災いして、街から外に出る人たちの流れが妨げられている。

跳ね橋からあふれた人たちは、深い堀へと飛び込んでいるようだが、あの高さから落ちて、死なないまでも無傷で済むとは思えない。

僕は冷静に観察して、うなずく。

「……大事件だ」

「ぼんやりしている場合か！ ひ、避難を手伝わねば！ それとも、私たちも逃げるか！？」

逃げる。

まあ、現実的な選択肢だろうけれど

「いや、どうにかしてみよう」

「どのようにして！？ それともご主人様は、雨でも降らせることができるのか！？」

「それは無理だけれど……」

いや、資材さえあれば不可能とは言わないが。

今は無理だ。

今、できることと言えば

「城壁を崩して、大きな橋をかける」

土、木、石、砂などは大量に取得した。

山一つぶんある。

となれば 堀を埋めることも、新たに橋をかけることも、できるだろう。

城壁を崩すというのは、後から色々言われそうな気もするのだが。人命優先だ。

「僕が今から、跳ね橋の横に新しい橋を作るから、レヴィアはみんなに新しい橋を渡るよう呼びかけてくれ」

「わかった！」

二つ返事でレヴィアが走って行く。

僕は、意識を集中した。

まずは城壁を整地　　っと、危ない。橋が先だ。

今、城壁の内部には避難待ちの人々がひしめいていると思われる。そこでいきなり城壁を取り払ってしまったら、そこからお堀にダイブする人が続出してしまうことだろう。

そうなれば阪神優勝時の道頓堀である。

死者が出るかもしれない。

死者と云えば　　すでにお堀に落ちた人たちの救出だって、急務だろう。

よくよく注意してみれば、現在気温は高くはない。寒いと体を震わせるほどではないものの、水温は低いだろう。

また、ケガをした人だって、少なからずいるはずだ。

ということだ　　やることは三つだ。

一、お堀に落ちた人たちのために浮島……という用途で道路を設置する。

二、お堀に橋をかける。

三、城壁を整地して、中の人を出す。

合計五秒もあればできるだろうか。

それぞれの作業は一瞬だけれど、多くの建物を造るのには、一回クリックというか、念じる必要があるのだ。

短い時間だが、一刻一秒が人の生死を分けるかもしれない。

思考は終わり、穴はない。

ならば、実行に移そうか。

お堀に道路をいくつか浮かべる。

人をつぶさないように気をつけて配置する。

その途中で、『水の上に道路つてきちんと浮かぶのか？』という疑問がわいた。

しかし、結果として、疑問はただの杞憂だったことを知る。

石と土をいくらか消費し、道路はきちんと水上に設置される。

僕が設置する建築オブジェクトは、細かい物理現象に左右されないようだ。

普通、水の上に道路を置いたら、沈む。

そういった気遣いは必要ないらしく、道路は沈みも漂いもしないで、僕が設置した位置にそのまま固定されていた。

これで浮島は問題ないだろう。

次は、橋だ。

これにも、問題なく、成功する。

石、木という素材を消費。

バシツと叩きつけるような音がして、城壁の空いていない部分に橋がかかる。

あとは、城壁を整地するだけだ。

意識を集中し、城壁に狙いを定める。
が、ここでもわかったことが一つ。

僕には細かい作業ができないらしい。

というのも、『城壁を崩そう』と思ったら、『城壁の任意の一部分』だけではなく、『城壁全部』を整地するしか、できないようなのだ。

すでに設置されている建築オブジェクトの一部を消したり消さなかつたりはできない。

……仕方ない。逆に考えれば『オブジェクト全体が自動ロックオンされる』ということは、『オブジェクトの周辺を巻きこまずに済む』ということだ。

人でひしめきあっているはずの城壁を整地するのに、人を巻きこむ心配がないというように考え方を換えよう。

が、その事前準備として、僕は、城壁を囲むお堀をまんべんなくふさぐようにして、橋を造る。

これでどこから人があふれても大丈夫のはずだ。

準備を万全にしたうえで。

僕は 城壁を整地した。

ジュ、という音を立てて、城壁が消滅する。

すると、中から人があふれ出してきた 予想以上に多くの人が、街の外に出ようとしていたらしい。

混乱よりも、災害から逃れたい恐怖が先立つたのだろう。

街人たちは迷うことなく一目散に脱出を開始した。

命が助かるという事実の前には、『なんで急に城壁が消えたのか』とか『なんで急に堀が埋まっているのか』とかいうのは些細な問題なのだろう。

いや、あとで気にされそうな気はするけど。

その時は レヴィアに表に立つてもらうか、何もしてないぶつて黙っていようと思った。

目立つのは苦手だ。

避難行動は、見ているだけで一段落した。

全員が街の外へと走り、ある程度の距離を空け止まる。

きつと、自分たちが今までいた街の様子が気になったのだろう。

……だが、見てしまった景色はきつと、彼らにさらなる絶望を与えたことだろう。

街は、燃えていた。

なぜこんなことになったのか、この世界に来たばかりの僕にはわかりようはずもない。

けれど　それが一ヶ月や二ヶ月で復興できる程度の被害には、
とうてい思えなかった。

誰しもが無念そうな顔をしている。

あるいは、悔しそうな顔をしていた。

泣き出す家族や、膝から崩れ落ちる男性がいた。

予想通り、様々な人種を見ることは叶った。

だが、彼らの生活を見て、この世界の文化レベルを推し量るとい
うことは、どうやら無理になってしまったようだった。

何もない。

すべて、炎と灰の中だ。

完全に他人事のはずなのに、僕の心にも途方もない虚無感のし
かかる。

いわんや、この世界の人をや、だ。

誰しもが街を見守る中。

街の炎から躍り出る、黒い影があった。

影は、遠くから見ている僕の視界には、最初、ただよう黒煙のよ
うに映った。

目をこらせば、それが女の子であることがわかる。

遠近法を差し引いて見るならば、すらりとした背の高い女性だ。

目を惹くのは、異常に長い髪だろうか　真っ黒なその毛髪は、女性の身長をすら超えて地面にくっついて……というか、影に同化していた。

服装もそつだ。

スリットの多い、黒いドレス。

その裾は長く、長く、あまりに長く、やはり影に同化していた。

黒い瞳が周囲を見る。

睥睨とでも表現したくなるような、高飛車さと傲慢さ、それ以上に他者を冷酷に値踏みする残酷さをもった、恐ろしい視線だった。

そいつが、高らかに、歌い上げるように言う。

「はあい、弱者エキストラのみなさん？　今ここに、あたし、魔王マナフの復活を宣言するわ！　泣いたりわめいたりして場を湧かせなさい？」

聞く者の魂を魅了するような美声。

この時、僕が感じるべきは、魔王復活という一大事件に対する恐怖とか、どうにもそいつが独力で行なったらしい『街一つを滅ぼす』という凶行に対する絶望とか、あるいはその声のあまりに蠱惑的なのに興奮なんかを覚えたって、いいかもしれない。

しかし、僕が感じてたのは、そのどれとも違うものだった。

いや、まあ、その。

魔王復活が一大事件なのはわかるんだけど。

僕にとっての一大事件っていうのは、むしろそこじゃなくて。

「この世界、ファンタジーRPGじゃねーか！」

魔王復活。

燃える街。

逃げ惑う人々。

それらを総合的に考慮したうえでどうしようもなく動かしがたくなつた現状。

つまるところ。

都市開発系ゲームの能力を持っているはずの僕が、ファンタジーRPGに来てしまったという違和感に、僕は叫ばざるを得なかった。

4話

「うるさいわねアナタ。せっかくの主演舞台に水を差さないでくださいさらない?」

叫んだせいで魔王に目を付けられてしまった。

むべなるかな。この水を打ったように静まりかえり、遠くで街が焼け落ちる音しか聞こえない静寂の中、おもむろに叫び始めたら注目を集めるに決まってるのである。

魔王マナフが僕に近付いてくる。

その歩調は非常にゆっくりしたものだった。

今から回れ右してダッシュすれば余裕で置き去りにできるだろう。

しかし そんな程度で逃げ切れるとは、とても思えない。

ファンタジーRPGにおけるボスはだいたいステータスがやばい。彼女らはたった一人で時には勇者12人とかを同時に相手取るのだ。それ相応の能力があると相場が決まっているのである。

だから僕はあきらめて、魔王が寄ってくるのを待ち受けた。

逃げる無為を悟ったというだけではない。

魔王というのは、驚異的な存在である。

たかがモンスターとは一線を画するのであるうことは、観衆の中にいる武装した人々が、先ほどからピクリとも動けずに固まっていることからわかる。

鎧や剣では話にならない。
兵器があっても戦いたくない。

そういう存在が、魔王と呼ばれる人型の災害なのだ。

もちろん僕は冒険者でもなんでもなく、元いた世界で武術を修めているなんていうこともありえようはずがなく、強いて言うなら職業も不定であるところのただの人だ。

魔王に勝てるはずがない。

だから、僕は僕に対し、こう思うのだ　お前、もっと怖がれよ、と。

怖がりたい。

しかし　ここからシリアスなシーンを展開するのが無理であることを、僕は悟ってしまっていたのである。

だって。

整地するためのアイコンが魔王にびったり重なっているのだ……！

なんていう空気ブレイカー。

あ、整地します？　いつでも平らにできますよ？

均す？　ねえ均す？

あのアイコンが全力で、そんな提案をしてくるのだ。

雰囲気を読まずにピカピカと青白い光を放つアレのせいで、僕は悲しんだり絶望したり恐怖したりするよりも、笑いをこらえるのに大変なのである。

「あら、どうしたのいきなり黙っちゃって。もっと元気に逃げたり
怯えたりしなさいよ」

魔王がついに正面まで来た。

アイコンは『いつでもいけます』とばかりにピカピカ明滅してい
る。

……どうしよう。

街を滅ぼしての登場。

『どうしたのいきなり黙っちゃって。もっと元気に（以下略』とか
いう、自分が上位と信じて疑わない発言。

にもかかわらず 消滅までワンクリックというのは、あんまり
にも、あんまりだ。

「つまんないわねえ、人間。レスポンスのない観客とか、あたしの
舞台にはいららないんだけど」

僕があんまりにも黙っているもので、魔王マナフは苛立ったよう
だ。

このままだと彼女があまりにも痛々しい。

かと言ってひと思いに整地してあげることにも、抵抗がある。

没コミュニケーションな魔獣ならともかく、彼女とは会話ができ
る。

そういった相手を整地してしまうことについて何とも思わないほ

ど、僕は冷めてはいないのだ。

いや、他にどうするかというのは、今まさに考え中なわけなのだから。

方策を思いつく前に、とりあえず彼女がこれ以上恥をかかなくて済むように助言など試みる。

「あの、一つ、アドバイスがあるんだけど……」

「何かしら？ 人間の分際であたしにアドバイス？ 面白いわね」

「それぞれ。そういう……強そうな発言は、やめた方がいいと思うんだ」

「へえ、どうして？」

「負けた時恥ずかしいから」

ザワツ……！！

……なぜだろう、周囲が一気にざわめきはじめた。

魔王マナフに至っては、こちらを見下すような視線を僕へ向けて彼女の身長は僕より低いけれど 妖艶に舌なめずりをする。

紅潮した頬は、まるで探していたお宝に巡り会ったコレクターのようだ。

「面白いじゃない人間。アナタ、そんなに強そうには見えないけど、あたしに勝てるかも？」

「いやあ、その、勝負にすらならないと思うというか」

「言っわねえ……そこまで言うからには、勝算があるのね？ あたしを満足させるほどの強さを、あなたは見せてくれるのかしら？」

「戦つのが好きで言ってるんだったら、満足はできないと思う……
戦いにすらならないから」

トヨトヨトヨ……

周囲がどよめき始めた。

……なんだろう、雰囲気がおかしい。

僕は何も嘘を言っていないのに、なんだか周囲から『あいつ何言
つてんだ』みたいな視線を向けられている気がする。

魔王マナフなんて、ますます楽しげに、興奮した様子でいるし。
真摯な提案のつもりが悲しいすれ違いをしている感じた。

41

「このあたしを、戦いにもならないほど一瞬で倒せるとでも言うの
かしら？」

魔王マナフが聞いてきた。

だから僕は、素直に答える。

「まあ、そうだね」

周囲が静かにヒートアップしていくのがわかった。

僕は困り果てるばかりである。

まあ、なんだ、その、たぶんこの異常事態は僕がもつと違った表現をすれば避けられたような気がしないでもないのだけれど、他に言いようが思いつかなかったので致し方ない。

不本意にも目立ってしまったている。

まずいなあ、苦手なんだよなあ、注目されるの。

誰か僕より目立ってくれそうな人材が、このシーンに割りこんでくれないものかと願う。

その願いが通じたのか

「待てい！」

と、僕と魔王の間に割って入るように、鎧姿の小さな少女が現れた。

重そうな剣に、こめかみの当たりからそれぞれ生えた角。腰あたりからのぞく爬虫類めいた太い尻尾などの特徴

まさしく住民の避難誘導に行ってもらっていた、レヴィアの帰還だった。

彼女が割りこんだお陰で、魔王マナフとの距離ができています。

レヴィアは大きな剣を魔王に突きつけるようにしながら、叫んだ。

「お前！ それ以上この、ええと、なんだ、その……」
「ご……ご主人様……に手を出すと許さんぞ！」

すさまじい剣幕である。

ご主人様、のところだけやたらと声が小さかったが、それをふまえても、充分に気迫のこもった一喝だった。

魔王マナフは突如割りこんだレヴィアを見て、妖艶に笑う。

「……なるほど、仲間に竜人族がいるからこそその自信だったっていうわけね」

それは不可解な現象に答えを見つけた、安堵の響きを伴う声だった。

竜人族ってそこまですごいの？ と視線で問いかける。
レヴィアは胸を張って答えた。

「ふふん、聞いて驚くがいい。我が竜人族は、その頑強さ、その勇壮さ、その力強さにおいて比類なしと呼ばれる種族であるぞ！ この世界ができた時、人間の守護者として神が創りたもうた種族の二つのうち一つ、ドラゴンこそが我が始祖である！ つまり、竜人族は誇り高く、格式高く、そして強いのだ！ 魔王など、我が前では恐るるに足らず！」

見事な名乗りである。

ただ、先ほど、彼女が僕を『ご主人様』と呼ぶに至った経緯を思いつと……

……見事な名乗りというか、堂に入った敗北フラグ建てだという感想の方が先に来ってしまう。

魔王マナフが肩をすくめる。

「あーはいはい。強い強い。……何よもう、ムカつくお子様ね。これだから竜は嫌いなものよ。上から目線っていうか、自分だけが強い

みたいな。アンタ友達いないでしょ」

「う、う、う、うるさいな！ そんなの今、関係なかるう！？」

大声で話を逸らそうとするレヴィアであった。

……が、レヴィアに友達いなさそうだなというのは、僕も思わな
いでもなかった。

だって彼女は一人だったし。

もし友達作りの能力があれば、そのようなことにはならなかった
だろう。

そう思うと、彼女のことを愛おしく思えてくる。

「おいご主人様！ なぜ優しい視線を向ける！」

レヴィアに怒られてしまった。

魔王マナフが肩をすくめる。

「ま、とにかく？ 竜人族のお子様を倒せば、障害はなくなるわけ
ね？ いいわ。演目の前に迷惑なオーディエンスにご退場願
うのも、主演女優の腕の見せ所よね」

魔王から発散される重圧が増す。

レヴィアが巨大な剣を構え直す。

「おい、ご主人様、やっていいな？」

一応という調子での確認だった。

本人はとっくにやる気なのが雰囲気だけでもわかる。

その場のノリで決まったただけ感があるとはいえ、一応主人である
僕の顔を立てるための問いかけだろう。

義理堅い少女だ。

ただ、僕は別に義理堅くない。

「やらなくていいよ」

「なぜだ!？」

いや、だつてさ。

無理に強敵に挑んでケガすることないじゃん。

僕は『熱いバトル』とか『しのぎを削る戦い』みたいなものを否定するつもりはない。

漫画をはじめ、様々な物語でそういったものを堪能する時だって、人並にはある。

むしろ、ここからバトルをするのはファンタジーRPG的に正しいだろうとさえ感じるのだ。

でも、僕がやるつもりなのは都市開発系のゲームである。バトルはいらぬ。

「僕がやるから、さがってて」

そう言って前に出る。

レヴィアは不満そうにしながらも、下がってくれた。対照的に、楽しむような顔になったのはマナフだ。

「あらあら、いいのかしら？ アナタ、悪いけどその竜人族よりだいぶ弱そうに見えるわよ」

その観察眼は正しい。

たぶん、僕はこの世界の基準に照らし合わせれば相当弱い。

サイクロプスを倒した時のレヴィアの発言から、この世界はレベル制だとわかっている。

僕の強さをレベルに直せば、一を下回るだろう。

剣術も魔法もわからないのだ。

だから、僕をいつでも殺せる雑魚風に扱う魔王に非はない。

彼女の観察眼は正しい。

その上で、強いて言うのならば

システムが違う。

ただそれだけが、魔王の不運だった。

まあ、不運なだけで整地されるというのもかわいそうというか、僕の側にコミュニケーションをとれる生命体を消去するだけの覚悟がない。

なので、ここは 先ほどから考えて、今思いついた方策を試そう。

「どついつ手段を見せてくれるのかしら？ ……楽しみだわ。魔法

？ 剣術？ それとも弓や隠密術だったりするのかしら？」

「いいや、どれでもない。僕が見せるのは 建築だ」

僕は、魔王マナフの周囲に建築を開始した。

建築　それは、カーソルの合った位置に、資材を消費して建物を建てる行為である。

先ほど、道路や橋を造った手法である。

建造するのは牢獄だ。

ただし、まっとうな意味での牢獄ではない。

僕が建造できる建物の中には『留置場』というものもあるが、それに人を収容するには手続きが必要だったはずなので、突発的に拘束する必要がある今回、建てるべきはそれではないだろう。

住居だ。

住居を四つ、マナフの周囲を取り囲むように建てる。

魔王の上部には、道路を置いた。

これで、牢獄く住居仕立て。そつと道路を添えてくの完成だった。

「ちょっと何よコレ！？　こんな壁、あたしの前には　って壊れない！？　なんで！？　転移もできないじゃない！？　どうなったんのよ！？」

姿を完全に覆い隠されたマナフが叫ぶ。

……壊れないのか。

これは、思ってもみなかった成功と言えるだろう。

壊されることを予想し、壊れた瞬間にまた増築しようと思っていた。

幸いにも、資材は大量にあるのだ。

そして建築は一瞬でできる。

だから、何度も何度も何度も、資材が尽きるか魔王があきらめるかの勝負を強いられるものと、覚悟をしていたぐらいだったのだけ

れど。

手間がかからない結果になって本当によかった。ひよっとしたら、僕の建てた建物は、僕が整地する以外に破壊できないのかもしれない。

あともう一つ。

転移ができないというのは、正直あまり考えていなかったことだったけれど。

これにもなんとなく理屈をつけられないことはない。

転移というのは、おそらくこの世界の魔法だ。

僕の建てたものは、この世界のルールとは違うルールに基づいている。

だから、この世界の魔法では『通り抜ける』などの行為ができないのだろう。

しばらく、魔王マナフは抵抗していた。

しかし、ほどなくして、爆発音や打撃音が聞こえなくなる。

やらにしばらくすると。

「出してえ……出してよお……もう封印は嫌……くらいとこるやだあ……」

などという、何とも情けない声が聞こえてきた。

レヴィアが言う。

「……建築とは恐ろしいものなのだな」

ゾツとしたような声だった。

こうして僕は、建築という力の持つ無限の可能性、その一端を示す事ができた。

建造物の前には魔王さえ無力である。

魔王のすすり泣きを聞きながら、僕は空を見た。
そして思う。

ああ、なんて

なんて虚しく、後味の悪い勝利なんだ。

5話

「捕えたはいいが、コレをどうするつもりだ？」

レヴィアの問いに、現実的な思考を巡らせる。

魔王を捕まえた。

未だすすり泣きとか『ごめんなさいごめんなさいもうしないから出して暗いところはいやあ』とかいう声とかが聞こえている、牢獄
く住居仕立て。そつと道路を添えてくを見る。

魔王だ。

彼女のしたことは、街一つを焼き落としたという、人類未到の大
悪業である。

この後の彼女の処遇をどうするべきか、法律などに詳しい人の意
見を知りたい気もするのだが。

「あの」

悩んでいると、群衆の一人が歩み出てくる。

人間の、女性だ。

わざわざ人間だということ述べたのは、ここには多数の『ただ人間ではない存在』がいるからに他ならない。

耳が長くもなく、角も尻尾もなく、獣のような特徴を備えてもないその女性は、純粹な、人間族とでも呼称するべき人間だった。

身なりは、豪奢でこそないが品のいい、露出度の少ない服装だ。

戦う者の格好ではなさそうだと、群衆に紛れる冒険者っぽい一団と比べて、判断できた。

強いていうならば、文官。

つまるところ公務員っぽいおねーさんが、遠慮がちに、おずおずと僕とレヴィアの前に来る。

「こんにちは、わたくし、この街周辺を治めている領主なのですが……」

「はあ、こんにちは」

「本当にいらっしゃいますのね、魔王を鎧袖一触となされるお方が、そういった存在は子供に読み聞かせる物語だけの存在かと思っておりましたわ」

「……僕はそんな大それたものじゃないですけど」

「ご謙遜を。ところで勇者様、魔王をどうされるおつもりですか？」

「……何かよからぬ称号を頂いた気がする。」

「が、そこはいったんスルーしておこう。今論じるべき問題は、魔王のことだ。」

「処遇については困っています。手に余るというか」

「でしたら、わたくしどもの方で王都の魔術協会に連絡し、再封印ということも」

そう言った瞬間である。
牢獄の魔王が暴れ出した。

「封印はやだあ！ 封印はやだあ！」

完全にだだっ子だ。

……実は無害なんじゃないかという疑いが僕の中でいよいよ根強くなり始めている。
が、街の惨状を見れば、無害であるはずもないことは明白だった。
まあ、建物だったら僕がどうにかできるんだけど、人的被害は
なあ……

「ね、ねえ！ ねえってば！」

牢獄のようなものの中から、魔王マナフの声がする。
ビクリと身をすくませた領主の代わりに、僕が応じることにした。

「どうしたの？」

「ひょっとしてなんだけれど」

「言いよどむ。」

「そして。」

「あたしは悪い事をしたの？」

そんな。
的外れな質問をした。

人の住む街を滅ぼす。 それは悪い事に決まっている。
人の生命を危険にさらす。 もちろん、悪い事に決まっていた。
常識だ。
けれど、その常識を知らなかったのだと、魔王は言外に述べた。

「じゃあなんで街を滅ぼすような事をしたんだ」
思わず問いかける。

魔王マナフはきょとんとした、童女めいた声音で答えた。

「だってあいつら、あたしを封印するんだもの。閉じ込められるのは嫌いよ。だから、閉じ込められる前に消しちやおうって思ったの。いい考えでしょ？」

確信した。

閉じ込められることへの異常なまでの恐怖と、思いついた『素晴らしい考え』を何の検討もせずに実行する短絡。

この魔王は、ただの何も知らない子供だ。

見た目は大人、心は子供。

だからといってすべての行いが『子供なら仕方ない』と許されるわけではない。

が。
同情がわくのは事実だった。

見捨てるのは忍びないというか、ここで魔王をさっさと封印して
いただいても、それはそれで自分の中に罪悪感を残すことになりか
ねない。

建物にまつわる被害ぐらいならば、僕が苦勞なく代わってあげら
れるし。

人命を背負うことは、できないけれど。

……うん、だからそこが、僕が魔王を見捨てるか見捨てないかの
ボーダーなわけだ。

というわけで、提案。

「実は魔王をこのまま封印するのは、少しかわいそうに思ってるん
ですよ」

領主の女性は首をかしげる。

「……かわいそう、ですか？」

言われていることの意味がわからない、という様子だった。

まあ、この世界の人に『魔王がかわいそう』と言っても、ピンと
こないのだろう。

なのでそこは放置して、本題を切り出す。

「だから、もしも魔王マナフのやったことで死者がいなかった場合
は、魔王を助けてあげてほしいんです」

これが折衷案だった。

罪悪感を覚えず、遺恨を残さず、敵を作らない最善にして唯一の
方針だと、自分では思う。

命の責任はとれない。そんなものは、僕には重すぎる。だが、建物の責任ならば、とれるのだ。

むしろ壊れる前より文明的に、発展させることだってできるだろう。

まあ、問題ももちろんあって。

この提案に関して、魔王の納得が必要になるといことなのだが。

「それでいいかな、魔王？」

たずねる。

牢屋のようなものの中で、マナフはしばらく沈黙したあと。

「……わかったわ。人殺しはいけない。街を燃やすのも、いけない……覚えたわよ。一度言われれば、覚えるわ。うん、まだ納得はできないけど　悪い事をしたなら、反省しないとね」

物わかりのよさに驚く。

同時に、愕然ともした。

だって、一度言われれば覚えるという事は、今まで一度だって道徳を説かれる機会がなかったということになる。

むなしさとか、やりきれなさを覚えてしまう。

が、まだ交渉の途中だ。

頭の中身をリセットして、僕は領主に水を向ける。

「領主さんも、それでいいですか？」

「はあ……それが勇者様の思召しだとするならば、わたくしどもはかまいませんけれど……」

話はまとまる。

こうして 生存者のカウントが始まった。

カウントは、日が暮れるまでかった。

この間に僕にした作業は、堀を埋め尽くすようにかけていた橋を一部撤去し、堀に設置した浮島から階段を伸ばしたぐらいだ。

つまり、堀に落下した人たちを救助するための道造り。

実際の救助は冒険者と衛兵たちが行なった。

その後は領主さん指揮のもと、衛兵たちが街人を回って数を数えたり、行方不明になっている家族がいないかを聞いて回っていた。

街の人は、全部で三万人らしい。

街の広さから見れば、やや少ないのではないだろうか 都市開発ゲームを好む僕からすればそのように感じられる人数だ。

このあたりはただっ広い地形に反して、街がポツンと一つきりあるだけだというのも、やはり少し思うところがある。

たぶん魔物のせいで居住区を狭くせざるを得ないのだろうけれど、東側に広がる森とか、そこらに流れる川とかをもっと利用すれば、もっと豊かな生活が送れそうな気がした。

そつだ、この街には多くの改善点がある。

いずれも魔物との兼ね合いや技術力、資材確保などの問題のせい
でできない改善だろうけれど、僕の能力があれば、この街を世界一
の都市にすることだって、可能だろう。

僕は都市開発をしたい。

生存者確認中、色々な景色を見ていて、強く思った。

欲望らしい欲望のない僕だけれど、これだけは確かな、はっきり
とした僕の欲望だった。

復興を手伝うついでに、少し開発や拡張もさせてもらえないだろ
うか？

カウントが終わったら結果はどうあれそのように提案しようと思
いに秘める。

ちょうど、カウントを終えたらしい領主のおねーさんが近付いて
くるところだった。

彼女は僕の目の前まで来る。

そして、驚いたような顔で。

「死者、いません」

信じられない奇跡を口にするように、そつ述べた。

……僕も、驚く。

「……それは何よりです。正直なところ、これだけの災害で死者がいないとは、僕も信じ切れていなかったんですけど」

「ええ。まさに、神の思し召しとしか思えませんわ。……ハッ、もしかして、あなたは、勇者様ではなく、もっと上位の……天にまします神が、人の姿で降りておいでになった姿では……」

一瞬にして勇者から神にランクアップしてしまった。
さすがにその称号は戴けない。

「僕はそんなんじゃないやありません。ちょっと建築が得意なだけです」
「そうですね……だって、あなた様が堀に足場や橋を造ってくださいったお陰で、死者が出ずに済んだのですもの……そもそも！一瞬で建築物を創り上げるなんて、どのような魔術師でも不可能ですわ！」

盛り上がる領主のおねーさんである。話聞けよ。

その類は興奮で上気しており、色っぽい。

だが、思考の夢見がちさに僕はひきつつた笑いで話題を逸らすだけが精一杯だった。

「あの、魔王を解放しても？」

「はい。すべてはあなた様の思し召しのままに」

ひざまずかれた。

年上の、美人の、街一つ治めるような身分の高いおねーさんに、ひざまずかれた。

……あの、領主のおねーさんに影響されて周辺住民の皆様までひざまずいているのですが。そういうのやめていただきたいのですが。三万人が神々しいものでも見るような顔でこちらに礼をするとい

うのは、気持ちよさもないではないけれど、かなり重圧もあるのだ。何とかしてほしいという気持ちを込めて、唯一ひざまずいていないレヴィアを見る。

彼女は。

「神ならば竜人族たる我が主人としてふさわしいな！ 私は最初からわかっていたぞ！」

……彼女はダメだ。

頼りにならないよ。

僕はつとめて気にしないようにして、魔王を取り囲む住居を整地していく。

解放した途端に暴れられることも考慮して、いつでも増築できる心構えでいたが

無駄だったようだ。

魔王は地面にぺたんとして座り込んだまま、僕を見上げていた。

その目は赤く腫れている。

彼女のすすり泣きが解放を促すための『フリ』なんかじゃなく、本物だったということがわかって、心が痛む。

僕は魔王マナフに近寄って、しゃがみこんだ。

彼女はビクリと体をすくませる。

「な、何よお……あたし、ちゃんと反省してるから、もう怒らない

「でよお……」

子供か。

いや、まあ、中身が子供なんだろうなというのは、わかっていたのだけれど。今になってようやく実感を伴って確信した感じだ。

僕はあやすように告げる。

「君はもう、人に迷惑をかけない限り自由みたいだけど、これからどうする？」

「……舞台女優やりたい」

「……………えっと」

「百年前に見たの。舞台女優。みんなから愛されて、いっぱい光当たってて、大きな舞台で自由に動いて、すごく綺麗だった。だからあたしは舞台女優やりたいの。……暗いところに身動きもできない状態で閉じ込められるのは、もう嫌」

「具体的にはどうするの？」

「……わかんない。難しい事は、アナタが考えてよ。ついていくから」

「マネージャー役を僕にやれと、そう仰るのか」

「マネージャー？」

「ああ、うん、芸能人とかのスケジュールを管理したりする人……だっけな？ ふむ……」

僕についてくる。

「どうやらそれが、魔王マナフの結論らしい。」

魔王の管理かあ。

正直なところ僕の手に残るお役目のようにも思うのだけれど。

どうしようか、という疑問を込めてレヴィアを見た。

彼女はうなずく。

「それがよかるう。別に力を失ったわけでも拘束されているわけでもないのだ。野放しすればいらん混乱が起きる……ご主人様であれば監視役にちょうどいいな」

……ああ、なるほど。

野放しにできない。すればいらぬ混乱が起きる。確かにその意見はもつともだ。

だから魔王を管理下に置くことに、理論的な反論は難しく、受け入れるしかなさそうだ。

いや、それにしても。

遺恨やストレスを抱え込まないような立ち回りをしたつもりだったが

その代わりに魔王を抱え込むことになるうとは、思ってもいなかった。

6話

「ところでご主人様はこれからどうするのだ？」

レヴィアからそのように問いかけられたのは、夜が更けてきたころだった。

僕の周囲にはレヴィアとマナフだけがいた。

領主のおねーさんはいない。街人たちのところで、領主たる仕事をこなしている。

街人たちは今、今後どうするかについての意見交換をしている。

というのも、夜が深くなってきたことで『今晚の寢床』という現実的な問題を彼らが意識するに至ったからだ。

街は、壊れている。

火の手はもう上がっていないものの、簡単に家に戻れる状況でもない。

無理して家屋に戻って眠れば、焼けてもろくなった建物の倒壊に巻きこまれることだって、ありうるだろう。

今後の暮らし、復興のプラン、その場合の役割分担。そのようなリアルな話を、彼らはしているのであった。

一方、僕の中には、あるシナリオがあった。

このまま領主のおねーさんに『建物の復興なら僕がやりますよ』と提案し、その流れで都市の開発に移行するというプランである。

こつすることでは僕は、きつと本来行くべきだった都市開発ルートに入れるのだ。

僕は元来、戦うようなゲームは苦手なのである。

農場経営とか、都市経営とか、村落経営とか、ハンバーガーショップ経営とかが好みだ。

勇者よりも国王。

冒険者よりも依頼人。

ラスボスよりも黒幕。

それこそが僕の好む立ち位置なのである。

……が、そこらへんの事情を理解してもらうには、『ゲーム』というものに対する僕と同レベルの理解が必要になるだろう。

レヴィアがゲームに詳しいとは思えないので、少し省略して伝えることにする。

「僕はこの街にとどまるつもりだよ」

結局、そういうことになるだろう。

冒険拒否。

RPG拒否。

ファンタジー拒否。

それが僕の考える、これからの生活だった。

レヴィアは困ったような顔をする。

「冒険をしないのか……？ その、世界を見て回ったりなどは」

「するつもりはないなあ……というか、する理由が、今のところな

い

「う、む、む……実はだな、私はとある探し物があって旅をしている最中だったのだ。だから、ご主人様が旅に出ないのはかなり困るというか」

「……別に僕に気にせず自由にしていけど」

「一度従うと決めたのだ。簡単に反故にはしない」

「竜人族だから？」

「そう、竜人族だから、だ」

相変わらず頑固である。

僕の奴隷になり、僕をご主人様と呼ぶなんていうのは、言ってしまえばただの口約束だ。

守る義務も強制力もない。

それを彼女はかたくなに守り続けるという。

その理由が、『竜人族だから』

……さすがに気になってたずねた。

「竜人族ってなんなの？」

彼女は説明が面倒な時にこれさえ言うっておけば相手を黙らせることができる切り札として、よく『竜人族』という己の種族を述べる。この世界の人にはひよつとしたらそれで通じるのかもしれないが、僕にはよくわからなかった。

……まあ、彼女がうまく説明できないことを『竜人族だからな！』という発言の勢いで強引に誤魔化しているだけという線が強いようにも思っただけれど。

しかしレヴィアは、僕の予想を裏切るように。

「世界に一人しか観測されていない種族であり　私は、最後の生き残りなのだ」

真面目なトーンで、話をする。

「竜人族がなんなのかというのは、実のところ、私も知りたかったりする。伝承にはいくつもの話があり、高潔で、強く、約束を破らず、誓いを違えず、時にはその不器用な生き方で自らを危険にさらすこともあるが、命より誇りを大切にすると　世界を巡り、そういった種族だということがわかってる」

「……だから一度口にしたことを曲げないの？」
「そうだ。竜人族がなんなのか、私にはわからない。だから、伝承にある姿を模倣することで、私は自身の『竜人族である』という矜持を守っているのだ」

……なるほどそういう事情があったのか。
しかし、伝承に残るものなんて、支離滅裂で、美談だらけで、とてもリアルな人間像じゃないように思えるのだけれど。

実際、約束を違えないためには嘘が必要になる時だってあるだろうし、高潔であるためには約束を破ることだってありうるだろう。

破綻したキャラクター性。

不器用すぎる生き方。

なるほど、だいたいの無茶や不可解は『竜人族だからな』で片付くわけである。

伝承通りの生き方はあまりに無茶で、不可解だ。

「……そこまでして守るものなのかなあ、その『竜人族』とやらの矜持は」

「まあ、賢い生き方でないのは私もうすうす勘付いてはいる。……しかし私は、あくまでも竜人族として名を馳せる必要があるのだ」「どういう意味？」

「私は竜人族最後の生き残りだと言ったが、実はだな　両親が死んだという記憶がないのだ」「つまり？」

「私が……竜人族の娘が世界のどこかで生きていると知れば、両親が出てくるかもしれないだろう」

……それは、頼るのにはあまりに細い糸のような気がした。

両親が死んだ記憶がない　この言い方に、すでに確信のなさが表れている。

記憶にないだけで、すでに両親は死んでいるかもしれないし。

記憶にないからこそ、両親の手がかりすらない。

「まあ、旅に出た理由はそれだけでもないがな。……私はこの通り、どの種族にも該当しないような角と尻尾があるだろう？　育った孤児院や、教育施設などでもだいたいじめを受けたものだ」

他者と違う。

それはたしかに、被害者になるには十分な理由のように思えた。まして、同じ特徴の者が本当に一切存在しないならば、なおさらだ。

「だからまず、私は私のルーツを知りたいと思ったのだ。自分がなんという種族なのか、それを知りたくて、五年前、孤児院を飛び出

した。幸い、まだまだ子供ではあったが、力は大人以上だったものでな。しゃべり方さえ大人びたものにすれば、冒険者としてやっていけなくはなかった。結果として、今、竜人族だと自らの種族を確信するに至ったわけであるな」

……そのしゃべり方は大人びているというか、古くさいという感じなのだけだ。

それもこれも苦勞の跡であり、子供が精一杯に編み出した『生きていく術』だと考えれば、むげにつつこんでやることもできない。レヴィアはさらに続ける。

「あとは……恥ずかしい話だが、私をいじめていた連中を見返したい気持ちがないでもない。けれど私は持って生まれた頑強な体しか取り柄がないわけだ。だから、冒険者として名を馳せたい」

一つの行動をする時に、行動理由が一つきりでなければならぬという道理はない。

まして冒険者なる職業だ。辛いことも苦しいこともあるだろう。

なるほど、冒険というのはレヴィアにとって取り除けないファクターなわけだ。

様々な理由から彼女は冒険者をしており

理由が様々なだけに、彼女は今さら冒険を終えることができない。

まあ、僕としては彼女を送り出すのに何ら不満も不都合もないのだけだ……

成り行きというか、彼女の見事な敗北フラグ建てのせいで、彼女を従えてしまったことも事実なんだよなあ。

『別になかったことにしていから、旅に出なよ』とは、竜人族でありたいという彼女の矜持を知った今となっては、言いくいこと

ではある。

僕は誰かの心を踏みにじりたくはないのだ。

そんなストレスに耐えきれない。

だから探すのはやっぱり、彼女の願いを踏みにじらず、彼女の生き方をないがしろにせず、僕のやりたいことをやれるような、夢みたいな折衷案なのだけれど……

簡単には思いつかない。

悩みそうになったタイミングで、今まで地面に座り込んでこちらを見上げるだけだったマナフが口を開く。

「ねえねえ、竜人族について知りたいの？ 教えてあげましょうか？」

そんなことだったら早く聞いてよ、と言わんばかりのきよとんとした顔だった。

レヴィアが食いつく。

「知っているのか!？」

「当たり前でしょ？ あたしは無知蒙昧な人類とは違うんだから。この世界が生まれた時から何度か封印されつつ生きてる魔王様よ？ 台本に名前も載らない端役ならともかく、竜人族なんていうメインキャストのことを知らないわけじゃない？」

妖艶に笑う。

たかが口元を緩ませるだけでここまで色香を振りまけるのだから、魔王恐るべしという感じた。

……まあ、確かに、彼女は先ほど、レヴィアの名乗りを聞いて、竜人族について知ってる風の反応をしていた。

先ほどの名乗りをすべて覚えてるわけではないが……

どうにも竜人族の祖であるドラゴンというのはこの世界の始まりぐらいから存在するらしい。

たぶん同じような来歴を持っているであろう魔王が知っているというのはむべなるかなである。

いや、魔王の歴史については完璧にメタ推理というか、最初からいそくだよなという推測でしかないのだけれど。

ともあれ。

レヴィアはすごい剣幕でマナフに詰め寄った。

「では聞かせる！ 竜人族とは何なのか……私は本当に最後の一人なのか!？」

「えー、どうしよっかなあ？」

マナフがもったいぶる。

その様子は虫をいたぶる子供を思わせた。

レヴィアがついにマナフの肩を掴む。

「聞かせないと暗いところに放り込むぞ！」

「えっ、それは嫌……わかった、わかったわよ。もう、野蛮なんだから。ちよつと会話を楽しもうと思っただけじゃない……歌い上げるような雑談は舞台の花みたいなものでしょ？ 意外な伏線が隠れてるかもしれないし、箇条書きで情報並べたって楽しくないのに。」

ロマンを知らないわねえ、竜人族は」
「ロマンで腹はふくれんからな」

レヴィアの実年齢は知らないが、何とも夢のない話である。
見た目が子供だけに、彼女の来歴を思えば切なさがかみあげてくる。

マナフが深い深いため息をついて、話を始める。

「説明してあげてもいいのだけれど、でも、一人芝居は嫌いなものよ
ねえ……ほら、脇役に囲まれてこそその主役じゃない？ 一人で長々
しゃべるのは楽しくないっていうか、大輪の華の彩りは他の花に囲
まれてこそだと思ふのよ」

「すでに長々しゃべっておるだろうが！」

「ごめんなさいごめんなさい怒らないで閉じ込めないで……あたし
怒鳴られるの嫌よ。だって怖いんだもの。アンタもあたしの管理^{マネージャー}
人を見習ってちょっとは黙って事の成り行きを見守ってくれてもいい
じゃない」

……なんだろう、今、スルーしてはいけない呼称が使われた気がする。

うっくん……この世界に『マネージャー』なる呼称があるとはどう
にも思えない。

ひよっとしたら僕の入れ知恵のせいで、知らない知識を植え付けて
しまったのかもしれない。

しかし、僕は今、竜人族のご主人様で魔王のマネージャーなわけ
か。

……自分の立ち位置に対する疑問が尽きないな。

「早く教える。結論だけでいい」

最後通告とばかりの迫力で、レヴィアが言う。

マナフはすっかり怯えたように視線を落としている。

「竜人族の生き残りなら、西の方で魔王やってるわよ。そろそろ復活してるころじゃない？」

不満そうに述べる。

その説明は本気で結論のみなので、こちらとしては頭上にハテナマークがいつぱい飛んでいるような状況なのだが……

一つだけ。

僕が咄嗟に、叫ぶほどの疑問に思ったのは、これだけだった。

「魔王何人いるんだよ!」

7話

「他にどんな魔王がいるかは知らないわよ。あたしが知ってるのは西の魔王だけ。距離は遠いけどお隣さんみたいなものですし？ それにほら、人族の味方だったドラゴンの子孫が、今では人族の敵の代名詞みたいな魔王をやってるって、脚本が気にならない？」

と、マナフはいじけたように言った。

……その発言はなんだろう、フラグ臭いというか、魔王の歳末バーゲンセールが行なわれそうな感じである。もしそんなことになれば、状況は歳末というか終末だが。

レヴィアは悩みを深くしたようだ。

「……西の魔王、か。……うむ」

深い思考の虚にはまっている感じである。

しばらくは声をかけても反応はないだろうことがうかがえた。マナフがつまらなさそうに、地面に文字を書く。

「教えてあげたのにお礼もないなんて、竜人族は教育がなってないわね。友情出演はしない方針なんだから、セリフ一つにだってギヤランティーは発生するのよ」

このままいじけさせておいても大人しくていいかもしれない。

が、確かにありがたい情報だったはずなので、お礼も言われないのは理不尽だろう。

……一方でレヴィアのフォローをしておけば、今の状態は『無礼だからお礼を言わない』というよりは『衝撃を受けすぎてそこまで

頭が回らない』というものだろう。

探していた仲間が魔王でした。

ファンタジー世界において、この事実がどれほどの衝撃なのか、僕には正確に推し量ることが難しい。

魔王というものの恐れられ方を見るに、かなりの衝撃であろうことだけがわかる程度だ。

そんなわけで、レヴィアとマナフ。

両方のフォローをするべく、僕がお礼を代行することにしよう。代わりに礼を述べることになんらコストもストレスもないのだ。

しかもお礼をすれば人間関係が円滑になる。しない方が損だというものだ。

「レヴィアに代わって、僕がお礼を言うよ。ありがとう、マナフ」

「……あら、あらあら」

「？」

「困ったわ、お礼を言われ慣れてないから、セリフがとんじやったみたい。こういう時、どう返せばいいのかしら？」

「『どういたしまして』かな」

「……どういたしました。……ふふ、悪くないわね、感謝されるのって。蔑まれ疎まれ畏怖され殺され封印され、悪意のオールキヤスト出演みたいな今までだったから、なんだかお礼一つでドキドキするわ」

熱っぽい視線がこちらに向けられる。

………参った。

僕は『ちょっと会話したからあの子は僕を好きかもしれない』と

か、『微笑みかけてくれたからあの子は僕を好きかもしれない』とか、そういう思いこみをする方ではないのだけれど……

ひょっとしてマナフは僕のことを好きかもしれない。

そう勘違いしたくなるほど、その視線や表情は、グッとくるものがあった。

「こういふシーンもあるのね」

唐突にマナフが言う。

僕は首をかしげた。

「シーンって？」

「戦い終わって、あなたが生きてて、あたしも生きてる。戦いの果てにどっちも生存しているなんていうシナリオは思い描くことすらできなかつたわ。人類とあたしが向かい合えばどっちかは必ず消えるはずだもの」

「……」

「いいものね。生きて、話をする」

彼女は笑う。

それは当たり前前に誰しもが得られる、しかし当たり前すぎて意識すらしない幸福だった。

マナフはまるで新鮮な発見をしたかのように、その当たり前を受け止めている。

……同情的になるなという方が、難しい。

だからだろう、つい、慰めるような、励ますような言葉が口をついて出る。

「これからはいっぱい話ができるよ」

僕の発言に。

彼女は、笑う。

「うん。いっぱい、お話してね」

子供みたいな笑顔だった。

事実、彼女の心はまだまだ子供なのだろう。

これから学習し、これから確立されていくのだ。

僕はこの世界で。

魔王と二人、生きていく。

（FIN）

「決めたぞ！」

危つく色々打ち切りそうになったところで、現実に戻される。

気付けば、長い思考の沼から脱したらしいレヴィアがこちらを見ていた。

「ご主人様、私は西の魔王を倒しに行こうと思う」

「どうしてそうなった」

西の魔王

そう呼ばれる存在は、たしか、竜人族の生き残りだったはずだ。

つまりレヴィアにしてみれば親戚みたいなものである。

なぜ竜人族が魔王になっているのか、復活予定は確かなのか、レヴィアの両親との関係はどのようなものかなど、数々の疑問はあるが……

少なくとも、『倒しに行く』存在ではないはずだ。

そのあたりのアンサーとして、レヴィアは以下のように語る。

「竜人族は誇り高い人類の守護者だ。これは、世界を回り見聞きした伝承から、間違いがない。その、私と同じ種族であるところの竜人族が魔王などというものに成り下がっているのだ。問いたです前に罰する必要があるであろう」

「ある……あるのかなあ？」

「あるとも！ 事情や経緯などを問いたですのは、その後だ。……マナフに聞けば、それだけで様々な経緯が余すところなくつまびらかになるのかもしれないが……竜人族のことだ。他人事ではない。やはり本人から事情を聞かねば、私が納得できんだろう」

なるほど。

レヴィアの求めているのは答えではない　まあ、答えをまったく欲していないかと言えばそんなことはないのだろうけれど、それ以上に求めるものがあるのだ。

それは『納得』。

自身の出自に対して、自身のルーツに対して　自身がいじめられた理由に対して、自身の旅の終わりに対して、納得のいく結末を求めているのだ。

それは人づてに解説されたところで得られるものではないだろう。彼女が魔王を倒す旅に出る　それは、僕も納得して送り出すべきだし、祝福して旅の安全を祈るべきなのだ。

が、無視できない大きな問題が一つ。

「……魔王と呼ばれる存在を倒せるの？」

魔王は強い。

その強さを、よく考えてみれば僕はまだ目の当たりにはしていないが　魔王の成したことの残滓ならば、未だ灰と煙の中に見える。街一つを亡ぼすような存在に、果たしてただの人間……人類が勝利できるのか。

おまけに、相手も竜人族ということは、純粹にレヴィアの上位互換である可能性が高いのだ。

僕の不安に、しかしレヴィアは快活に答えた。

「問題なからう」

「……ちなみにだけど、根拠は？」

「私は私の強さをよく知っている。今まで、自身の出自に対しての伝承を調べるにあたり、竜人族の弱点も知っている。それに、旅の途中で様々な敵と出会い、体も鍛えた。鍛え上げられた知識があり、鍛え上げられた体があり、数々の実戦経験がある。今の私ほど完成された竜人族は、この地上にいないのではないかとすら考えられるぐらいだ」

おお、心強い。

なるほど、彼女の旅路がそのまま、彼女の自信につながっているということだ。

それは根拠のない空虚なる自負などではない。確かな裏付けに基づく勝算である。

ただ。

ほんと、申し訳ないっていうか、完全に僕が悪いとしか言えない

ようなことなのだけでも。

この子が語れば語るほど、敗北フラグを積み上げているようにしか聞こえない……！

出会い方がまずかった。

彼女はあれだけ大口を叩いて、今こうして僕を『ご主人様』と呼ぶに至ってしまったのである。

もう勝てる根拠を並べれば並べるほど、それは敗北への前フリにしか思えない。

それでも根拠を語らせたのは、聞けば少しは安心できるかと思っただけけれど……ダメだった。結果として不安がますます募るばかりである。

レヴィアが鋭い歯をのぞかせ、笑う。

「だから、問題はご主人様との関係だけだな」

「いや、まあ、それはもちろん、単独で行ってもらってかまわないし、レヴィアが必要だって言うなら『魔王を倒してこい』って命令形式で言ったってかまわないぐらいなんだけれど……」

「ならば問題はない。私は魔王を問いたです。そして再び、ご主人様の下へ戻ろう」

ついに敗北フラグだけじゃなく死亡フラグまで建て始めた。

……どうするかなあ。

もちろん、僕には魔王を倒す義務もないし、レヴィアの旅に同行する義理もない。

彼女のルーツや親、その他仲間を探す旅は彼女のものだ。

僕が口や手を出すことじゃないし、出す必要もない。

ただ……

魔王を倒すというのは、もちろん、命の危険を伴う行動のはずだ。それ以前に、『西の土地』というのがどのあたりか詳しくは知らないが、この世界の人たちは『そう遠くない距離』が『徒歩二時間』なのである。

街道の整備だってあまりされていないようだし、魔獣だって出る旅の途中で死んでしまうことだってありうるだろう。

レヴィアに死なれると嫌だ。

特別な好意や思い入れがあるかないかで言えば、まあ、ないと言える程度なのだろうけれど。

こうして会話をして、事情を聞いて、一緒に旅をした……散歩をした相手が、自分の知らないところで帰らぬ人になるというのは、誰だって嫌だろう。

そして彼女はすっかり死にそうなのだった。

……いや、なんかもう、マジで死亡する一秒前になっても『竜人族は退かない!』とか言って落とし穴に突っ込んでいきそうな雰囲気なんだもの。

放っておけない。

でも、都市開発……

……あーもう。いいや。

都市開発はいつでもできる。

対してレヴィアは今にも旅立つ雰囲気だ。

天秤にかけられているのは、僕の趣味とレヴィアの生命。

どっちが重いかは言うまでもなく、どちらを後回しにした方がストレスがたまらないかも、考えるまでもなかった。
僕はガツクリとうなだれながら言う。

「……僕も一緒に行くよ。だから少しだけ待っていてくれ」

ある意味で降参宣言である。

レヴィアは驚いたように目をぱちくりして。
恥ずかしそうに視線を落とす。

「……そ、そのだな、こういうのは初めてで、どう表現したものがわからないのだが……」

「？」

「……誰かに同行を申し出られるというのは、なんだ……うん、いいものだな！」

はにかむように笑う。

そして、このぐらいでやめておけばいいのに。

「こんな気持ちは初めてだ。ご主人様と一緒になら、もう何も怖くはない！」

いらぬ敗北フラグらしきものを建てるのも忘れない彼女だった。

8話

マナフが壊した建造物をどうにかしなくてはいけない。

そんなような事を思った気がする　言葉にしたかどうかは定かではないが、初志はストレスのない限り貫徹されるべきだろう。

なので、街人たちとの会議が終わるタイミングを待って、領主のおねーさんに声をかけることにした。

そしたら夜がとっぷり更けていた。

いや、話長いんだもの。

「どうされましたか、神様？」

月明かりがやけに明るい。

銀色の光に照らされた領主さんが、柔らかい表情で小首をかしげた。

お話前の当たり前の作法とばかりに、僕の正面でひざまずくことも忘れない。

……今後、僕は領主さんと会話する時、常に下を向く羽目になるのか。

首が地味につらい。

「いや、実はこれから、西の方に魔王を倒しに行く感じなんですけど」

「魔王を倒しに!?!」

「あ、はい。で、その前にちょっと時間と許可をもらって、街を建造物だけでも復興させようかなと思ひまして、その許可というか

「街を復興！？」

「あ、はい。三十分もくれれば余裕で終わりますんで」

「三十分！？ただそれだけの時間であそこまで滅びた街が元通りに！？」

どうしよう。

領主のおねーさんはもっと冷静なキャラだと思っていたのだけれど、案外いいリアクションを返されてしまった。

おねーさん自身も自分のキャラにないと思ったのか、少し恥ずかしそうな顔で咳払いをする。

そして、戸惑うような表情を浮かべ。

「あの、魔王を倒すだの、街を三十分で復興させるだの、神様におかれましてはなんでもないことなのかもしれないんですが、ただの人間でしかない我が身にはめまいのするような言葉ばかりで、少々取り乱しました。申し訳ありません」

……なるほど。

魔王は強い。

街の復興には時間やお金がかかる。

それらが普通の世の中で、『ちよつとコンビニ行ってくる』並みの気軽さで魔王討伐を宣言したり、溶けかけたアイスが再び固まるぐらいの時間で街を復興させたりするのは、おかしいのだ。

領主さんのリアクションは、この世界で普通に過ごす人として当たり前なのである。

今のは僕の配慮不足だった。

どのように説明するべきか。

「ええつと……まあ、とにかく、街を建て直す許可をください」

考えた末、それだけ言った。

魔王討伐とかに対しては、別にいちいち領主のおねーさんに許可されるようなことではないと考え直したのだ。

もし許可を求める相手がいるとすれば、それは国王とかなんだけれど、許可を得る目的のためだけに会いに行くのは、さすがに面倒くさいなと思った。

まあ、RPGだったら、ここから領主のおねーさんのコネを使って国王様と面談したり、お使いさせられたりという展開がありうるのかもしれないが……

そういう手順は求めていない。

僕は、速やかに、ストレスなく都市開発ゲームに移行したいのである。

無駄なお使いをするつもりはなかった。

僕としては、先ほど一瞬で住居を建てたのは見られているはずだし、僕を冗談でもなんでもなく神様扱いしている領主のおねーさんのことだから、すぐに許可がもらえるものと期待していた。

しかし、彼女はあまりかんばしくない表情で語る。

「実は、すぐさま復興作業というわけにもいかないのです」

意外な言葉だった。

住処が焼け落ちているのだから、すぐにでも新しいおうちに住むことができるならば、それが最上ではないかと思うのだけれど。

領主のおねーさんが補足する。

「復興は、まず、領民の被害を書類でまとめてからになります。被害総額を算出し、被害状況とその建て直しのための予算を王国に申請しないとなりません」

「……資材とかも僕が出しますけど」

「家屋以外の財産が失われた場合もありますので……まずは書類を作りませんと、確かな被害や住民の正しい状況が管理できず、のちの補償を出す際にもめる可能性がありますので……」

「だったら、城壁だけでも」

「それこそ国家を挙げた事業でございますれば……加えて言うのであれば、少し、その、この街には秘密がありますので、あまり神様にすべてを投げてしまつわけにもいかないのです。陛下に、教会に、その他様々な関係機関と協議をせねばなりません」

圧倒的お役所仕事感……！

しかし領主の仕事といえは、まさしくそれこそ仕事なので、僕はよくわからないながらも「はあそうなんですな」と頭を掻くしかなかった。

実際、言われていることはもつともだと思つ。

僕なんかは短絡的に『建物建て替えたらいいじゃん』と考えてしまったが、社会保障やらなんやらを思えば、仕事はそこまで簡単に進めない いや、進めてはならないのである。

まあ、というか。

あまりここで押し切るのも、のちのちストレスが大きくなりそうな気がするので、ここは大人しく引き下がろう。

「わかりました。それじゃあ、僕は魔王討伐に行つてきます。終わつたらまたこの街に来ますので、復興や増築の際はどうか頼つてく

ださい」

建設業者の営業マンみたいなセリフだった。
領主のおねーさんが笑顔で応じる。

「はい、その時は。それにしても　ああ、なんと慈悲深き神様！
我々蒙昧なる人類の生活にも万全なケアをお約束してくださいと
は。ここまでかゆいところに手が届く存在だったのですね。わたく
し、神様を少々誤解しておりましたわ」

かゆいところに手がとどく、というのは果たして神様のキャッチ
コピーとして正しいのか。

疑問はないでもなかったがとりあえず無視して、ここらで営業活
動でもしておこう。

そんな大した話でもなく、今後の都市開発にかかわれるように顔
を覚えてもらうというだけの話ではあるけれど。

「そう、僕がかゆいところに手がとどくんですよ。だから、都市開
発などをする際には、是非、僕を頼ってくださいね。一週間でこの
街を今の倍以上の広さと発展度に見せますよ」

「まあ、それは素晴らしいですね。であれば、神様には無事に帰っ
てきていただかねばなりませんわね。魔王退治を終えてらしたら、
是非わたくしをたずねていらしてください。極上の葡萄酒を用意し
てお待ちしておりますわ」

笑顔である。

悪気はないのだろうけれど死亡フラグが建ってしまった。

少し敏感になりすぎている気もするけれど、ここはフラグを折っ
ておこう。

……それ以上に、酒宴とか催されても僕はあんまりお酒強くない

し、加えて主賓にされそうな気がするので、自分に注目が集まりそうなイベントはなるべく避けておきたい。

「いえ、お酒は苦手なので結構です」

「であればお料理でもいかがですか？ ああ、そうですね！ 復興記念もかねて、大宴会など開きましょう！ 神様が主賓席に座ってくださいれば、きっと楽しい集いになりますわよ」

「……いいえ、大丈夫です。僕を気にせず、宴会はみなさんでやってください」

……わざとやってるのかなあ。

なんだかさつきから領主のおねーさんに全力で帰って来れないフラグを立てられている感じがしてならないのだけれど。

「欲のない神様ですのね。絵物語に読んだ神様は、みな、代償を求めらる方ばかりでしたのに」

領主のおねーさんが僕を見る目に、尊敬の念がガンガン上乘せされていく。

もう僕は、彼女と同じ高さの視線で会話をしてもらうことはないんだろうな……

首が疲れるのでいちいちひざまずかないで欲しいんだけど、叶わぬ願いのようだ。

僕が今の状況に困惑していると、領主のおねーさんが何かに気付いたようにハツとする。

そして、こんなことを言った。

「まさか、生け贄ですか……！？」

求めてねーよ。

どうして彼女は、僕に何かを差し出そうとするんだ。

たまに帰省するといくらでも手料理を食べさせようとしてくる田舎のおばーちゃんみたいだ。

どう言えば納得してもらえるのかわからない。

その間にも、領主のおねーさんが暴走していく。

「……わかりました。わたくしの治める領地に起こった『魔王』という災害を沈めてくださり、わたくしの領地の復興まで手伝ってください」といいますから、求めるものは、わかりましたわ」

「あの、何も求めてないです」

「わたくしの身を捧げましょう」

求めてません。

……が、美人のおねーさんに『身を捧げる』とか言われて固まってしまう僕であった。

正直に告白すると、ちょっと迷ってしまったのである。

「わたくしのことは、どうかお気になさらず。領地の発展のためでしたら、この身を捧げることなど厭いませんわ。若輩の身なれど、領主ですもの。それに　こういうの、絵物語で見て、憧れてもありませんたのよ。民や土地のために身を捧げる女性の物語……そこには悲劇的な美しさがあると常々思っておりますわ。よもや自分がその立場になるとは！　恥ずかしながら、ちょっと感動を覚えてもおりますのよ」

などと聞いてもないヒロイン願望を告白する領主のおねーさんである。

若く見積もっても二十代はいつてそんな彼女にしては少々夢見が

ちすぎる気もするのだけれど、なんだろう、領主というのは貴族であり、貴族というのはご令嬢である。

まあ、多少、ドリーミーなのは仕方のないことなのかもしれないなどか思ってみたり。

何にせよあっけにとられる剣幕である。

夢の世界に入ってしまったおねーさんは、両手をがっしりと組んで僕ではなく空を見上げながら熱っぽい瞳で語る。

「どうか、ご無事に帰ってきてくださいませ」

魔王討伐に向かう僕に対し、至極まっとうな激励の言葉をかける。そして。

「帰ってきたら、結婚しましょう」

いららない死亡フラグを添えることもまた、忘れなかった。

9話

「西の魔王が眠る場所は、流れの激しく広いエヌーム川を越えて、その先にある『雲よりはるかに高い霊峰』ニムシュ山をのぼりきった、その山頂にあるのよね」

聞くからに難攻不落の難道である。

こんなものを先ほどは『西』の一言で済ませたのかと思うと、魔王というのはどうにも言葉に配慮が足りないというか、色々な苦勞を軽視しすぎだった。

まあでも、希望を捨ててもいけないだろう。

流れが激しく、広い川とは言っても、どのぐらい激しく、どのぐらい広いかはわからない。

ひよっとしたらこの世界の川はだいたい緩やかな流れであり、少し早めのものは『激しい』などと形容されるという、比較級の表現かもしれない。

そんな僕の予想を否定するように。

レヴィアが悩ましげな顔をする。

「……エヌーム川か。ひとたび足をとられれば二度と浮かび上がれぬと言われる急流だな。仮に船を浮かべても、浮かべたそばから流れの急さにより破壊されるという……まあ、大げさな伝説のようにも聞こえるが、否定はできん」

……流れるだけで船を壊す急流とかどういふことだよ。
時速何キロ出てるんだ。

それ、川じゃなくてウォーターカッターかなんかなんじゃないか？

「さらに、たとえ川を越えられたとしても、その先に待つというニムシユ山は難攻不落の霊峰と聞く。何でも伝説にある我らが始祖、ドラゴンが初めて地上に降り立った地だそうだからな」
「目指したことありそうね？」

マナフが楽しげにたずねる。
レヴィアは、気まずそうに顔を背けた。

「……竜人族のルーツを探しているからな。ドラゴンの初めて降りた場所に興味がないわけがなかるう。だが、あまりの難攻不落伝説の多さにあきらめた。もつとも、エヌーム川が見える場所までは実際に行ったがな」

「そうなの？」
「うむ。その流れは見ている。だから、船が壊れるというのは大げさにも聞こえるが、否定はできんと言ったのだ。小舟程度ならば数秒ともたんだろうし、大型船をもし用意できたとして、対岸に渡れるかどうかは賭けになりそうだと感じた」

実際に見てもそこまでの急流なのか。
物理法則とかに突っ込んだら負けなんだろうな……

というか、おそらくこの世界で一番物理法則を無視してるのが僕なので、僕がまともなこと言ったところで『お前が言っつな』っていう感じが。

すでに漂う手詰まり感の中。
レヴィアがさらに外堀を埋めていく。

「かと言って、エヌーム川を無視してニムシユ山に向かうのも、難

しい。川以外のルートには樹海が立ちふさがっているが　まあ、世界を旅している間にいくつも聞いた『入れば帰れない人食いの森伝説』がかわいらしいおとぎ話に思えるほど、険しい森だな。私も一週間ほど迷った末、入口に戻るのがやっとだった」

なんと、レヴィアはすでに複数のルートからニムシユ山へアタックしているらしい。

言葉の上では『伝説の多さにあきらめた』とされるドラゴン降臨の地へのトライだが、あきらめるまでに伝説の実証をサボったわけではないようだった。

むしろ　挑戦を繰り返してもなお、『ニムシユ山への伝説』を確かめることすら叶わなかったというのが、実際のところなのか。ただ入山するだけでも難攻不落とかどうすりゃええねんという話だ。

……竜人族の実際の強さみたいなものを確かめる機会には恵まれなかったけれど。

レヴィアが僕よりはるかに、生命として頑強なのは確認するまでもないだろう。

だとすれば、彼女が一人でたどりつけない場所に、僕を連れてたどりつける道理はない。

……まあ。

こういう難攻不落の自然の要塞みたいなものがRPGに出た場合、お約束というか

「越える方法はあるわよ」

マナフが告げる。

……あるよなあ、やっぱり。

ファンタジーRPGのお約束である。

『迷いの森で迷わないためのオーブ』とか、『断崖絶壁に橋をかけるための鍵』とか、挙げ句の果てには『被空挺』とかが用意されているものなのである。

そして、そのアイテムをとるためのお使い　どころか、『アイテムをとるためのお使いをするためのアイテムをとるためのお使い』みたいなものまでさせられるのが必定なのだった。

こうしてプレイヤーはゲーム内でもルーチンワークに組み込まれていくことになる。

つまり、ファンタジーRPGにおける勇者とは、より広い範囲でのお使いができる使いっ走りにならないのだ……！

僕の予想を裏付けるように。

マナフは、うんざりするよつな手順を述べた。

「まず必要なのは川の流れを鎮める宝珠だったかしら？　あそこらへんは水の精霊が狂ってるからヒステリーをどうにかしないと片っ端から船を沈めちゃうのよねえ。ほんと、脇役のくせにいつまでも舞台袖から叫び続けるとか、女優失格よねえ。で、あとは船かしら？　精霊をしずめても川を越えた先がもうニムシュ山だからね。岸にいる魔獣に鎮められないように、それなりのを用意しなきゃ。でも、魔王に挑むんですもの、そのぐらいの舞台装置、安いものでしょ？　あと」

セリフの途中だが、声を頭の中からシャットアウトする。
無理だ。

そんなお使い、聞くだけで気が滅入る。
やりたくない。

しかしレヴィアはそれでも行くだろう。

彼女は何年かけようが、どの程度のストレスがかかろうが 命を懸けることになるうとも、可能性があるならば西の魔王を目指すはずだ。

もつとも、まったく勝算のない、いわば命の浪費をすることはないだろう。

しかしこうしてマナフが手段を事細かに示してしまっている以上、レヴィアはその手段を実行する目算が高い。

今だって、ふんふんと感心するようにうなずき、脳に刻み込むように『西の魔王に会う手段』について復唱などしているのだから。

彼女に死なれるとストレスがかかる。

だから僕は、彼女の魔王討伐ないし対話を手伝う。

この方針にゆがみはないので、彼女に死なれる以上のストレスがかかる場合、僕はきっとレヴィアのことを綺麗さっぱり忘れて都市開発に乗り出すことになるだろう。

そしてまだ、そのつもりはない。

なぜって。

先ほどからマナフが示しているのは、あくまでもまっとうな手段なのである。

非常にRPG的な、正規ルートとでも言うべき手順だ。
つまり、僕には関係がない。

「お話の途中悪いんだけど、僕から提案がある」

二人の会話に割りこむように、僕は切り出した。
注目が集まる。

そこで、僕は、僕なりの『西の魔王に会うためのルート』を提案
することにした。

「精霊を鎮めるとか、丈夫な船を用意するとか、そういう手段もい
いけれど、より簡単に、より楽に、より早く終わるために、やれる
ことがあるんだ。つまり」

それは、僕からすれば革新的なアイデアではなく。
僕にとって難易度の高い手段というわけでもない。
よつするに。

「建築を、しよつ」

10話

建築。

正確には、都市開発の分野になるのだろうが 何も都市というのは建物だけでできているわけではない。

人が移動するための道だって、立派に都市の一部であり、僕の建造対象だ。

それは電車が走るための線路であったり。

彼岸と此岸をつなぐ橋であったり。

あとは 道路であったり、するのだ。

僕の提案というのは、このうち、道路を用いたものだった。

「空に道を造る」

思いつきの発端は、焼け落ちた街から人々を救出した時のことである。

水の上にかけてた道路が沈みも漂いもしなかった。

道路は、まるで空間そのものに縫い止められているかのように、微動だにしなかったのである。

そこで僕は、思いついた。

これ、空にも設置できるんじゃないか？

もつとも、発言段階では未検証のことであった。

堀にたまった水をオブジェクトと認識し、その上に設置できていたという可能性も考慮できたからである。

そうになると『空に道を作る』という僕の提案はなかったことにせざるを得ないのだが

結果としては、できた。

ただし、まったくの中空に道を作ることができたわけではない。設置されたオブジェクトのどこかしらは空気以外の物体に触れていなければならないようだ。

だから、このような手順をとった。

- 1、地面に『坂道1』を造る。
- 2、『坂道1』の高い側にくっつけるように、『坂道2』を造る。

すると、『坂道2』自体は地面に接していないし、支えとなる柱的なものが下にあるわけでもないのに、空中に設置することができるのだ。

しかしこの方法で西の土地を目指すのには、明らかに問題があった。

もちろん資材の問題である。

資材に関しては、山を整地した際に大量に仕入れたとはいえ、無限ではない。

西の魔王がどのくらい遠くにいるかは不透明だが、距離によってはいずれ資材が尽きることがありうるだろう。

加えて言うならば、何も知らない人が僕の造った道を通って魔王のいる土地に踏み入ってしまうという危険性だって無視はできない。そこで、さらなる実験だ。

3、『坂道2』を維持したまま、『坂道1』を整地する。

整地したオブジェクトは、資材となって僕に返ってくる。

この方法で、今度こそどこからどう見ても何にも触れず空中に浮かんでいる『坂道2』が落ちなければ、『道路を造る』『渡る』『渡り終えた道路を整地する』『整地時に返ってきた資材で前方に新しい道路を造る』というループが可能になるのだ。

そして、この実験は。

4、『坂道2』は中空にとどまった。

成功だ。

手順さえ間違えなければ、僕は無限に道路を造り続けることが可能だろう。

念のため乗った際に落ちないかどうかの実験をしたが、飛ん

でも跳ねても一度建造した道路はびくともしなかった。

やはり僕の建造する建築物は、僕が整地する以外に壊す手段はないらしい。

……つくづく、僕だけRPGじゃねーなという感じだ。

「……空に道、か。いかにも神めいてきたな、ご主人様」

感心するような声でレヴィアが言う。

まあ、感心されるような偉業は何もしていないのだが、くどくどと説明することでもないなと思って苦笑いで受け取っておくことにする。

僕の内心にうずまく『来る世界を間違えた感』は今回のことではならぬ飛躍を見せたのだけれども、お陰で普通の人が多大な時間と尊い生命を懸けて行なうことが簡単にできるのだ。

ここまで来たらむしろ『自分の特技だ』と開き直るべきだろう。

「まあ、神々しさは足らんがな。もっとう、光でできたり、羽根が舞っていたり、そういう演出はできるのか？ 私としてはそのような幻想的な道を歩いてみたい気持ちもなくはないのだが……こう、その方がロマンチックであるう？」

都市開発はロマンじゃないので。

とかいう夢のない言葉はさすがに引込める。

「丈夫さと実用性優先だよ」

とだけ言うておいた。

いかにも他に複数の選択肢があった的な口ぶりになったが、他に

同じことができそうな建造物は橋と線路ぐらいなものだ。

この二つを没にしたのにも理由がある。

橋は道路よりはロマンある造形だが、必要なメイン資材が木なので土と石でできる道路よりも設置数に不安があったこと。

線路は鉄が多く必要という素材面で論外なものと、隙間だらけで不安だからだ。

場合によってはかなりの高所まで道路を設置することになる。

安定感は大それた。ただでさえ、『落ちないことはわかったがなぜ落ちないのかはわからない』という状況なわけだし、視覚的な面だけでも安心は演出しておきたい。

かくして西の土地まで、まったくRPG的ではない交通網が確保された。

僕は焼け落ちた街のそばで一夜を明かしてから旅立つことにする。

とくに夜も更けきっている。

そこかしこで焚き火が焚かれ、焚き火のそばには人が集まり談笑をしていた。

まだ眠る人はいない。……街が焼け落ち、今夜自分たちの寝床となる家もないのに、みんなはどこか楽しそうだ。

気持ちはわからなくもない。

屋根もなく、壁もなく、仕切りもなく、こうして複数の人々と火を囲むという行動のわくわくする感じ。それこそヴィアの言い分でもないが、ロマンというのは、無視できない。

……まあ、領主のおねーさんが街の焼け跡から掘り出したお酒を振る舞っているせいだというのが、この楽しいムードの大きな理由であることも、否定できない事実として記す必要があるのだろうけれど。

苦境にあるのは間違いないけれど。

みんな生きていてよかった。

そういった安心感がそこかしこにあふれていた。

僕もレヴィア、マナフ、それから領主のおねーさんと四人で焚き火を囲んでいる。

……周囲の人々から、遠慮がちなのに好奇心まるだしの視線がチラチラ向けられているのは、決して僕の自意識が過剰なわけではないだろう。

何せメンバーが豪華だ。

見た目の華やかさだけではない。

たしかに領主のおねーさん、マナフ、レヴィアと大中小様々な華がそろっているのは目を惹く要因として無視できないが、むしろ彼女たちの立場に対する好奇心の方が、大きいだろうと思えた。

街とその周辺の土地を治める、若き女性領主。

世界にたった一人とされる竜人族の少女。

そして、魔王。

いずれもなんで僕が同席させていただいているのかわからないよ
うな、レアリティもプライオリティも高い人々である。

余人からすれば、話の内容が気になるだろう。

まして、領主のおねーさんが気を利かせて、他の集団からやや離れた、会話が聞こえそうで聞こえない位置を提供してくれたのだ。

寸止め。

チラリズム。

僕らの会話はそういったものと同列の、いわば『チラ聞こえ』でも言える状態であり、他の人はまったく話が聞こえないよりいっそうの興味を僕らの会話に対し覚えているに違いなかった。

しかしてその会話の内容とは

「私はな、ご主人様をご主人様を選んだ自分の眼力を、今、心から賞賛している。もちろんそれもご主人様の力があってこそだが、いや、今だから言うがな、初めて出会った時、私は運命の波動のようなものを感じたのだ。それはもう、稲妻が体に走るような」

「マネージャーねえ管理人、旅つてどんな感じかしら？ あたし、あんまり自分の住んでるところから出たことないのよね。いえね、舞台女優に色んな経験が必要なのはわかってるけど、あたしはご当地っていうかホームの劇場以外で公演しないのよ。ほら、下手に動き回ると人類に封印されちゃうじゃない？ 主演女優には緞帳の暗闇よりシャンデリアの明かりが必要っていうか」

「神様、わたくしは今まで何も知らずに生きて参りました。懺悔いたします。聞いてくださいますでしょうか。実はですね、領主という仕事自体は十歳の時に両親が亡くなってからずっとやっていたのですけれど、今まではこうして領民の方々と直接お話す機会もなくて、閉じこもって書類仕事や、時折物語を読んで空想にふけるばかり

りで
「

酔っ払いがくだを巻くだけの、午前二時のガード下みたいな内容なのであった！

美人にくだを巻かれるというのは気分が悪いばかりではないけれど、三人ともお酒が入っているのでやっぱり支離滅裂であり、しかも三人が三人とも他の二人を無視して僕に話しかけている状態なので、処理する側の大変さは相手が美人かどうかにかかわらず、変わらない。

彼女たちは、彼女たち自身のことを語る。

興味深い内容ではあったけれど、同時に語られると聞き取れないから困る。

結果、僕は苦笑して『はいはいそうですね』と彼女らをなだめるだけしかできない。

……こうして冒険前夜は更けて いや、明けていく。

とんだ乱痴気騒ぎだ。

明日のスケジュールを思えばさっさと寝たいし、寝せた方がいい気もするけれど。

……まあ、こういうのもいいのだろう。

本当に辛かったら、出発を遅くしたっていい。

僕は、あくまでも都市開発をストレスなく進めるために、ストレスの原因を取り除こうとしているだけなのだ。

ストレス解消に挑んだゲームでブチ切れるみたいな本末転倒になりかねない必死さで挑む必要もないだろう。

どうせ、そこまでの困難はないさ。

そう思うのに。

「なあ、ご主人様　いや、なんでもない。この話は、魔王を倒してからしよう」

いかにも大事そうな話を言いかけてやめるとか。

……どうして不吉になるようなことをするのかね、この竜人は。

11話

翌日

時刻は昼過ぎぐらいだろうか。

すでに太陽は昇りきっていて、まぶしい日差しが僕らの目を覚まさせた。

周囲をうかがえば、すでに働いている人の姿もチラホラ見えた。タフな人たちだ。あれだけの大災害、そして夜を徹しての酒盛りのもと、こんなにも早く日常に復帰するとは、人の生きる力のすさまじさを感じざるを得ない。

僕は、これから一緒に旅をするであろう二人を見た。

……が、すでにレヴィアはいない。

すやすや眠っているマナフだけが目に映る。

……こうして寝ている魔王マナフは、本当に子供のようだ。

容姿は、立派に大人のものだけれど。

彼女自身の影に溶ける長すぎる黒髪と黒い衣装。顔立ちにはこうしていても妙な色香があつて、色の薄い唇は、じっと見ていると吸い込まれそうになる。

でも、無邪気にごろごろしているその様子は子供か猫かという様子だ。

たとえ彼女の色香に惑わされよからぬことを考えたとしても、寝言で『暗いのやだあ』とか言われれば優しい気持ちになってしまうだろうこと請け合ひであった。

さて、レヴィアはどこだろう？

まさか黙って一人で行ってしまったわけでもないだろうに
そう思っていると、遠くの方から、大きな人影がこちらに近寄っ
てくるのに気付く。

大きな人影、というか、丸い……何？
次第にその影が判然とし始めて、正体がわかる。

それは探していたレヴィアだった。
ただし、背中に、いつもの大剣とは別に、体より大きいリュック
サックを背負っている。

あれはなんだろう。
ほどなくすぐ近くに来て、重そうにリュックを下ろす彼女にたず
ねる。

「その荷物は？」

「うん？ 旅先で必要になるであろう食料などだが？」

食料！

なるほど旅には必要な要素だ。
人はご飯を食べなければ生きていけない。
あまりに当たり前のことではある。

だが、僕が元いた世界、というか国では、水は蛇口をひねれば出
てくるし、食事はそのへんに行けばどこにでも売っているものだっ
たので『わざわざ用意する』という発想がなかった。

しかし、旅先では食料、水、寝床など、僕が『わざわざ用意する』と発想しない、元いた世界基準で『あつて当たり前のもの』さえ、自分で用意しなければならぬのだ。

……ストレス値が、最初に想定した限度をやや上回る。

旅への同行やめよつかないという気分にならないでもなかったが、ここまで一緒に行く雰囲気において、今さら断るのもそれはそれでストレスだ。

加えて。

「安心しろ。ご主人様の分もきちんと用意したぞ。三人分、一週間はもつ計算だ」

などということ言われてしまった。

三人というのは、僕と、マナフと、レヴィア自身の分だろう。

ここまでさせて今さら断るのも申し訳ない。

……仕方ない。まあ、サバイバル色強めのキャンプだと思えば気持ちも上向きにできるだろう。

僕はインドア派なので、キャンプ自体にまったく興味が無いというのはこの際棚上げしておく。

「ちなみに、一週間分の食事っていうのはどんな感じ？」

「おお、知りたいか！ ご主人様はあまり詳しくないのだな！ よし、私が教えてやろう！ 任せておけ、私は人に何かを教えるのが得意だ。なぜなら、竜人族だからな！」

……彼女の口から聞かされる『竜人族』は、今まで割と没コミュニケーションというか、人とかかわって生きていくのが辛そうな種族だったように思うのだけれど。

まあ、細かいことを突っ込み始めたらキリがないし、聞いたところ

るで答えもないだろう。

竜人族とは何か。

その答えを彼女はこれから探しに行くところなのだから。

「旅のメイン食料と言えばこれ。豆だな」

「……豆？」

「そうだ。炒つて乾燥させた豆は軽く、腹持ちがいい。旅の食事としてこれに勝るものはまず存在しないだろう。値段も安いからな」
「へえ。他には？」

僕は何気なくたずねた。

すると、レヴィアは首をかしげ、こんなことを言う。

「……他？」

待て、なんでそこでハテナマーク！？

慌てて補足する。

「い、いや、ほら、豆以外を食べたくなる時あるじゃない？ 飽きるっていうか……栄養バランスとかさ」

「豆を食べれば、空腹で動けなくなることはないぞ？」

「そりゃそうなんだろうけど、動けなくなることと健康に生きていくことはまた別じゃない？ まあこの際健康は無視するとしても、豆ばかりだとちょっと辛そうだし」

「野草やキノコなども拾えることがある。土地によっては木の実もあるかな」

うーむ……それならギリギリ、ありか？

しかし出発前、思わぬところで旅のつらさを思い知った気持ちだった。

まあ、贅沢を言っている場合でもないのは、事実だろう。
魔王を倒す旅なのだ。

数メートル間隔で定食屋を用意してくださいというわけにもいかないだろう。

とか覚悟を決めかけていた僕だが

次のレヴィアの言葉で、その覚悟が消え去ることとなる。

「ちなみに、塩はないぞ」

……塩が、ない？

え、塩って、ないとかありうるの？

むしろ僕の元いた世界では、『一日の塩分摂取量を控えましょう』とか健康番組をつけたら絶対言われるぐらい、塩過多だったよ？

「んー……ご主人様の様子が、香辛料を当たり前に使う貴族のそれだったので一応注釈したが。本来、塩やコシヨウなどの香辛料はたやすく手に入るものではないからな？ そうだな……貴族にも通じる言い方をするならば『香辛料は同じ重さの黄金より価値がある』と言えばいいか？」

同じ重さの黄金より価値がある！？

……普段何気なく使っていた塩コシヨウの物価高騰にめまいを覚える。

こんなことなら、この世界に来る前にコンビニかどこかで買い占めておけばよかった……！

いや、元いた世界からこの世界に来るのに、前兆も準備する余裕もなかったけれど。

「コシヨウに関してはともかく、塩は『同じ重さの黄金』とまで言

ってしまつと言い過ぎのきらいもあるが……それでも高級品だ。旅の備えに易々と大量買いきるようなものではないな。保存も気を遣う。いや、本当に知らなかったようだな。言っておいてよかった」
よくない。

いや、言ってくれたのがいいことだが、塩がないのはよくない。だってそれ、僕は旅の間中ずっと、塩けのない豆をポリポリかじり続けるってことになるじゃないか……！
耐えきれぬ自信がまったくない。

……しかし、彼女たちの力でこれ以上の好待遇は不可能だろう。
そこで僕は提案することにした。

「話はわかった。だけど、旅の食事をずっと豆にする前に、試させてほしいことがある」

「なんだ？」

「建築させてくれ」

懇願するように。

あるいは一縷の望みに賭けるように

最後の希望となりうる建築を、僕は開始することにした。

11話（後書き）

2016年1月19日 いただいた感想で判明した誤字修正

2016年1月24日 いただいた感想から、レヴィアの「塩は軽
いので」のあたりを削除。普通にミスです。すいません。

12話

「ファミレスを建ててみようと思う」

旅の食事をもっときちんとしたものになりたい。

僕はそんな願いを叶えるべく、提言した。

……ただし、これは『ファミレスさえ建てればまともな食事ができる』という確信があつてのことではなかった。

僕は食材を用意できない。

ただ。

もしかしたら。

ひよつとしたら、万が一なら、細かい可能性ながら、ファミレスが普通に機能しており、調味料をはじめとした食材をこちらで用意しなくても、不思議な現象により食事ができるかもしれないという可能性を、僕は捨て切れなかった。

実験はノーリスクなのだ。

建造で消費した資材は、整地すれば戻ってくる。

だからとりあえず、てきとうな広い場所にファミレスを建てることにした。

視界のアイコンにカーソルを合わせ、意識を集中すれば、建物自体はすぐに建った。

ファミレスは駐車場つきの広い建物だった。

上から見れば『L』のようなかたちをしていることだろう。

飾り気もなにもない灰色の建物に、オレンジと赤でできた、日本

語でも英語でもこの世界の言葉でもない、おそらく著作権に配慮した末である意味不明な店名の看板が虚しく輝いていた。

レヴィアはしげしげとファミレスを見ていた。

建築様式や素材など、彼女からすれば物珍しいからだろう。

まあ、建造物というだけならすでに何回か住居なら建てているのだが、事態が事態だっただけにじっくり見る雰囲気でもなかったし。しばしファミレスをながめて、レヴィアが感想を漏らす。

「……これがふぁみれすなのか？ なんとなく不気味だな……用途が想像つかんというか、中によからぬ気配を感じる」

ひどい言われようだった。

……確かにファミレスというものを知らない人が見たら、用途のわからない不気味な建物かもしれないけど。

言われたせいで僕にまで何らかの収容所めいて見えてきたじゃないか。

よくよく思い出せば、留置場なんかもこれと同じシルエットだったような……いや、よそう。

それにしても、中によからぬ気配を感じるというのはどういふことだろうか？

僕が建造物を建てる時が、だいたい緊急事態だったせいで、悪いイメージをもたれてしまったという話だろうか？

何にせよ、入ってみたいことには何もできない。

僕はレヴィアを伴って、中に入ることにした。

彼女を連れて正面玄関へ。

当たり前のようにそこには自動ドアがある。

……そして、当たり前のように、開かない。

うん、そうだよな。

電気通ってないもんね。

もう入口が開かない時点であらゆる希望を捨ててもいい気がしてきたのだが、『まだあきらめたくない、味のない豆だけを食べる旅は嫌だ』と僕の心が叫んでいたので、悪い予感を無視して、手で自動ドアを開く。

電気の通っていない自動ドアは意外とすんなり左右に開いた。

そして中に入れば　これも当然、内部は暗い。

……ファミレスというものに、人でにぎわっているイメージがあるせいでだろう。

暗く、人の気配がないこの場所には、確かに不気味さを覚える。

ゴーストタウンを思わせる静けさだ。

僕たちは理由もなく足音を潜ませて内部へと侵入していく。

毛足の短い灰色の絨毯を踏み、四人がけの席の横を通って、向かう先は厨房だ。

「……気をつける。あそこからよくない気配がする」

指し示されるのは厨房だ。

らしくない。目指す場所によくない気配があるなんて、まるで奥にボスが構えるRPGのダンジョンのようだ。

ここまでRPGとかけ離れた建物を建てておいて、中で待ち受ける展開がRPGだというのは、今この場を満たす緊張感を思えば、笑えない話だった。

ついに厨房にたどりつく。

ここは、カウンターの裏手にある、扉のない空間だ。そういえば元いた世界でファミレスの厨房に入ったことなどなかったなと場違いな感想を抱きながら、ゆったりと内部に歩を進める。

あまりに暗い。

巨大な獣の口腔を思わせる。

「止まれ」

鋭く、しかし小さな声でレヴィアが言う。

僕は考えるより早くその指示に従った。

僕にも見えたのだ。

厨房の奥でわずかにうごめく、何かが。

レヴィアが剣を抜いてゆったりと奥へ向かう。

すごい度胸だ。僕が行動の主導権をもっていたら、一目散に逃げ出すという選択をしただろう。

しばし無言で間合いを詰めてから、彼女が叫ぶ。

「誰かいるのか！」

その問いかけに

厨房の奥の何かが、ゆらりと動いた。

立ち上がった、と気付くのに一瞬の間が必要だった。

ソレが人型であると判断するのには、さらに時間を要することになった。

背の高い、細身の人型だ
ただし、ただの人型と判じるには一部、異様なシルエットがあった。

まさかな。

いや、そんなわけないよな。

つい、あの人型について、ありえない妄想をしそうになった。
僕も疲れているのだろう。

よく考えれば僕は異世界に来たのだ。
ゲームをしてたら異世界。疲れて当たり前だ。

最初は興奮や事件続きで疲労を自覚する暇もなかったが、今、こうして緊張と同時に疲労感も思い出したようだ。
さもなければ説明がつかない。
あの人型は、そのぐらい、ありえないシルエットなのだ。

僕が自分の判断に自信をもてないでいると、その人型はついに暗闇の奥から光のもとに現れる。

そいつは

身長の高い。

緑色の髪で片目を隠した。

全体的に細身の

ただし、胸だけが異常に大きい。

黄色い、フリルなどで飾られた、スカート丈の非常に短い、胸の谷間が見える衣装を身にまとったウエイトレスさんにしか見えなかった……！

ファミレスにウエイトレス。

いや、わかる。普通の組み合わせなのだけれど、問題は今しがた僕が建てたばかりの建物に、当たり前前みたいな感じでウエイトレスさんがすでにいることなのだ。

レヴィアが剣の切っ先を向けてたずねる。

「貴様、何者だ！」

ウエイトレスは答えた。

それこそ、当然のように マニュアルに書かれたテンプレートを読み上げるように。

「いらっしやいませお客様ー！ わたくし、ウエイトレスのサイクルロプスでございます！ 何名様でしょうかー？」

13話

サイクロプス。

僕はその名前を覚えている。

ただし、人名としての記憶ではなく、あくまでも名称としての記憶だ。

サイクロプスという魔獣がいた。

そいつの人格や生活、性格なんかは知らないし、そもそも、たぶんそのような人間味あふれるプロフィールは存在すらしなかっただろうけれど。

この世界に来て初めて、そして唯一『整地』した
整地後、肉を取得した存在。

それがサイクロプスだったはずだ。

「いえ、知らないんですけどね、詳しいことは。気付いたらここにいたっていうか？ ほら、アルバイトしないと生活できませんし。働かざる者死ねみたいな基本理念が頭に書きこまれていたっていうか？ ニートに死ねとかとんだ資本主義ですよねー」

……どうやら彼女は、僕がいた世界の文化に精通しているらしい。反対にレヴィアはサイクロプスの話を聞いて、わけがわからないという顔をしていた。

ともあれ 敵意はないだろう。

むしろどちらかと言えば、ファミレスに来て、勝手に厨房に侵入したあげく、ウェイトレスに剣を向けているというこちら側が敵役である。

僕はレヴィアに片手をかざして、剣を納めるよう指示する。
彼女が不満げな顔で言った。

「……アレは敵ではないのか？」

「たぶん、違うと思う……確信はないけど」

「ふむ。確かに戦う格好ではないな……というか、戦う体型ではないな！ なんだあのふしだらな胸は！？ これ見よがしに半分出しおって！ 私に対する嫌がらせか！？」

きつとたぶんそんな意図はない。

というか、レヴィアの成長は今後に期待なのではなからうか。

まあ、胸談義は突っ込みを入れると泥沼化しそうなので、ひとまずスルーして。

「……サイクロプスさん？」

「はい、どのようなご用でしょうかお客様？ あとできれば座席に着いていただけますか？」

「あ、いや、その前に……ここはファミレスで、あなたはウェイトレスなんだよね？」

「はい。接客と簡単な調理、それから清掃なんかが業務内容だつて聞いてまーす。でもアットホームな職場とかいう話だったんですけど、お前のホーム暗くね？ って感じですよー。電気通つてないとかぶつちゃけありえないっていうかあ」

「……簡単な調理できるの？」

色々言われる中で、僕が一番気になった発言がそれだった。

サイクロプスが不満そうに「ぶー」と頬を膨らませる。

「でーきーまーす！。ひょっとしてお客様も『胸に栄養がいつてると脳に栄養が足りない』とかいう信仰の持ち主ですかあ？ その信仰は十年ぐらい前に廃れたと思うんですけどー」
「いや、そうじゃなくって……材料はあるの？」
「ありますよー」

材料がある。

つまり 僕は豆を食べなくてもいいということだ！
しかし新たな疑問もわいた。

「その材料はどこから仕入れてるの？」

「仕入れ担当に聞いてくださいーい。サイクロプスちゃんの仕事は接客、簡単な調理、清掃です」

「じゃあ仕入れ担当は誰？」

「他の人じゃないですか？」

「他の人はどこに？」

「いませんけど？」

…… 会話がどうしようもないな！

つまり答えは出ないということだ。

…… うん、まあ、その、出所不明の材料が怖いのも確かだったのだが、大豆のみ生活と比べれば些細な問題というか、ようするにたまにパフェとか食べられるなら最高なのだった。

「……とりあえず、試しに何か作ってみてほしいんだけど、いいかな？」

「はい。ドリンクはドリンクバーをご利用くださいね！。サイクロプスちゃんが調理するのはパフェとかデザート系なのでガッツリ

したのは作れません」

「じゃあ、とりあえずパフエを二人分」

「あ、無理です」

「なんで!?! 今、パフエとかは担当だつて言つてなかつた!?!」

「いやいや。電気通つてないのに調理できるわけないじゃないですか。ファンタジーやメルヘンじゃないんですから」

この世界はファンタジーで、あなたの存在はメルヘンだよ。

とかいう突っ込みもあったが、確かに言われた通りだ。パフエの詳しい作り方は知らないけれども、調理にガスや水道、電気は必要不可欠なのである。

「つていうかお客様、サイクロプスちゃんはさつさと電気とか通してほしいんですけど。このへん寒いしー、制服は色々出過ぎだしー、仕事で冷蔵庫入ったりするしー、暖房欲しいつていうか」

「いや、僕に言われても……」

「あれ? お客様つて発電所とかも建てる人でしょ?」

発電所。

……うん、僕が建てられる建物の中に、確かにその名称はあった。資材も足りている。

城壁を整地したお陰か、鉄材なども潤沢にあった。もっとも、土や石、木などに比べると心許ないので濫用はできないが。

「でも発電所建てたからつて電気通るのかなあ? 電気つて、作るのにけっこうな手間がかかるし専門知識だつているはずなんだけど」
「手間とか専門知識とか、何言ってるんですか? それ、本当に必要?」

サイクロプスはいちいち僕を絶句させてくれる。

本当に必要か。

……必要なさそうだよなあ。

だって、現に、なんの専門知識も手間もなく、ぼんぼん建物を建てているのだ。

それに、トライするだけなら無料である。

やって損はない。ダメなら整地すればいいだけだし。

「わかった。とりあえずやってみる」

「あ、ついでに従業員も追加してくれませんか？」

「どうやって？」

「そういえばお客様はどうやってサイクロプスちゃんを雇ったんですっけ？ 面接とかしました？ 写真で一発OK？ それともともととも知り合いだった？ お客様とサイクロプスちゃん幼なじみ説浮上ですか？」

残念ながら、小さいころ、近所にサイクロプスが住んでいた記憶はないな……

それよりも気になったのは、彼女の中で、僕が彼女の雇用を決定したことになっていいる事実だ。

だったらお客様じゃなくて僕は店長なんじゃないだろうか。

ともあれ彼女を雇った方法というのは明らかだ。

魔獣を整地する。

……彼女の様子を見ると、別に魔獣以外の生物を整地してもこんな感じでひょっこり現れそうな気がしないでもないが、さすがにレヴィやマナフ、街の人で試す気にもなれない。

あと。

僕が整地した人みんなが、元の人格を無視してサイクロプスみたいなノリになるのだとしたら、ちょっと申し訳なさ過ぎる……！！

個人的に、サイクロプスみたいな子は二人と知らないキャラクターなのだけれど、確かに従業員はほしいのも事実だ。

調理担当と仕入担当ぐらいはしないと、仮に電気を通したところでパフエしか食べられないという事態になりかねない。

甘い物は好きだが、毎日は胸焼けする。

是非とも魔王を倒す旅の間、よりよい食生活を送るために人員がほしい。

方針を決める。

僕は、レヴィアに話しかけた。

「というわけですまないんですけど、付き合っしてほしいんだ……」

「どっとうわけなのか、私にはまったくわけがわからんぞ……いや、ご主人様に付き合うのはやぶさかではないが。するべき行動が何かぐらいは言ってもらわないとどうしようもないというか」

「あー……ええっと、従業員をヘッドハンティング……」

「……わからない」

「だよねえ。こっとうの、どっとう言っただっけ」

しばし悩む。

なんかRPGでこっとういうケースのことを表わす慣用語が確立されていた気がするんだけど。

ああ、そうそう、そうだ。

思い出した。

「 雑魚狩りに付き合っしてほしい」

RPGではお約束の。

普通、レベル上げのために行なわれる作業を、提案した。

14話

雑魚狩りとは本来、魔獣の出そうな場所をぐるぐる回り、出会った魔獣を倒す作業だ。

だからこうして、僕とレヴィアは森に来ている。

街というか、その跡地というか、そこから東側に少し進んだあたりには、未だ人の手がついていない、広大な自然が広がっていたのだった。

「このあたりならば魔獣も多かるう。私の訓練になるほど強い者はおらんがな」

とのことである。

レヴィアのレベルというのか、強さは相当なものらしい。

なので、彼女が今示した指標がどの程度役立つかは不明ではあるが……

少なくとも、僕というお荷物があっても奇襲に対応できるぐらいの余裕はありそうだという解釈はできそうだ。

こうして今から森に入り、ヘッドハンティング 僕らは雑魚狩りという名の店員雇用を始めるわけだが……

しかし僕は考えた。

めんどくさいよね、それ。

そこで思いついた手段があった。

「そのへんの森を整地していったら、何匹か魔獣も巻き込めないかな」

巻き込む。

こと建造物をロックオンした場合、僕の『整地』にそのような心配は無用らしいことは、すでにわかっている。

だが、最初、まさにあのサイクロプスを整地した際には、空間を丸ごと均すことができた。

僕は覚えている　サイクロプスを消し、その足元の草むらまでただの地面に均したことを。

だから、仮説を立てたのだ。

ひよっとしたら、建造物以外であれば、一定の空間をまるごと整地できるのではないかと。

レヴィアが困ったような顔をする。

「いや、整地と言われてもな。私にはほとんどわからぬことばかりだ」

そりゃそうだった。

彼女に聞いてもしょうがない。

しかし、彼女は彼女なりのありがたい見解をくれる。

「けれども、このあたりは街人からすれば木を切り出すにも危険な土地らしいので、誰も近寄らんらしい。多少暴れても問題なかるう」

問題なからう。

その発言は、ストレスやら責任やらを負うというのが大嫌いな僕には、とてもありがたい至言なのである。

ゴーサインをもらった気分だ。

というわけで、僕は意気揚々と思いついた手段を実行することとする。

意識を集中すれば、建造の時も整地の時も出てくる、青白く発光するキューブ状の何かが出現した。

一辺が三メートルほどのキューブである。

……森をランダムに整地していくには心許ないというか、試行回数が多くなってしまいそうな大きさであった。

なので、僕は念じることでこのキューブを大きくできないかと画策したが……
できなかった。

この微妙なユーザインターフェイスの悪さが、古いゲームを思わせる。

しょうがないのでとりあえず、目に入った場所三メートル四方を平らにする。

整地したあとには何も残らないので、魔獣を巻き込めたかどうかの判別は取得した資材によって行なうこととなった。

視界右下のアイコンには次々と『木』を取得しました』『土』を取得しました』というメッセージが浮かんだり消えたりしていく。

……肉を取得していれば、それは魔獣か動物を整地したということになるだろう。

あとは回数をこなすだけだ。
レヴィアと雑談なんぞしつつ、次々整地していく。

「しかしご主人様、私は恐ろしいことに気付いてしまった」
「どんな？」

あ、『肉』を取得しました』。一人ゲット。

「こうしてご主人様が森を次々更地に変えていく　まずはその事
実が恐ろしい」

木と土、それに石ばかりが積み重なっていく。
魔物の生息密度はそんなでもないらしい。

「そして、ご主人様の才覚を早めに認め、軍門に降った私自身の慧
眼が恐ろしい」

……いや、それは全然見抜いてなかった気がするんだけど。
あと僕のコレは才覚とかではなくて、単純にルール違いというか、
言ってしまうとチートスキルみたいな感じなんだが、いたずらに夢
を壊すこともあるまい。

「最後に　こうして次々森が更地にされていく光景に、早くも順応し始めているのがものすごく恐ろしい」

うん。

確かにそうだ。

森が次々更地になる。しかもそれが個人の能力によるものだといふのは、かなり異様なことのはずなのである。

なのに、僕は何も感じていない　言われてみればたしかに、それは恐ろしいことに思えた。

あと。

今し方、二つ目の肉をゲットしたのだけれど。

僕がだんだん従業員＝肉という感じに思い始めているのも、なかなか恐ろしい。

いずれ追加従業員が必要な事態になった時、『ちよつと肉狩りしてくるね』とか素で言い放ちそうですごく嫌だ……！

……ともあれ、当初の目標である二人の従業員は、たぶんゲットできた。

これで従業員雇用の方法が実は整地じゃなかったとかいう話になったら困ってしまうが、それはそれとしていい経験になっただろう。

ミートハンティング

肉狩り……ではなくヘッドハンティングを終えて、街の方へ引き返すことにする。

レヴィアに声をかけようとそちらを見る。

彼女は面積を六分の五ぐらいに減じた森を前に立ち尽くしていた。

「つまらん妄想を聞いてくれるか？」

彼女が言う。

僕はうなずいて、促した。

「いつか魔獣が駆逐され、人の文明が安定を迎えたら、このように、人の手で森が切り崩される日が来るのだろうか」

唐突に社会派なことを語られてしまった。

文明の行く末というか、この世界よりよっぽど未来世界から来た僕としては、否定できないし笑い飛ばせない妄想ではあるが、だからこそ反応に困るというか。

「……………それがどうしたの？」

「いや、竜人族は自然と調和し生きる種族だという話を聞いたのである。……………ともすれば、竜人族がこの世界から消え去った理由は、人が森を切り崩し街を作る様子を嫌気がさしたからではないかなと思っただけだ」

彼女が語ったのはパブリックな話題ではなく、あくまでもプライベートなことらしかった。

……………そういえば彼女は『竜人族のあり方』みたいなものをよく口にするが、肝心の『この世界に竜人族が一人きりな理由』にはあまり触れない。

触れたくないのか。

情報がないのか。

僕にはわからないが 本当に西の魔王が竜人族の成れの果てならば、答えが出る可能性だってゼロではないはずだ。

僕はレヴィアのこめかみから生えた角に手を添えた。

彼女がピクリと反応する。

だが、振り払われたりはしなかった。

少し安心する。

あんまりにも寂しそうだったのでついやってしまったけれど、いきなり女の子の頭 というか角に手を置くというのは、我ながらかなりハードルの高そうなことをしてしまったと冷や汗をかいていたのだ。

「そろそろ旅立つとするかな」

答えを見つけるために。

彼女のルーツを、仲間を、歴史を、境遇の理由を探すために。

ようするに。

長居しすぎだ。

いい加減旅立てという話である。

実際にはこの世界に来たのが昨日であり、今はまだ翌日の昼間なのだが、なんだかもものすごく長い時間をこの土地で過ごしているように錯覚する。

たぶん、イベントが多すぎたせいだろう。

いきなり魔獣に襲われるわ、街を襲撃した魔王に出くわすわ、神様扱いされるわ……返す返すも盛りだくさんすぎる。

その最初のイベントで出会った少女は。

「うむ」

古くさい、幼い容姿に似合わない言葉でうなずいた。
それはもう、染みついてとれない癖なのだろう。

……無理矢理大人びてまで旅立つしかなかった彼女の経歴にわずかな同情を覚えつつも、それは余計なお世話だと自重する。

まあでも、何か、その寂しそうな顔を見ていると言いたくなるのも事実で。

こういつ時に言うべき言葉が簡単に見つかるほどコミュニケーション力が高くないのも、また事実で。

だから僕は。

「じゃあ、ちょっと西まで、魔王を倒しに行こう」

なんて。

らしくない発言でお茶を濁すだけが、精一杯だった。

15話

さあ旅立とう。
でもその前にご飯だ。

せつかく上がったテンションに水を差すようなことになってしまい申し訳ない限りだが、食事は大事なので無視するわけにもいかないうのも、どうかわかってほしい。

というか、肉狩りを終えて元いた場所に戻ったら、マナフが起きていたのだ。

そして彼女が言う。

「睡眠と食事は美容の基本だもの。人前に立つんだから自分のお肌に気を遣うのは当たり前でしょう？ あたしはお腹空いたら一歩も歩かないわよ」

歩けない、ではなく、歩かない。

その口ぶりに彼女の動かしがたい決意を感じた僕らは、旅の前に食事をとることとした。

発電所。

水道局。

この二つを隣接して……実際は隣接させなくとも道路が何かでつながってしまえば機能するはずだがそんなことをする理由がないので、隣接して建造することで、ファミレスは営業を開始した。

レヴィアとマナフを連れて、遅めの昼ご飯などとりについてみる。すると、軽快なBGMの流れる明るい空間で、ウェイトレスが僕らを出迎えてくれた。

「いらっしやいませお客様ー。何名様ですか？ お煙草吸われますか？」

マニュアル通りの対応をする、片目を髪の毛で隠した 彼女の出自を思えば、髪の毛の下にもう片方の目があると言い切れないのが怖いところだが ウェイトレスのサイクルロブス。

三名様です。煙草は吸いません。でも席に着く前に従業員を見せてください。

そんなことを言いつつ厨房へ向かう。

厨房もやはり明るい。

だから最初に入った時のように目をこらさずとも、そこに二人の新メンバーがいることがわかった。

「あ、どもツス。調理担当のウォードツグでツス。最低限食べれるもん出すんで。よろツス」

犬耳を生やした、コック服の少女だった。

どこことなくけだるげな顔をしており、口にはなぜかキャンディをくわえていた。

かなり小柄だが厭世観のある雰囲気ので大人びて見える

というか生活に疲れたブラック企業のOLみたいな、死んだ目をしていた。

そしてもう一人。

「調理担当のウオードッグであります！ チーフコックであります！ 精一杯料理をしていくのでよろしくお願いするであります！」

……ウオードッグとウオードッグでかぶってしまったな。

こちらもやはり、犬耳を生やした、白いコック服の少女であった。体型、顔立ち、何もかもがもう一人のウオードッグと似ている。

ただ、身にまとう雰囲気、生真面目でがんばりやという感じなので、見分けはついた。

まあ、同じ名前の従業員がいるのも納得できる理由は思いつく。

RPG的に考えれば、同じエリアにはだいたい同じような魔獣が出現するものだ。

なので同じ森の中で肉狩りした結果、ウオードッグなる魔獣が二匹ひっかかる可能性は決して低くはないだろう。

自分の中で答えが出たのでそのあたりは置いておいて。気になることをたずねる。

「ところで仕入れ担当は？」

「他の人じゃないツスか？」

「自分たちではないであります！」

「じゃあ他の人は？」

「知らねツス」

「わからないであります！ あ、ウェイトレスのサイクロプスさんがフロアにいるであります！」

……仕入れどうなってんだこの店。

まあ、まあ、まあ。

怖いという気持ちがないでもないが、とりあえず四人がけの座席に着く。

そして当たり前のように存在する、ラミネート加工された、ファミレスによくあるメニューを開いた。

そこで僕は、ありえないものを目にする。

『北海道産ズワイ蟹のクリームパスタ〜イクラを添えて〜』

北海道！

なんだよ北海道って。

試される大地か？

例の、僕がよく知ってる、毎年日本で初めて雪が降るアレでいいのか？

この大地、僕を試してやがるのか？

ファンタジーがいよいよ行方不明だ。

他にもよく見れば様々な名産品を使用したメニュー……もちろんこの世界の名産品ではなく、僕がよく知る日本の名産品である……が列挙されていた。

いや、ファミレスではたしかに、こういった地方名産を用いたメニューをよく見るけど。

これは 頼まざるを得ない。

僕が注文する物は決定した。
他の二人にたずねると

「とうか、この……文字なのか、これは？ 知らない言語だ。読めない」

「カラフルでいいわね！ あたしの舞台の背景にしたいぐらいよ！」

ということらしいので、絵でメニューを選んでもらう。
ウェイトレスのサイクロプスを呼んで っと、危ない。

金額の確認を忘れていた。

ここで日本円を要求されたら詰む。

とか心配していたものの、メニューを見ても金額の表示がない。
まさか時価なんていうことはないよなと思いつつ、ウェイトレスを呼んだ。

「ねえこのメニュー、いくらするの？」

「やだもーお客様つてば。いくらするのとか。サイクロプスちゃんとお客様の仲じゃないですか。通帳から勝手に引いておきますよ」

「どんな仲だよ！？」

通帳をあずけた覚えはねーよ！
僕たち、実は結婚してるの！？

「まあ、冗談は置いておきましてー」

存在が冗談みたいなのは、冗談みたいに大きな胸を下から支えるように腕を組む。

何かを考えこんでいる様子だった。

「金額については書いてる通りじゃないですか？」

「いや、書いてないから聞いているんだけど」

「だったらタダですよ」

……いいのかそんなんで。

このファミレス商売する気ねーな。

ともあれタダでいいなら、注文しよう。

一説には『タダより高い物はない』という話もあり、まさに今回のケースに当てはまりそうな格言にも思えたが、さすがに僕も空腹が限界なのと、北海道産のズワイ蟹が本当に出てくるのかという興味の前には些細な問題だった。

僕がパスタ。

レヴィアがオムライス。

マナフがハンバーグを頼む。

サイクロプスが注文を受けて、例のファミレスとかでよく見る、受けた注文を入力するテレビのリモコンみたいなアレを操作しつつ、厨房へ戻っていく。

十分とかからず、品物が運ばれてきた。

……湯気を立てる、温かなパスタである。

クリームソースにはたしかに、カニとイクラの姿があった。

僕はサイクロプスにたずねる。

「……この蟹って産地はどこ？」

「えーっと……待ってくださいね。厨房に確認しますのでー」

戻っていく。

……メニューを覚えていれば『北海道』と即答しそうな気がしたが、サイクロプスの従業員意識はそこまで高くないらしい。

サイクロプスはしばしして戻ってきた。

そして、営業スマイルのまま言う。

「北海道産ズワイ蟹のクリーム Pasta ですー」

「……つまり、産地は北海道っていうことでもいいの？」

「いえ、北海道産ズワイ蟹のクリーム Pasta ですな」

「いやいや、だから産地は北海道ってことでしょ？」

「いえいえ、ですから、北海道産ズワイ蟹のクリーム Pasta ですよ
っ
っ」

かわいくウインクして小首をかしげ、胸を強調するようなポーズをとるウェイトレス。

フリルに彩られたミニスカートが揺れるのがとてもセクシーだった。

……やべえよ。全力で誤魔化しにきてる。

怖すぎる。

これ食べていいのか？

食べても何も起こらないのか？

僕がフォークを片手に固まっていると。

レヴィアとマナフが我慢できないように聞いてきた。

「ご主人様、食わんのか？」

「ちよつと管理^{マネージャー}人、先に食べてくれないとあたしも食べにくいんだけど」

意外と行儀のいい二人である。

……まあ、考えてもしょうがないか。

毒ではないだろう、たぶん。

それに、こうして注文して出てくるのがわかってしまった以上、仮にここで我慢したところで、いつか絶対大豆生活に耐えきれずファミレスに頼る場面が出てくる。

覚悟を決めよう。

「それじゃあ、いただきます」

僕らはいいさつをして、食事にかぶりついた。パスタをフォークにからめていただく。

衝撃が走った。

これは……！

一口ほおばると、口いっぱい蟹の風味が広がる。

濃厚なクリームは細いパスタによくからまり、味にムラもない。

噛みしめれば、アルデンテに茹でられたほどよいパスタの固さ、

プチプチと小気味よくはじけるイクラの食感。

その度に口にひろがる魚卵のややクセのある味わいが、パスタと絡み合つてとてもいいアクセントになっている。

蟹の肉も大きく、一度じゃ噛み切れないその食感はとてもゴージャスな気分させてくれる。

よつするに、とても美味しい。

産地なんてどうでもいい！ 僕は三食このファミレスを使っぞ！

味に耽溺していた。

ふと現実に戻り、二人を見れば 夢中でかぶりついている。

やはり美味しいらしい。

食事はあっという間に終わる。

僕はサイクロプスに『またお越しく下さいねー』と見送られながら、外に出た。

まだみんな夢見心地だ。

かく言う僕も、衝撃から立ち直れている気がしない。

美味しい食事は人をかくもトリップさせるものなのか。

もしくはトリップする何かが入って……いや、よそう。それは考えない方がいいことだ。

……いつまでも惚けているわけにはいかないだろう。

いよいよ旅の始まりだ。

僕は資材節約のためとりあえずファミレスと発電所、水道局を整地した。

それからレヴィアに向き直り

「おいご主人様！ 整地してしまっているのか!？」

「あつ、しまった!？」

整地した！

整地しちゃった！

中にサイクロプスとウォードッグ×2がいたのに！

思わず、今までファミレスのあった位置を二度見する。

が、そこにはもう何にもない。ただの更地が残るだけだった。

……いや、いやいやいや、まだ慌てるような時間じゃない。

おちちゆけ。

僕は心拍数が嫌な高まりを見せ、呼吸が苦しくなるのを感じながら、全身を震わせつつ、もう一度ファミレスを建てた。

暗い。

当たり前だ。発電所と水道局は建てていないのだから。

僕は、おそろおそろの中に入る。

すると、そこには。

「いらっしやいませお客様ー。忘れ物ですか？」

何も変わらない様子のサイクロプスがいた！

僕は震える声でたずねる。

「そ、その、大丈夫なの？ 整地しちゃったけど……？」

「整地？ よくわかりませんがサイクロプスちゃん的には停電してることの方が大問題ですよ」

「いやその、一瞬だけとはいえ、完全に消滅したように見えただ

けど……体調は？」

「はあ、消滅程度、別に。だってホラ、かわいいウエイトレスのサイクロプスちゃんはいつでもお客様の心の中にいますし。不滅って
いうか？」

ウエイトレスってすげー！

ともあれ無事でよかった いや、一度はまったく無慈悲に平らに均してしまっただよな気もするのだけれど、こうして彼女が健在なようで何よりである。平らになったはずの影響も、その体型からは見受けられないし。

……ともかく。

食事も自由にとれることがわかった。

一度整地しても、また建てれば何事もなかったかのようにサイクロプスも復活するし。

というわけで。

今度こそ旅を始めよう。

準備は万全。

ノーカットどころかフルカットでもいけそうな、ストレスフリーな魔王を倒しに行く長旅の開始である。

16話

領主のおねーさんにあいさつをして、僕らはいよいよ旅立つことにした。

見送りをしようという提案もあったが、厳肅にお断り申し上げた。

復興作業で大変そうなのである。

建造物を好き放題建てる僕の出番はまだまだ先のようにだし、ちょっと魔王倒しに行くだけだからということ、見送りナシの方向でおねーさんを説得した。

その際にこんな会話があった。

「……しかし神様にこう申し上げるのも、無礼になってしまいかも
しませんが……」『ちよつと魔王倒しに行くだけ』というのも、す
さまじいことですね」

「たしかにそうかもなあ……いえ、僕的には『簡単なことだから心
配はいらないよ』って言いたいだけなんですけど」

「そうですね。ですが、せめて、祈らせてくださいませ。どう
か、ご無事で。神様にとっては簡単なことかもしれないけれど、
わたくしのような凡人からすれば、それは歴史に名を刻むほどに困
難な一大冒険なのでございます」

「まあ、そうですね」

「そして願わくば、これを、お納めください」

と、渡されたのは手のひらサイズの小さな革袋である。

長い革紐で口が綴じられていた。

首から提げたりできそうだった。

「これは？」

「祖母の代から伝わる指輪でございます。本来は男性側から女性側に渡すものなのですが、現在、我が一族の当主はわたくしですので……帰って来たら、それを、神様からわたくしにお返しただきたいのです」

「ん？ どういうこと？」

「それが婚姻の際の正式な手順でございますれば」

……その話、マジなのか。

どうしよう…… 『まさかな、いや、その場のノリの冗談みたいなもんだよな』 と思ってスルーしてたらいつの間にか引き返せないところまで話が進んでいた気分だ。

ポイントオブノーリターンである。

僕は曖昧に笑うしかできなかった。

領主のおねーさんは、まさに神に祈るようにひざまずき、祈るように手を合わせて。

「どうか、ご無事で。わたくしを式の前に未亡人にしないでくださいまし」

真剣な声で、そう言った。

彼女が真面目なのはわかるのだけれど、僕にはもう、それが死亡フラグを強化されているようにしか聞こえなかった。

というのが理由のすべてでもないが。

指輪のついでとばかりに。

「あとこれ」

……と、渡された革製の、ブーツみたいな靴の方が、僕にはあり

がたかった。

いや、その。

今まで黙ってたんだけれど。

実は僕、裸足だったんだよ……！

言い出す機会がなくなつて地味につらかった。

内助の功とはこういうものかと、領主のおねーさんに対する好感度が一気に上がったほどだ。

でも結婚はちよつと考えさせてね！

閑話休題。

見送りを断つたので、旅の始まりは至極静かなものだった。

道路を作つたり整地したりして、どんどん高度を上げていく。

しばらく坂道を登れば、もうそこは空だ。

僕らは空中に引かれた道路を歩いて行く。

荷物はレヴィアが持っている大きなリュックだけだった。

僕とマナフは手ぶらである。

女の子、それもこの中では一番小さな子に荷物すべてを任せることに、もちろん罪悪感を覚えたので、手伝おうと提案したのだけだ
ど

「竜人族は頑強で力が強いからな。私にとって、これしきの荷物は重くもなんともないのだが」

むしろ、手伝うと言わせてしまつて申し訳ないというように、彼

女が言った。

僕は食い下がる。

「せめて持ち回りにするってというのは？」

その提案をした瞬間に、マナフが「あたし嫌よ。そういうのは女優じゃなくて付き人の仕事でしょ？」とか言ったが、スルーした。

レヴィアも耳に入れなかったようで、僕に対してだけ返事をする。

「かまわんが……いや、気を遣わせると言って言わなかったのだが、それなりには重いぞ？ 私にとってではなく、竜人族以外の種族にとつてだが」

「だったらなおさら任せつきりはできないよ」

「いや、その、重いというのは少し言葉足らずだったかもしれん」「？」

「……まあよかろう。よく考えれば、私は今まで人と己の力を比べることが少なかったからな。昔は同じ年の子供相手に力比べをよく泣かせていたものだが、大人が相手であればそこまで深刻な腕力差異はないかもしれん。一度、あずけてみよう」

そう言つて、リュックを下ろす。

僕はその肩紐に手をかけて、持ち上げてみた。

……持ち上げようとしてみた。

「……おかしいな、動かないよコレ」

「ご主人様は豆の袋を持ったことはあるか？」

「ないけど」

「ふむ、その、なんだ。……豆は軽いが、それは他の穀物などに比べれば軽いという話であり、別に羽毛のように軽いというわけではないのだ」

「つまり」

「軽いと言ってもそれなりに重い。他の荷物も入っているしな」

それなりってレベルじゃない。

動きもしないというのは、ちょっと異常だ　いくら三人分、一週間の豆だとしても、こんな僕が引っぱっても動かせないほどの重みになるものか？

……まあ、現実には、動かせないほどの重みになっているわけなのだが。

「やはり私に任せてもらった方がいいだろう」

「……申し訳ない」

「謝る必要はないぞ。むしろ、ご主人様の荷物を持つことは奴隷である私の仕事だからな。当然のことをしているまでだ……それに、先ほども言ったが、私にとってはそこまで重いものでもない」

「でも、大きな剣と鎧まで装備してるじゃないか」

「……別に剣も重いとは感じていない。普通の剣だと振っただけで折れるので、必要な丈夫さと、満足のいく重さを求めたら、いつの間にかこんな感じになっただけだ」

彼女の腕力を見た目から測ろうというのが、愚かな行為だったよ
うだ。

僕は大人しく荷物をレヴィアに任せることにした。

そして、さらに進んでいく。

進んで。

進んで。

まだ進んで。

いい加減日が暮れるまで進んで。

僕はようやく　実際に旅を始めるまで予想だにしていなかった、
重大なる問題に気付いた。

「魔王の住んでる場所、遠いな！」

へとへとな体に鞭打つように叫ぶ。

遠い。

マジで遠すぎる。

そりゃあ、多少は距離が離れていることは、覚悟していた。

日数がかかる旅路になるだろうなということだったって、意識はしていなかったが、無意識には感じていたことだろう。

ただ　実際に歩いてみて。

ひたすら歩くというのがここまで疲れることだというのが初めて知った……！

今日だけでも六時間とか七時間は歩いたんじゃないか？

もう、ぐっすり眠って、明日は一日休んでいたぐらいの気分だ。

なのに、魔王に出会うまで、この旅路は毎日、当たり前のように
続いていくのだ。

ぶっちゃけありえない。

いや、こういうこと言いたくないんだけどさあ……

僕、現代人なんだよ。

体力ないよ。

僕、インドア派なんだよ。

汗かくのとか好きじゃないよ。

毎日こんなにウォーキングして、僕が健康的になったらどうするんだ……？

誰か責任とってくれるの……？

とにかく、今日はもう無理だ。

足が痛い。

たぶん、血豆とかできてるよ、絶対……

僕の叫びと疲労を汲んだのか、レヴィアが提案する。

「今日はこのあたりでキャンプをするか」

そう言っただけ彼女はリュックを下ろす。

「ごそごそと、傍目にはリュックに体ごと突っ込むようにして、何かを探し 取り出した。

それは大きな布の塊であった。

「実はテントを用意してみたのだ。……いつもは一人だから必要ないのだが、今回は集団での旅になるということだからな。ちょっと奮発した」

楽しそうだった。

集団での旅はどうにも初めてっぽいので、彼女もこれでワクワクウキウキしているのだろう。

はしゃぐような様子で、テントを設置しようとするのだが……

「……ご主人様、残念な報告がある」

「どうした」

「テントの設置は、まず、テントの骨組みを作り、風などで飛ばさ

れないよう、鋌で地面に打ち付けるようなのだ」

「うん」

「この地面、鋌が刺さらない」

……あー。

地面というのは、僕が空中に引いた道路である。

道路に限らず、僕の造った建造物は魔王の攻撃にも余裕で耐える、僕が整地する以外には破壊不可能という仕様である。

鋌が刺さらないのも無理はなかった。

「……テントは、無駄になってしまったようだ」

それは悲しげな声だった。

非常に申し訳ないことをしてしまった気分になる。

しかも

追い打ちをかけるように、雨が降ってきた。

……僕は、旅というものに対して色々と配慮や考えが足りなかったらしい。

上空にぼつんと浮かぶ道路だけに、周囲に雨宿りできそうな場所もなく、しかもテントも建てられないのだから、雨をしのぐ手段は絶望的だ。

今さら地上に降りようにも、けっこうな高さになってしまっていた。

坂道を作っただんだん高度を下げるという下り方になる以上、安全な高さまで降りるにはあと最低でも一時間ほどの徒歩が必要となるだろう。

そうなれば、もうずぶ濡れだ。

さて、どうするか。

というのは、考えるまでもなかった。

僕にできること、僕が思いつくことなど、決まっているのである。だから状況を打開するために、二人に告げる。

「じゃあ、ちょっと建築してみようか」

雨風をしのぐ。

そのための 最適な建物を用意してみよう。

17話

宿泊施設。

そのような名前の建物が、僕の建造できるものの中に存在する。

実際に建ててみれば、それはホテルや旅館という感じではなかった。

ビル。

ようするに、カプセルホテルやビジネスホテルに該当する、簡素な灰色の建物である。

一応、発電所と水道局を隣接するように建てて、電気と水道を通す。

ファミレスの時も思ったが、ガス関係の建物はないのに、ガスは使える。

オール電化なのかもしれない。

最低限、屋根を。

可能なら柔らかいベッドを。

贅沢を言えばシャワーやお風呂を。

そんな願いをこめて自動ドアを抜け、中に入った僕とレヴィアとマナフを待ち受けていたのは。

「いらつしやいませお客様ー！ 受付担当のサイクロプスです
「ご宿泊ですか？ それとも休憩ですか？ あ、お荷物そちらに置いておいてくださいね」。保管しておきまーす」

……回れ右して帰りそうになった。

内部は、普通にホテルのフロントめいた空間である。

まずは毛足の長い絨毯が僕らを出迎える。

左手側には受付があつて、奥にはエレベーターホールが見えた。

そして、受付にはサイクロプス　細身で背が高く、やけに巨乳な、片目を髪で隠した女の子が、明らかにサイズの小さい、胸と肩口の出ている超ミニの浴衣で出迎えてくれたのであった。

……入口の照明がムーディなこともあつて、雰囲気は宿泊施設休憩施設というより、ご休憩施設とか違法マッサージ店とかいう感じなのは口にしないでおう。

色々な問題を棚上げしておく。

そして、もつともまっとうで、答えが返ってきそうな質問だけを、サイクロプスに投げかけた。

「あの、さつきまでファミレスの店員やってなかった？」

「あらお客様、よく見たらファミレスでもお会いしましたね。ひよつとしてサイクロプスちゃんの魅力にやられてストーカーとかされてるんですか？　いやーそういう愛もナシとは言いませんけどちょっと重いっていうか」

「いや、そんなことは断じてしてないけど……」

「んー、まあ、アルバイト掛け持ちとかそこまで珍しいことでもありませんし？　健気で可憐なサイクロプスちゃんはきつと、たくさんいる弟妹とかを養うため、バイト戦士でもしてるんですよたぶん」

……ここに至るまでの詳しい経緯はフワフワしているが、働く意思だけはゆるぎないらしい。

ならばこちらも深くは突っ込まずに利用させてもらおうとしよう。

「えーと、宿泊……あ、従業員は足りてる？」

「足りてますよー。受付とご案内担当のサイクロプスちゃんに、ベツドメイク、清掃担当のウォードッグちゃん。あと、クレーム処理担当のウォードッグちゃんです」

どっちがどっちだ。

というか、クレーム処理担当って……僕ら以外に利用する者がいない現状を思えば、クレーム入れるのは僕らだけだよ……

従業員は雇用過多気味のようだった。

「……とにかく、宿泊で」

「はい。ご利用ありがとうございます。お部屋はみなさんご一緒で？」

「三部屋……ちなみに料金は？」

「いやですねー、サイクロプスちゃんとお客様の仲じゃないですか。養ってあげますよ。そのためのバイト戦士ですし」

「僕はお前の弟だったのか!？」

「まあ冗談はこのぐらいにして、だって料金表に料金書いてないんですもん。サイクロプスちゃんに値段を決める権利はないっていうかー」

またか。

ファミレスに続いて再びこの仕様である。

たぶん、都市経営系ゲームで店を利用するための金額とか細かいところが設定できないという仕様が適用されているんだろうという予想がつかないでもないが……

助かるからいいんだけどさ。

サイクロプスは笑顔で続ける。

「あ、おすすめはこの『ロイヤルスイート風』ですね。最後に『風』をつけることでロイヤルスイートと呼べる水準のサービスを提供できなかつた時のために言い訳できるようにしてあるあたり、最高に人間くさくて素敵じゃありません？ まあ、それでもクレームあつたらクレーム担当に言つてくださいねー」

今は雨風をしのげればいいぐらいの気分だったのだ。
ホテルにタダで泊まれるのにクレームがあるはずがない。

「ではご案内いたします。フロント奥にあるエレベーターから七階、703、702、701号室がお客様のお部屋になります。トイレは廊下に、シャワーはお部屋にございます。鍵はこちらです」

と、言つてカードキーを寄越す。

案内担当とは言うが、業務的には受付から一步も出ないらしい。

僕は受付の案内通り、エレベーターに乗りこむ。

……が、その前に一悶着あつた。

「……なんだこの箱は。檻か？」

「あたし狭いのやだ……怖い……」

レヴィアとマナフは、エレベーターを知らなかつたのである。

特にマナフに至つては、エレベーターに入ることができず体を抱

いて震え出す。

……魔王である彼女は暗闇と閉所が嫌いらしい。封印というのはよほど彼女のトラウマになっているみたいだ。

僕はマナフをどのように説得するかを考える一方で、非常に不謹慎なことも考えていた。

この二人の反応。

これこそファンタジー世界の人だよ。

忘れかけていた世界観を思い出す。

僕は今、ファンタジー世界にいる。

思いを新たにしつつ、僕はマナフを説得するため、エレベーターの『開』ボタンを押しながら口を開いた。

「大丈夫だよ。この箱は、ただの移動装置だから」

「……ほんと？」

怯えるような目だった。

見た目は妖艶な雰囲気的女性だが、その表情は歯医者を怖がる子供のようだ。

庇護欲や父性を刺激される。

僕は我知らず優しい声になりながら、説得を続ける。

「大丈夫だよ。ほら、僕はすでに乗ってるだろ？」

「でも、あたし知ってるもん。そういうのにあたしを詰めこむ時って、だいたい封印する時だもん。知ってるもん」

「もしもここで封印されたら、その時は僕も一緒に封印されることになるんだけどね……」

「……管理人はあたしを置いて逃げないの？」

「逃げないよ。だから、一緒に行こう」

マナフは悩んでいるようだった。

彼女がどのような悪辣な手段で封印されてきたか僕は知らないが、その思考時間は、長い。

まあ、最悪、低い階層の部屋に変えてもらって、階段を利用すればいいか。

そう考え始めたころ。

「……わかった。でも、管理人、一つだけ条件があるわ」

「どんな？」

「手、放さないで。放したら、管理人があたしを置いて逃げたっと思うからね。そしたら絶対許さないからね。絶対だからね」

「わかったわかった。それぐらいなら ほら」

『開』ボタンを離すわけにもいかなかったので、ボタンに触れていない方の手を差し出す。

マナフはおっかなびっくりという様子で僕の手に触れ、握った。

ギュツと 痛いぐらいの力だったけれど、僕はなんでもない顔をして、彼女をゆっくりとエレベーターの中に招き入れる。

マナフを收容することに成功した。

続いて、もう一人に声をかける。

「レヴィアも手をつなぐ？」

「いらんわ！ ……ふん、竜人族は恐れない。そのような箱、一人の力でも入ってみせよう」

「そう？ 助かった。実は、ボタンから手を離せないから、レヴィアまで手をつないでって言い出したらどうしようかと思ったんだ」

「私は自立した大人の女性だから！ どこぞの中身がお子様な魔

王とは違う!」

かくしてエレベーターに三人で入る。

この施設のエレベーターは、かなり狭いものだった。収容人数は六人とのことだが、ここに六人を乗せるのは、もう『詰めこむ』と表現すべき荒技なのではないだろうか。

安っぽいエレベーターだけに、動き出す時に、けっこうな震動をともなった。

そして、浮遊感。

「ななななんだ!?! 浮く!?! 何が起きているのだこの部屋は!?!」

……と、乗りこむ前は強気なことを言っていたレヴィアが、見栄も外聞もなく僕の腰あたりに抱きついてきたのは、彼女らしいフラグ回収能力と言ってしまおうか。

大した事件もなく、七階へ。

僕はカードキーの使い方を簡単に説明し、二人をそれぞれの部屋に入れた。

その後 一人で、部屋に入る。

与えられた部屋は、ベッドと小さな机だけがある、殺風景な空間だった。

どのへんがスイートなのかは、ちょっとわからない。

それとも、窓の外、手を伸ばせば触れられそうな位置に発電所がなければ、スイートの名に恥じないもつといい景色が見えたのだろうか。

僕はみつともなくもベッドダイブした。

考えてみれば、この世界に来てから初めて一人きりになる。色々なことがあった。

ありすぎてもう一週間二週間は余裕でこの世界にいるような気分なのだけれど、実際には今日が二日目の夜だ。

あの二人との旅路は、せわしくも楽しいものである。

でも、基本的にインドア派でソロリストな僕は、こうして一人きの時間が好きだった。

さてどうしようかなと考えていると

ガンガン！

ドアがノックされた音だ。

……そう判断できたのは数秒思考停止したあとで、一瞬、部屋が掘削工事でもされているのかと思ったほどの、それはすさまじい轟音だった。

実際、ノックの主は部屋のドアをぶち破ろうとしたのかもしれない。だが、僕の建てた建造物は、僕が整地する以外では破壊できないのだ。結果、音だけが部屋を揺らしたのだろう。

とにかく尋常ではない。

おそろおそろ、僕はノックに対応する。

「はい……？」

すると、返ってきた声は二つだった。

一つはレヴィアの声。

ややムツとした雰囲気がかげえるのだが、怒っているというよりは、何かを誤魔化そうとしているような、大仰とでも言うべき、微妙な演技くささがあった。

もう一つはマナフの声。

こちらはほとんど涙声である。母親とはぐれて必死に捜しまわる幼子は、たぶんこのような声を出すだろう。

そして、二人の発言は、口ぶりこそ異なるが、同じようなものだった。

「ご主人様、その、部屋に入れないのだが、どういうことだ」

「ちよつと管理人！ 部屋に入れないんだけど！」

……これはアレだ。

僕はたしかに、二人を部屋の中に入れたが

「……そういえば、部屋を出る時はカードキーを持って出るという注意を怠っていた気がする」

僕はため息をついてドアに向かった。

ようやく訪れると思った一人きりの時間は、訪れないらしい。

まあ、それもいい。

別に嫌いな時間というわけでもないのだ。嫌気が差すまではお付き合ひしよう。

二人は部屋に戻れたということをし、まずは追記しておこう。
カードキーを部屋に置き忘れましたと素直にサイクロプスに相談したところ、

「あーよくいるんですよねー。予備のカードキー差し上げますねー」

と、熟練の経験を思わせる素早い対応してくれた。

いやいやお前最近までダンジョンに潜んで冒険者と戦ってただろ
というの、もう突っ込んで仕方がないことだろう。

彼女の知識は完璧にホテル従業員のそれで、対応も完璧とあって
は、あとはテンション高すぎる問題以外に何も責めるところはない
のである。

そうして、一夜を明かした。

同じ部屋で眠る案も、実は結構マジで出されていたのだが、一人
で眠ることができて、結果としてはよかったと思う。

七階廊下で合流する。

時刻や待ち合わせ場所を決めていたわけではなかったが、自然と
三人、同時に部屋を出た。

ドアを開けた瞬間、お互いに顔を見合い、笑ったぐらいのタイミ
ングである。

そのまま僕らはエレベーターに乗って受付を目指す。

マナフは当たり前のように僕の手を握る。

レヴィアは当たり前のように僕の腰に抱きつく。
お前等は遊園地のフリーフォールの安全バーか何かかという発言
が出かかったが、たぶん通じないので何も言わずにおいた。

一階受付でチェックアウト。

レヴィアの荷物を受け取り、外に出る。
整地。

そして、ファミレスを建造した。

「いらっしやいませー。お客様何名様ですか？ お煙草吸われます
？」

サイクロプスに出迎えられて、四人席に着く。

余談だが、サイクロプスの格好はきちんとウェイトレスのものに
なっていた。

いつ着替え、いつ移動し、建物が無い時どのようにしているのか
は、ファミレスの食材の産地なみの謎である。

僕らはモーニングセットを注文する。

料理が運ばれてくるまでの少しの間、話をする時間ができた。
なので、僕は提案というか、報告をする。

「申し訳ないんだけど、今日は歩けそうもない」

昨日、シャワーを浴びた時に自分の足を見て確信したことだ。
足の様子がR-18Gだった。

もちろん、本気で一步も歩けない、というわけではない。
がんばればもちろん、歩けるだろうが 今だって結構痛いのだ。
限界いっぱいまでがんばったって、せいぜい一、二時間で音を上
げる自信がある。

そしておそらく、僕らは六時間以上歩く。
となれば、あとで本気で歩けなくなつてからリタイアするよりも、
先に言っておこうと思つたというわけである。

「ふむ……まあ、神のおわす天上界では、徒歩という手段はあまり
一般的ではないのだろうか」

レヴィアはそのように納得した。

いや、天上界とやらを『元の世界』だとすれば、徒歩は一般的な
移動手段なのだが……

一般的でないのは、距離だ。

この世界の人はとにかく健脚なのである。
レヴィアは難しい顔で続ける。

「……もとより私の旅路だ。無理についてきてもらおうというのが
高望みだった。あまり辛いようであれば、ここから引き返してもら
ってもかまわんが」

気を遣わせてしまう始末である。

……まあ、報告した時点で、この展開は予想できていた。
なので、対応策も考えてある。

「だから、歩かなくてもいいように、ちょっと建築をさせてもらいたい」

対応策と書いて『いつものアレ』と読む。

僕ができることはまさしくそれだけなのだった。

しかし　今回だけは、レヴィアも僕が何をしようとしているか、疑問を差し挟んだ。

「ご主人様のすごさは、私も手放しで認めるところではあるが、しかしたな、建築で移動がどうにかなるものなのか？　食事をしたい、雨風をしのぎたい、そういうものとはまた違うのだぞ」

もつともな疑問だった。

建物を建てた程度で移動手段はどうにもならない。

……が、それはこの世界の人の考えだ。

建てるだけで移動手段を兼ねる建物が、僕の生きていた世界にはある。

「駅を建てる」

駅。

それは、電車に乗りこむための施設だ。

ただし　僕が建築できるものの中に『電車』は存在しない。

だからこそ思うのだ。

「ファミレスで料理が当たり前みたいに出るように。作るためのコマンドがないなら、駅を建てれば電車が付随するのではないかと。」

幸いにも鉄材はあるのだ。

木や石に比べれば潤沢とはいいがたいが、日が暮れるまで電車に乗って、それから整地で回収していけば、どこまでだっていけるだろう。

そして電車の利点は、何より、その速さにある。

各駅停車なみの速度だって、徒歩より何倍も速いだろう。

結果、西の魔王に会うまでの時間が短縮されるはずだ。

「うまくいけば、西の魔王にすぐ会えると思う」

僕はそう補足した。

レヴィアはよくわからないというように首をかしげていたが。

「……まあ、ご主人様のやることに間違いはなかるう。お任せする。私はあなたを信じた。ならば、信じるという意思を貫き通す。なぜなら 竜人族だからな」

任せる、と言ってくれた。

僕はうなずく。

「信頼に応えられるよう、がんばるよ」

確認作業をするだけだけれど。

信じてくれたレヴィアに言葉だけでも報いたくて、そんな安請け合いをした。

彼女は、ふとつぶやく。

「しかし 『すぐ会える』か。旅の終わりに何が待ち受けているのだろう。……私も、覚悟を決めなくてはな」

決意するように拳を握りしめる。

……彼女はついに、彼女のルーツと対面する。

それがよき未来を示してくれることを、僕は願わずにはいられなかった。

さっそくファミレスをつぶして駅を建てる。

駅とは言うが、都会のそれのように商業施設と一体になったものではない。

思わせるのは寂びた田舎の駅だ。

建物に入るとすぐ正面に改札があり、自動改札機のドアを越えないように身を乗り出せば、その先にはたった二車線だけのホームがある。

そして。

ホームには電車があつた……！

「アレが移動手段か？ ……なんとというか、用意してくれたご主人様には申し訳ないが、ずいぶんと鈍重そうな……まあ、丈夫ではありそうだが」

というのが、電車を初めて見たレヴィアの感想であつた。
むべなるかな。

エンジンというものを知らない彼女たちでは、電車の重そうな外觀はそのまま『遅そう』という印象につながるのだろう。

想像もつくまい。あの巨大な鉄のカタマリが時速六十キロ超で走

るなどということ。

実際に乗ってみての感想が楽しみではあるが、乗る前に一つ、クリアしなければならぬ問題があった。

切符だ。

電車というのは切符を買わないと自動改札を通れない仕組みなのである。

もちろん、非接触型ICカードという手段もあるが、僕は現在そのような便利アイテムを持ち合わせていない。

ぐるりと見回し、券売機を発見する。

……だが、当然のように、乗車チケットは売られていなかった。

「……困ったな。切符が売ってないとなると、無賃乗車するしかないのか」

そのようなつぶやきが出た時である。

「お客様、なんかお困りですか」

突如。

すぐそばから、けだるげな声が聞こえてきた。

驚いてそちらを見れば、そこにいたのは犬耳を生やした、小柄な女の子の駅員さんだった。

ウォードッグの元気がない方である。

僕は彼女の姿を見て、二重に驚く。

「サイクロプスじゃないだ！？」

こういう時、最初に声をかけてくるのはサイクロプスの仕事だと思っただが……

ウォードッグはいかにも面倒そうに頭の後ろを搔いて、あくびみたいな声で言う。

「あー、サイクロプスの姉さんは駅舎担当じゃないッス。自分が駅舎での接客対応でー、妹が車内販売担当でー、姉さんが……あー、まー、はい」

絶対途中で面倒になったな……。

まあこちらとしても、あのハイテンションに常時さらされるのは精神力を使うので、こうして最初に出てきたのがウォードッグでよかったという思いもある。

というか、こっちのウォードッグと元気がいい方のウォードッグは姉妹なのか。

サイクロプスの姉さんという呼び名から、三姉妹の可能性もあるのだが……そっちはただの呼称のような気がする。

従業員の人間関係が気になるところだったが、今は他に興味を持つべきことがある。

「えっと、実は券売機で切符が売ってなくて困ってたところなんだけど」

「あーはいはい。どこの駅までの切符をお求めッスか？」

「どこの駅……」

「目的の駅がわからなきゃ切符買いようがないッスよ」

なるほど、そういうことか。

よく考えれば当たり前前の話だ。乗車券というのは駅から駅の間を電車で移動するために買う物であって、つまり最低二つは駅がないと販売できない。

そして、駅は一つだけだ。……先にもう一つ駅を建てておく必要があるようだった。

「わかった、駅は後で建てるよ……ちなみに、一駅分の運賃はいくらぐらいになる？」

「何言ってるんすか。そんなん距離によるでしょ」

なんか正論しか言われてない気がするが、まったくもってその通りである。

運賃は距離や駅数に比例するものであり、駅ができないと決定しようがないのだ。

先に駅を建てておく必要があるようだ。

僕らはウォードッグにいったん別れを告げて、駅の外に出た。そして、線路を建造していく。

整地・建造の範囲は、僕が目視できる距離のようだった。

そしてここは空の上である。遮るものはなく、かなり遠くまで僕の力は使えるだろう。

実際に線路が見える限度いっぱいまで引いたが よかった。それなりに距離は稼げたようだ。

もし建造範囲が狭かったら、『走る電車に乗りながら素早く整地・建造を繰り返す』みたいな作業を強いられかねないところだった。

それはある意味、徒歩より疲れそうなので一安心である。

とりあえず、見える範囲いっぱいまで線路を引き、次の駅を建てた。

駅舎に戻る。

すると、券売機の前には先ほどと同じようにウォードッグがいた。

「いらつしゃいませーッス。券売機はこちらッスよ」

知ってる。

駅を建てたので値段が出ているかと思い、券売機を見た。そこには確かに切符があったが、値段は出ていない。

無賃乗車は最後の手段にしたい僕は、ウォードッグに確認することにした。

「駅は建てたけど、どうにも値段がないみたいなんだ……これはどういうことだろう?」

「さあ? お金入れなくても押して切符が出たら、乗っていいってことじゃないッスか?」

相変わらず商売する気がないようだ。

しょうがないので、お金を入れずにボタンを押してみる。すると、切符は出てきた。

『この駅からそこそこの遠くの駅行き』

……駅名いい加減だな！
という突っ込みは置いておいて、三人分の切符を購入……購入？
する。
まずはレヴィアに渡す。

「……これはアレだな。昨日泊まった施設の、部屋の鍵のようなものか？」

「まあだいたい用途は同じかな」

次にマナフに渡そうとするが
受け取るうとしなかった。

僕は問いかける。

「どうしたの？ これがないと電車に乗れないんだけど……」

「あたし、それ嫌よ。部屋の中に忘れてまた入れなくなりそうなんだもの。管理マネージャー人が持ってて」

どうやら、昨晚ホテルの部屋から閉め出されたことで、キー関係の管理が嫌になったらしい。

しょうがないので、言われた通り僕が管理しておこう。

もっとも、無料なので、無くしたところで取り立てて問題はないだろうけれど。

「じゃあ、電車に乗ろうか。今から改札……その扉を通るけど、僕と同じようにしてね。あ、マナフもいったん持ってて」

というわけで、改札に切符を通し、ホームへ。

途中、自動改札から高速ではき出される切符にびっくりしたりもしたけれど、とりあえず止まっている電車に乗りこむことには成功した。

電車の内部は、普通の、各駅停車系のそれだった。

ボックス席などは存在せず、つり革と、壁に沿うように並んだ座席があるだけだ。

数えてみたが十両編成である。……どうせ僕たちしか乗らないし、二両ぐらいでいいから、もうちょっと鉄材まけてくれないかなと思わなくもない。

僕はガラガラの電車の座席に、並んで座る。

端っこがマナフ、その隣に僕、僕を挟んでマナフの反対側がレヴイアだ。

マナフがはしゃいだような声で言う。

「この椅子気に入ったわ！ あたしの楽屋に置いておいて！」

……この時代、この世界観の人からすれば、何気ない電車のシートですら、未知のふかふか高級椅子のような感触なのだろう。

改めて文明レベルの差異を思い知る。

同時に、つくづく世界観をぶっ壊しているなど自分の行為をやや反省した。

いや、やめないけどね。

などと考えつつ、電車に乗ってしばらくすると。

『お待たせいたしました。本日はRPG電鉄そこそこ遠くの駅行きをご利用いただきありがとうございます』

聞き慣れた声でアナウンスが入る。

やや鼻にかけたような声になっているが、間違いない。この声の主はサイクロプスだ。

今回はどうやら運転士役らしい。

……一抹の不安がよぎらないでもないが、業務には真面目なので、信用することにする。

『この電車はそこそこ遠くの駅まで直通になります。各駅停車をご利用のお客様は、お間違えのないようお願いいたします』

車掌さんのロールプレイをしているからだろう、普段の彼女より落ち着いた感じがした。

まあ、電車は世界にこれ一つで、駅もことそこそこ遠くの駅しかないのです、路線や電車を間違えることはありえないのだけれど。

『なお、車内で不審な人物、または荷物を見かけた際は、お近くの車掌または駅員までお知らせくださいますようお願いいたします』

……不審物と言えば、ぶっちぎりでレヴィアの持つてる大剣なの

だけれど。

まあファンタジー的には普通だろうということ、スルーする。

『それでは発車いたします。ご乗車のお客様は、座席に座っていた
だくか、お近くのつり革、手すりにおつかまりください』

プシューッ、という蒸気を噴き出すような例の音を立てて、扉が閉
まる。

そしてゆっくりと、電車は動き出した。

レヴィアが反射的に僕につかまる。

「う、動いたぞ!？」

「……いや、だから、移動手段なんだってば」

「わ、わかっている! わかっているが、まさかこんな鉄の箱が
動くなどと……! どんどん速くなるではないか!? 大丈夫なのか!
?」

運転士がサイクロプスである。

そして、ここは空の上だ。

……即答できない。加速すぎて地上にダイブという未来も、あ
りえないでもないからだ。

早まったかなと少しだけ後悔する。

けれど

マナフが、子供がよくそつするように、座席に膝をついて窓の外
を見ていた。

「ねえ管理人! 最高の舞台ね、ここ! あたしここで公演したい

わ！」

そう言って示す先を、僕も首をひねってながめる。

一面の青空。

遮るものがない、自然豊かな天空の景色がそこにあった。

……まあ、早まったかなという感想は、撤回しきることはできないけれど。

空を見ながら電車の旅というのは、なかなかいいものだと思います。

電車が進む。

こうして僕らは時速六十キロ以上の速さで空に敷いたレールを使い、西の魔王の居場所へ向かっていく。

このぶんならすぐに着くことだろう。

答えが出る。

結果が出る。

レヴィアのルーツを探る旅は、こうして加速し近く、終わりを迎えることになりそうだ。

「この旅が終わったら、私も冒険者を引退し、普通の生活を送ってみてもいいかもしれないな」

電車旅は三日目にさしかかったところだった。

今は、ようやく、遠くの方にぼんやりと大きい山が見えてきたかなというところだった。

改めて恐ろしい距離である。

これ、徒歩だったらどのぐらいの時間がかかるんだ……？

僕は何個目かの駅を建造したり整地したりしていた。

そしてたぶん通算で七個目か八個目の駅を建造したタイミングで、唐突にレヴィアがそんなことを述べた。

あいかわらずフラグを建てていくスタイルのようだ。

僕は、電車の窓から沈む夕日を見つつ、聞き返す。

「突然どうしたの？」

「ひよつとしたら、私が今まで調べてきた『竜人族』と実際の『竜人族』は、まったく違うものかもしれないと思ってな。マナフの言うことが正しいければ生きた竜人族と会えるわけだろう？ ……色々事態を想定して覚悟を決めておかねばと思ったただけだ」

マナフが非難がましく『正しいわよお』と言う。

まあ、それは、正しいだろう　ここまで来たのだから、正しくなくては困る。

ただし、マナフの情報を信用する理由が『魔王情報網』という、言ってしまうえば『他に手がかりがないからとりあえず信じた』程度のものであることもまた事実なのだ。

特にレヴィアは自分のルーツを探し、同じ種族に会いたいという願いをもって旅をしていた。

行ってみて会えなかった時に落胆しないためにも『もしマナフの言うことが正しければ』と予防線を張っておきたくなる気持ちはわかる。

ガタンゴトン、と電車が進んでいく。

サイクロプスが運転士の訓練を積んでいるとは思えなかったが、走ってみれば、彼女の運転技術は熟練のそれであった。

安心して窓の外を見ていることができる。

夕日も沈みつつあるころ

眼下に大きな川が見えた。

流れの激しい濁流である。ひよっとしたらアレが冒険する前に言っていた難所の一つ、何とか川だったのかもしれない。

……なるほど。『一度この川を見に来たことがある』とレヴィアは言っていた。

だから、西の魔王の住まう土地が近くなったのだとわかり、あんな話を切り出したのだろう。

電車は進む。

問題なく川を抜けて、いよいよ山にさしかかろうとしていた。

だが、このまますぐにはいかない。

すぐに夜だ。

新しい駅を追加するか、一度宿泊して明日を待つか、僕らは決める必要があるだろう。

『次はニムシユ山前、ニムシユ山前。終点です』

アナウンスが流れ、電車が減速を始める。

僕は二人に問いかけた。

「どうする？ このまま行く？ それとも、一度眠る？」

二人に順番に視線を投げかければ

マナフが肩をすくめた。

「あたしはどっちでもいいわよ。夜の公演も幻想的でもいいものじゃない？」

レヴィアは悩んでいる。

しばらく沈黙した後。

「……夜の山は危険だというのが、普通の考えだ。私が一人ならば、暗い山に登ろうとは思わないのだがな」

「やめておく？」

「いや。ご主人様がいいならば、行ってほしい。……ようやく、私の探していた答えがわかるかもしれないのだ。竜人族とは何か。本当に優れたものなのか。本当に特異なものなのか。私を産んだはず

の親は、死んでいるのか生きているのか　生きているなら、どこに行ったのか。答えがほしい。五年前から始めた旅の答えが……ここまで来てそれを確かめないことには、ゆっくり眠れそうもない」

僕はうなずき。

そして、立ち上がる。

運転席の窓をノックして、サイクロプスを呼ぶ。

彼女はまともな運転士服を着ている

……かと思いきや、よく見れば下は超ミニスカートだし、上着はシャツがなく、ジャケットのようなものを素肌に羽織っているだけであった。

露出しないでいられないのか。

……ともあれ、サイクロプスは僕のノックに答え、こちらを向いた。

運転中に思い切りよそ見をしているのだが、自動運転機能が働いていると思いたい。

「はいはい、なんでしょうかお客様？　不審物でも見つげちゃいました？」

彼女の調子は、やはり軽かった。

お前の服装がこの電車で一番の不審だという発言を飲みこみつつ、

「もう少し線路を拡張しようと思うんだけど、まだいけそう？」

もう夜だし。

僕は座っていればいいが、実際に運転しているサイクロプスの疲労はたまっていることだろうという心配をしたのだ。

しかし彼女は明るい調子で言う。

「何言ってるんですかお客様。お客様とサイクロプスちゃんの仲でしょ？」

地獄までだってお付き合いますよ」

「そのセリフはすげえ心強くて格好いいんだけど、なんだろう、僕とお前はそこまでの仲だったかなと考えさせられてしまうな……」

「水くさいですよお客様。だってサイクロプスちゃんはお客様のメインヒロインじゃないですか」

「僕の人生にヒロインという存在がいたとしても、お前だけは嫌だという正直なところを話したらやっぱり傷ついたりするのだろうか

……」

「冗談はさておき、駅さえあつたらどこまでも運転しますよ。サイクロプスちゃんの体力は一週間休み無しでも尽きたりしません。ぶっちゃけ自動運転でやることほとんどないです」

やることなくとも一週間休み無しで稼働可能というのは、すさまじい。

彼女のハイテンションの前には睡魔ですら裸足で逃げ出すというのか。

まあ、できると言うならやってもらおう。無理してる風にも見えないし。

「じゃあ、駅を追加するから、よろしく」

言いつつ、電車の窓から外に意識を集中させる。

駅の追加はすでに何度か経験していた。

走る車内から線路と駅を建造していくのにも慣れたものである。

走り追えた線路の整地は　もう、いらないだろう。
目的地はすぐそこだ。

線路は帰りに再利用しつつ回収すればいい。
それに、残しておけば、いざという時の逃げ道にもできるだろう。

『えー、駅が増築されましてー、次はニムシユ山前へ、ニムシユ山前へ。お次が終点、西の魔王住居になります』

……着くんだ、ついに。

駅名を読み上げられ、僕の中にもようやく、覚悟みたいなものが芽生え始めた。

電車は、ニムシユ山の山頂を目指して高度を上げていく。
僕は座席に戻って、外を見る。

景色はすでに雲海。

夜も昼もなく、ほとばしる雷だけが周囲を照らす。
しばらく分厚い雲の層を漂い

そして。

僕らはずいに、目指す場所へとたどり着いた。

21話

それは黒曜石の塔だった。

光沢のある黒だけで構成された建物である。

高さはそうない。せいぜい七階建てのビルぐらいなものであろう

だが、この世界の人にとっては充分に高層建築と呼べる代物であることは、僕にもわかった。

そういった塔が六つ。

そして　ひときわ高く、太い塔が、中心に一つ。

さながら原子核を囲む電子のように。

あるいは太陽を中心とした太陽系のように。

合計七つの黒曜石の塔が、火山の火口には建っていた。

「舞台を見るにもマナーがあるわよね」

駅から出て、それらの塔を見上げながらマナフが言う。

彼女は勝手知ったる自分の庭のような気軽さで塔の一つに近付き、

「魔王に会うんだったら、それはもう、踏むべき手順というのが当たり前のようにあるわ。……たぶん今回の主演は中心の塔にいるんでしょ。楽屋挨拶だったら主演からするべきだけれど、今回あたしオーディエンスたちは観客だからね。大人しく演目の順番通り見ていきましょ」

ようするに、中央の塔に目指す『西の魔王』はいるが、攻略手順としては周囲にある六つの塔を順番にクリアしていくべきだということらしい。

なるほど、よく見るRPGだ。

きっと六つの塔にはそれぞれボス的な存在がいて、そいつらを倒すことで中央の塔への道が開けたり、バリアが開けたりするのだらう。

非常にRPG的なイベントである。

ともあれ目指しているラスボスがいるのは中央の塔ということになる。

ならば安心だ。

僕は提案する。

「じゃあ、平らに均していこうか」

目的の人物が中央の塔にいるのが確定ならば

他の塔を整地したところでその人を巻きこむ心配はないだろう。

いや、良かった。

建物にくつつくようにしている人を僕の整地で巻きこむ心配がないというのは、焼け落ちた街の城壁を整地した時にわかっていただけ

れど
整地した時、建物の内部に人がいたらどうなるかは、未知数なのだ。

人がいないなら安心して平らにできるな！

という僕の提案に、もう、レヴィアもマナフも、驚いたり反論したりはなかった。

僕がやること、僕の発想に慣れてしまった様子だ。

彼女たちはこの世界の住民として大事なものを、僕との旅で失ってしまったようだった。

悲しい。

ともあれ遠慮無く整地。

芸術作品としても無類の完成度を誇っていた黒曜石の塔が、次々平らな更地と化していく。

消える時は一瞬である。

あれほど美しかった建造物が、跡形も残さず消えていくシーンをみると、諸行無常というものを感じざるを得ない。

などと消している本人とは思えないような他人事な感想を抱きつつ、塔を均し終える。

取得したのは、石、土、木、それから肉がけっこう大量に。

……うん、どうやら大量の魔獣が塔の中には控えていたようである。まともにはやったらかなりの時間がかかったことだろう。整地してよかった。

僕は中央の　　もはや火口に一本きりになってしまった塔へと近づく。

さすがにこの塔はまともには攻略しなければなるまい。

最悪、電車による体当たりで破壊するという手段も考えたのだが

……きつと無理だろう。

耐久度の方に問題はないだろうが、建物を突き刺すようにはレールを設置できないのだ。

そしてレールのない場所を電車は走れない。乗り物として使う分には非常に安全でいいことなのだけれど、ハリウッドスタイルな使用ができないと思えば少々の不便さも感じる。

入口を探して塔をぐるりと回る。

すると、鍾乳洞の入口のような、入口として人工的に用意したというより、長い年月を経て自然物がそのように変化したという感じの穴を見つけた。

他に内部へ侵入できそうな場所もない。

ということは、その穴が、この塔の入口なのだろう。

入るべきか否か。

いや、入るべきはそうなのだろうけれど、その前に準備すべきことはなかっただろうか？

考えつつ穴を見つめていると

突如。

黄金の輝きが、穴より漏れ出した。

あまりのまばゆさに一瞬、目がくらむ。

次第に慣れた目で光の中心を見れば、その正体はいびつなヒトガ

夕だった。

長い黄金の髪。

チャイナドレスのような服装。

体つきは女性のもので、シルエットは豊満な曲線を描いていた。胸のあたりはみずみずしい果実を思わせる。それもリンゴやミカンではない。スイカやメロンだ。

黄金の瞳を細め笑う。

その笑顔から感じるのは母性だった。

年齢は、わからない。

十代に見えるみずみずしさと、四十代と言われても納得してしま
いそうな、成熟した濃厚な色香が女性からは感じられる。

そして。

その女性には、こめかみのあたりから、左右に一本ずつ、黄金の
角が生えていた。

腰のつけ根あたりから、黄金の、爬虫類じみた太い尻尾が生えて
いた。

極めつけに 肩甲骨のあたりから、金色に輝く、コウモリめい
た翼が、生えていた。

その女性は、黄金の竜だった。

長く鋭い爪の生えた手には、長い槍を持っている。

……驚いたことに、そのせいぜい二メートルほどの槍は、僕の基
準では『建造物』と判断されるらしい。

他の、たとえばレヴィアの武器なんかでは起きなかった現象だ。

例のアイコンが綺麗にロックオンされている。
おそらくよほどの重量や密度を誇るのだ。

僕は、一様に動けなかった。

当然だ。その女性は言い訳のしようもなく　翼がある、という
差異はあるものの、その特徴はレヴィアと同じ竜人族のそれなのだ。
間違いなく目指す人物だ。

それがいきなり出てきたもので、僕も、レヴィアも、まばたきす
ら忘れて女性を注視していた。

女性は、憂いをたたえた表情を浮かべ、僕を見た。

「この惨状、そなたの仕業であるか」

惨状。

最初、何について言われているかわからなかった。

もちろんすぐにわかる。周囲にあった六つの塔がのきなみ整地さ
れていることについてだ。

当然僕の仕業だ。

だから僕は、うなずいた。

女性は悲しげに笑う。

「……ふむ。さだめなのであろうな。人族と我らの敵対は……それ
とも、呪いか。残念じゃな、人間。我はそなたを許さぬ理由ができ
てしまった。では　開戦といこうか」

ため息交じりにそう言って。

直後。

目にもとまらぬ速度で、槍が僕の胸を貫いた。

……ああ、うん、まあ、そうだよな。

自分の土地を無断で平らに均されたら、そりゃあ、怒る。
竜の逆鱗に触れた　ということらしい。

胸を貫かれながら、僕は彼女にどこか同情的だった。
のんびりしている。
危機感が足りない。
軽い気持ちでした。

色々なことを考えながら膝をつく。
そして、僕の意識は次第に暗く

22話

「……………つて、死んでないな？」

確かに僕は、この胸に槍の一撃を受けた。

それは絶命免れぬ衝撃を伴い、実際に心臓が綺麗に破裂したかと思っただけだった。

なのに、生きている。

どうということだと混乱していると

ちゃりん、という軽い音を立てて、足元に何か落ちた。

目の前には槍を構えた竜人族の女性　だというのに、僕はのんきに足元に落ちた何かを拾い上げた。

……………指輪だ。

なんで指輪……………あ、そうだ、コレ、領主のおねーさんにもらったやつだ。

どうやら槍の穂先がいい感じに指輪にはまって、僕の胸をチクリと刺す程度で止まったらしい。

僕は愕然とした。

領主のおねーさん、すごい丁寧に僕の死亡フラグを積み上げるなと思ってだったが、その実、積み上げていたのは生存フラグだったのだ……………！

ナイスである。

僕の領主のおねーさんに対する好感度が上昇した。

でも結婚はもう少し考えさせてください。

「ご主人様！」

レヴィアの声で現実に戻される。

彼女は遅ればせながら　まあ、探していた人物が目の前に来たので無理もないことだ　僕の窮状をどうにかするべく、剣を抜いて黄金の竜……めいた女性の前に立ちふさがった。

僕は声をかける。

「あー、大丈夫、大丈夫。ちょっとチクツとしたけど無事だから」

ちなみに指輪も無事である。

かなりの衝撃がかかったようだが、どんな素材できているのだろうか。

祖母の代から受け継がれているという話だったので、世界観を加味すればなんらかのマジックアイテムだという解釈もできるが……
詳しい話は今度、帰るまでに忘れなかったら領主のおねーさんに聞こう。

僕は黄金の竜を見る。

彼女は、不思議そうに首をかしげた。

「ふむ、よほどの加護があると見えるな。我が槍は神話のドラゴンの鱗から削りだした一挺。この大きさを山一つぶんの重量と城壁並みの強度を誇ると言われている代物なのじゃが」

「ああ、そのせいかな」

山一つ分の重量。
城壁並みの強度。

……そして、削りだしたということは、人の手による代物ということだ。

つまり建造物と見なされる条件を軒並みそろえているということだろう。

だから、例の青白い光を放つ立方体が、槍を見るたびロックオンされ、『整地する？ ねえ整地するの？』とチカチカと光っているのだろう。

竜人族の女性は反対側に首をかしげた。

「……ふうむ。まあ、よい。同胞の仇、引き下がるわけにもいかん……竜人族は同胞を大事にするものじゃ。一人に対し二度撃つことになるとは思わなんだが、今一度、我が槍の威力を知れ」

引き絞るように、槍を構えた。

姿勢はビリヤードを思わせるが、重量感のケタがキューなどとは比べものにならない。

……戦闘方面に疎い僕でもわかる。

次にあの槍が放たれれば、たぶん衝撃だけで三人まとめてぶっ飛ばされるだろう。

槍とってはならない。アレはそういうカタチをしたミサイルと思った方がいい。

個人が携行し、個人に向けるにはあまりにも過ぎた武力である。気になるワードもあったことだし。

まずはあの槍をどうにかしなければ、話し合いにもならない。

「もう一度突かれちゃたまらないし、ちょっとそれ、平らにするよ」

整地する。

ジュツ、という音を立てて、いつものように、一瞬で槍は消え去った。

……ただし、取得素材がおかしい。

『バツザンガイセイ を取得しました』と視界の右下には表示された。

あの槍は鉄でも石でも木でもなく、『バツザンガイセイ』というファンタジーなマテリアルとしか分類できないということだろうか。伝説の武器っぽいし、ちょっともつたいないことをしたかなと思わなくもない。

建造物の素材にもできなさそうだし……

黄金の竜 竜人族は。

槍が消え去った自分の手元を驚いたように見つめていた。

「……面妖な。何をした？」

「ちょっと整地を……あの、ところでさっき、気になることを言われた気がするんだけど、同胞の仇っていうのは？ 僕を誰かと勘違いしてない？ あなたの同胞をどうにかした憶えはないんだけど……」

「勘違いはしておらん。そなたが周囲の塔を攻略し、というか、跡形もなく消滅させ我にたどり着いたことで、そなたが我が同胞に害を成したことは明白だ」

周囲の塔。

そして、整地した時に表示された『肉 を取得しました』のメツセージ。

……まさかと思いたいが、聞いてみなければならぬだろう。

意を決してたずねる。

「あの、つかぬことをお聞きしますけど、もしかして、この塔を囲んでた六つの塔にいたのって」

「そうだ。……姿は変わり果て、言葉や知恵を失い、魔獣となっていたが 周囲の塔を守っていたのは、我が同胞、竜人族だ」

ため息交じりに言う。

そして、自嘲するように口元をゆがめて、レヴィアを見る。

「ようこそ竜人族の里へ。おかえり、我が娘よ。 いずれ化け物となる母にとどめを刺しに、よくぞ帰った」

23話

竜人族。

世界にレヴィアー人しかいないと思われていた種族である。

この種族には多くの謎がある。
まずは、その特性だ。

性格、性質、資質、才能。

世界には様々な人種があり、それら種族にはそれぞれ得意分野がある。

たとえばエルフは木登りや弓が得意で、ドワーフは穴掘りや鍛冶が得意など、そういうことだ。

竜人族は戦いが得意。

公明正大で、嘘をつかず、約束を守る。

そういった種族であることは、旅の中でレヴィアも知っていたことだった。

生きにくそうではあるが、強い種族。

それはわかったのだが　じゃあ、次の謎は、なぜ、今、世界にレヴィアー人しかいなかったのかということだった。

その理由を、黄金の竜人族の女性は語る。

「我らは呪いをかけられている」

静かな声だった。

落ち着いているというよりは、疲れ切っているという印象だった。事実、女性の顔には諦念がにじんでいた。

「始祖ドラゴンが神に背いたためにかげられた呪いだそうだが詳しくは、伝承でしか知らぬ。なんでもその呪いのせいで、歳をとるにつれて我らは言語や知恵を失い魔獣と化するのだとか。まあこれで事実が伴わなければただの怖いおとぎ話で済むのだが…… 事実、竜人族はある程度の年齢になると魔獣化が始まる」

魔獣。

その存在を僕は、覚えている。

理性を無くした害獣。

一目散に襲ってきたそいつの迫力と、その時に感じた恐怖は、今でもありありと思い出せた。

「ゆえに、我らは人から離れた。我らは人族を守りたい。いつしか凶悪な魔獣となる運命を持つ我らが人の隣にはおれぬからな。……そうして我らはこの山に居を構えた。人里離れ、難攻不落の要害にて人里からの行き来が阻まれた、この山にな」

彼女は笑う。

笑うという表情のはずなのに、ポジティブな印象は欠片もない。やはりその笑みには、無力感が漂っていた。

「あきらめてはおらん。……いや、おらんかった、と言おうか。我

は魔獣化するまではと思い、人里に降り、どうにか呪いを解く手段を探した。……が、結果は芳しくない。呪いを解く手段は見つからず、我は山に帰ることとなった。旅の途中で出会った男との子供を残してな」

視線がレヴィアに向く。

……その子供というのが、レヴィアのことなのだろう。

「その子供が、いつか、己の正体である竜人族というものについて調べるであろうことは、予想していた。そして竜人族の屈強さならば、この山にたどり着けるであろうことも、わかっていた。だからこそ地上に残し、いつしかこの母を殺してほしかったのじゃが予想より十年は早かったようじゃな。まだまだ我の中に人の意思や理性が残っているこの時期に来るとは思いもせんかった」

早かった。

……うん、まあ、その。それはきつと僕のせいだ。

最初にマナフが言っていた通りの、正規の手段で要害を越えてここに来ようと思ったら、ここまで早い到着はなかっただろう。

予想より十年は早かった、と黄金の竜人族は言う。

つまり正規手段や街からここまでの移動距離は、そのぐらいの年月を懸けて。冒険者の生涯の目標として踏破されるべき、難攻不落の天然要塞群のはずだったのだ。

加えて言うなら、マナフというアドバイザーを獲得できてしまったのも、僕のせいである。

その的確なアドバイスのせいで、西の土地に竜人族の魔王がいたり、そこに至るためのルートなんかを正確にわかってしまったのも、レヴィアの旅路が十年早まった理由の大きな要因である。

が、こちらは『せい』ではなく『手柄』と呼ぶことを許してもらいたい。

だって僕がいなければマナフかレヴィア、どちらかが死ぬことになっただけは、低くなかったらと思うのだ。
彼女たちが死ななくてよかった。

これが僕の素直な感想だ。

「半ば賭けではあったが……こうしてお前は母を殺しに来た。私の賭けは当たったということじゃな。成功するのは最初からわかっておったぞ。我に手違いとかありえんし。竜人族じゃからな」

……このへんは親子だなあと感じる。

竜人族にまつわる伝承は、かなり正確性が高いものだったらしい。
あるいは。

魔獣化の呪いを解く方法を探す旅の途中で、わざと発見しやすいように、黄金の竜人族が残したから、正確性が高かったなどという裏設定もあつたりするのかもしれないが。

「こうして人里離れ、ダンジョンなど構えて己を封印しても、魔獣となった我らは、定期的に山を抜け、人里に降りる。それを人は魔王と呼び習わし、対抗しえない災厄として記録していた」

西の魔王の正体。

それは魔獣化し、理性をなくした竜人族の成れの果てなのだとい
う。

「もちろん自決というのも、代々、我らは考えなくもなかったがな。それは我らを呪った神への敗北であるからな。竜人族は敗北しない。我が祖父も、呪いを解くため旅をした。我が父も、同じく旅をした。そして我も、旅をした」

笑う。

笑う、けれど。

なぜだろう、泣きそうな顔に見えた。

「親から子に、子から親に。……いつか来るであろう、神へ勝利するその時を夢見て、魔獣に成り下がり、化け物に成り下がり、いつまでもいつまでも生き続けている」

吐き捨てるように言う。

生きていること、それ事態が望まぬ現状だと言うように。

「だがな、その生にどのような価値があるのか。我らを呪った神に負けるのは癪だ。そして祖先からの希望を託されたこの身だ。勝手に彼らの希望を絶つことはできない。ならば 誰に負ければ矜持が保たれるのか。誰なら我を殺してもいいのか」

うつむけられていた視線が、こちらを向く。

レヴィアを、幽鬼のような視線で貫く。

「娘よ」

怨念めいた声。

疲れて、かすれて、けれどすさまじい執念を込めた声音で、黄金の竜人族は家族へ呼びかける。

「我が化け物になる前に会えてよかったぞ。……もつとも、そちらは我を母とは思っておらんだろうがな。我がお前を捨てたのは、事実なわけであるし」

寂しげな声だった。

……捨てたくて捨てたわけではないのだろうと、その顔だけわかる。

だが、詳しい弁明はなかった。

そんなものはするつもりもないとばかりに、彼女は鋭い爪を構え、牙を見せる。

「それも良い。いや、それが良い。さあ、恨み辛みをぶつけてくれ。憎き女を殺してくれ。世界を救わなくてもいい。人を守らなくてもいい。ただの私怨で我を殺せ。約束された呪われし結末を、理性を無くし化け物になるしかない我が未来を、お前の手で変えてくれ！」

敵意が研ぎ澄まされる。

闘士が肥大化する。

槍を整地されても彼女の戦意はまったく萎えないらしい。それどころか、先ほどまでよりも楽しげでさえあった。

彼女の処遇をどうするのか？

それは、僕が勝手に決めるべきものではないだろう。

ここはレヴィアがその人生を費やした旅の終着駅だ。

決定権は彼女にある。

マナフのように言うのであれば、僕らは今この時、ただの観客にすぎない。主演はレヴィアであり、その母である黄金の竜人族だ。ならば、主演に問いかける。

「レヴィアはどうしたい？」

僕には。

彼女の人生を背負う自信はなかった。

人生を懸けた旅の結末を決める権利はなかった。

彼女の追い求めた答えを勝手に決める義務はなかったし。

彼女が納得できる結末まで誘導する力もなかった。

だから、彼女に答えを求める。

それが辛く難しいことであるのはわかっているのに。

それが辛く難しいことであるのがわかっているから、彼女に答えを出させる。

レヴィアは。

「……無理だ」

弱々しくささやいた。

泣きそうな顔で、たぶん年齢相応の、子供みtainな顔で、僕を見る。

「無理、無理であろう、こんなの！ いきなりそう言われても、私には決められない！ ルーツを探して、仲間を探して、ようやくたどりついたのに……ようやく会えたのに！ 殺すか、化け物になるのを待つかだなんて、そんなの……そんなの嫌だ！」

かんしゃくを起こしたように、彼女は叫ぶ。
当たり前だ。

ようやく出会えて。

それなのに、再開した家族は、殺されることだけが望みだという。

娘よ。

お前の旅路に明るい結末など、最初から用意されていなかった。

残酷な宣告だった。

身勝手な決定だった。

そして どうしようもない、現実だった。

嘆くのも叫ぶのも無理はない。

取り乱したってだだをこねたって、誰も責められない。

……だが、彼女は忘れてしまいか。

僕がなぜ旅に同行しようと思ったのかを。

ストレスを避けるため。

もちろんそれが目的だけけど じゃあなぜ、僕が同行すれば彼

女が死んだ際にかかるストレスを防止できるのだと思ったのかを、
考えてほしい。

僕は問う。

「つまり、助けたいってことなのかな？ 自分を捨てた母親だけど」

「そんなのは当たり前であろうが！ やつと見つけた同胞で、よう

やく見つけたお母さんなのに、殺すなんて、嫌だ！」

「じゃあ、そうしようか」

「どうやって!？」

……これもなんとというか、間の抜けた問いかけと言わざるを得ないだろう。

どうやって？

まさか僕が、RPGみたいな手段を思いつくとも？

僕にできることは一つしかない。

そして、その一つでなんでもやってきた。

だからいつものように、僕は言う。

「魔獣化する母親を殺さないために、殺し合わないためにすることなんて、一個だけだ。　　建築をしよう」

僕にはそれしかなく。

それだけに、RPGでは助けられない誰かを助けられるのだから。

24話

思い出してほしい。

僕はこの世界に来た一番最初に、ある魔獣を整地した。

サイクロプスと呼ばれていたソレは、僕の整地により、この世から塵も残さず消え去った。

はず、なのに。

ファミレスを建てたらひょっこり出てきたのである……！

その後、ウオードッグなる魔獣を整地した。

もっとも、整地した魔獣がそういった名称であったことを知ったのは、整地したあとのことだ。

彼女たちが名乗ったから。

だから僕は、整地した魔獣がウオードッグなる名称であることを知ることができたのである。

ウオードッグとウオードッグ、それにサイクロプス。

彼女たちの性格はみな、違うものだった。

どうにも僕が整地することによって判子を押しようにパーソナリティが確定されるということではないらしい。

では、彼女たちの性格を分けたものは何か？

それはきつと 彼女たちの、魔獣だったころから変わらない、もとのパーソナリティがあんなだったんじゃないかという仮説を

立てたのだ。

そして現在。

僕は、六つの黒曜石の塔を整地した時に、かなりの数の肉を取得した。

つまり魔獣を整地したということだ。

レヴィアの母の話から類推するに、もとは竜人族であり、言語を操り知恵や理性もあつたが、呪いにより魔獣となつてしまった元竜人族たちを。

もしも。

サイクロプスたちのように、僕が建物を建てれば、彼らが擬人化されて甦るとすれば？

もちろん正規の呪いではないことはわかっている。

だが、魔獣化したあとでも、魔獣でない状態で、元のパーソナリティを維持して復活できたのであれば、それはもう、結果的に呪いを解くのと変わらないんじゃないか？

だから僕は、提案する。

「都市を建てよう」

念願の。

ここに来て、ようやく本筋である、都市開発である。

建てる場所は、火口よりさらに上　上空である。
つまり、空中都市だ。

道路を引く。

線路を引く。

物件を建てる。

住居を建てる。

もちろん、街の中心部に市庁舎を建てることも、忘れない。

獨創性も何もない、とりあえず整備しましたという感じの、初心者みtainな都市。

だけれど

建てたファミレスの中に。

あるいはホテルの中に。

もしくは消防署の中に。

病院の中に。警察署の中に。発電所の中に水道局の中に工場の中に会社の中にコンビニの中に住居の中に通行人の中に駐輪場の中に駐車場の中に駅の中に

その他様々な建物の中に、あらゆる人たちが息づいているのを、僕たちは確認した。

「……夢のようだ」

黄金の竜人族は、ほうけた顔でつぶやいた。

彼女は街をうろつき、何度も何度も確認をし、挨拶を交わしている。

会話をして。

彼らを引き連れて。

僕とマナフ、レヴィアのいる場所に 駅のホームに戻ってきた。

……なんか既視感のある光景だ。

たしかマナフに燃やされた街の人を助けた時も、こんな感じで複数人に囲まれて、遠巻きに見られていた気がする。

もう一度、彼女は僕に向けて言った。

「こんなことが、ありうるのか。魔獣となった我らが、再び、このように、息づいて……」

声が詰まる。

言葉にならない様子だった。

彼女はしばらく手で顔を覆った。

泣いているのか、笑っているのか あるいは泣きながら笑っているのか。

それはわからないが。

顔を覆う手をどかした時、彼女の瞳はうつすらと濡れていた。

「神の呪いを、こんな、冗談みたいな手段でどうにかしてしまおうとは いや、恐れ入った。見事だ。礼を言いたい いや、何か、礼を差し上げたい」

「……どういたしまして。僕は僕にできることをしただけです。お気になさらず」

よもやこの世界を創った……かどうかはこの世界の宗教観を知らないのも何とも言えないが、その神様だって、まさかこんな手段で呪いを解決されるとは想像すらしてなかっただろう。

何せ、僕とその神様ではルールが違うのだ。

呪いを解いたというよりは、呪いを維持しつつ解決したという、お被いっていかお払いつて感じの力尽くの仕事である。

ともあれ喜んでもらえてよかった。

……が、黄金の竜人族は申し訳なさそうに一言添える。

「ここまでしてもらっておいて、無礼な物言いになってしまふのじやが」

「かまいませんけど、なんでしょうが」

「……全員女になっているのはどうということなんじゃろ」

えっ。

観衆に女性しかないのは、竜人族が女性のみの種族とかじゃなくて、僕のせいなのか。

しまったな……まさかそんな副作用があつたなんて。

たしかにサイクロプスにウォードッグ×2、都合良くメスの魔獣だけを肉にしていたという確率は、まあ、そう低くもないのだろうけれど、すごい偶然だと思っていたんだ……

まさか僕が魔獣を肉にすると、擬人化ではなく女子化してしまうだなんて、それは想像が及んでいなかった……

「まあ、新生したと思えばよいか」

あつけらかんと言い放つレヴィアのママである。

性格が豪快というか、細かいことを気にしなさすぎ　　って細かいねーよ。

豪快すぎる。

「ともあれ、我らは呪いを解いていただいたと思えばいいのか？」
「いえ、それは僕には無理ですけど……まあ、手段はあるんじゃないですか？　この神様がどんなんだか知りませんが、さすがにそこまで慈悲のない存在じゃないでしょ」

RPGはだいたい不思議なアイテムで呪いを解くお使いがあるイメージだ。

きつとなんらかの救済手段が用意されており、もしレヴィアの旅に僕がかかわらなければ、十年だか二十年だかけて、そういう手段を探す旅をしたことだろう。

まあ、仮に呪いは解けないものだとしたって。

「もしあなたが魔獣化しそうになったら呼んでください。その時は僕が平らに均しに来ます。まだ猶予はあるんですよね？」

「う、む……まだ最低でも五年は平気だと思うが……平らに均す、か……うむ」

なぜだかちょっと引かれてしまった。

黄金の竜人族は咳払いする。

「神と袂を分かった我らが、まさか救われるとはな」

笑う。

どうやら、かなり子供っぽい、いたずらっ子みたいなの、不敵な笑顔を浮かべる人だったようだ。

戦っていた時には、あきらめとか、疲れとか……絶望とか。ネガティブな顔ばかりだったのに。

こんなイタズラっぽい、よく言えばポジティブな印象はなかった人だけだ。

救われてくれた、ということだろうか。

ならよかった。

裏技、チート、ただのルール違いでしかない力でも、彼女たちを助けられたなら、それは嬉しいことだ。

「新たな神よ」

彼女が僕を見る。

ということは僕に呼びかけたということだ。

……なんだろう、神と呼ばれてまごついたたり戸惑ったりする前に、『またか』と思つてうんざりしてしまう僕は、ひよっとしたらとても不遜なヤツなんじゃないだろうか。

ため息まじりに返事をする。

「……僕のことですよね」

「もちろんだ。新たな神よ 我らを救い、そなたらどこへ行く？ よければこの地にとどまり我らの信仰を受けてほしいのじゃが」

「そういうのガラじゃないんで。僕は新しい都市を開発しに行きます。というか、もともと、こっちよりあっちが先約だったんです」「そうか。……旅立つのじゃな」

彼女の視線が、僕ではない方へ向いた。

その先には、レヴィアがいる。

……そうか。

ここにはたくさんの人族がいる。

そして、目の前には、レヴィアの母親がいる。

もとよりここが、レヴィアの旅の終着駅だ。

冒険者をやめて平穩に暮らすのも悪くないかもしれない　　今さらながら、彼女が建てたフラグを思い出す。

レヴィアにはここに残るといふ選択肢があつて。

僕もマナフも、それを止める資格はない。

冒険を終えて、彼女は幸せに暮らしました。

おしまい。

そういう物語も、いいものだと思ふ。

どのみち、僕らが決めることではない。

だから僕は問いかける。

彼女の選択は彼女がすべきものだ。

僕はただ、貸せる力を持っていた時に、力を貸すだけの存在なのである。

レヴィアは僕を見た。

そして　　逆に、こちらに問う。

「ご主人様は、どうしてほしい？」

む。

なるほど、そこで僕の意味を問うのか。

たしかに彼女と最初に交わした契約……契約？ を思えば、彼女が己の行く先を僕にゆだねるとするのは、自然なことに思えた。

奴隷になったっていい。

ご主人様と呼んでやってもかまわない。

彼女はそんな敗北フラグをさんざん建てて、僕との賭けに破れ、現在に至るのだ。

それ以来、彼女は口を開けばなんらかのフラグを建てると、実際はそうでもないのだろうか、僕の中ではイメージづけられてしまっていた。

レヴィアという少女の自由は、口約束でしかないが、僕のものなのである。

そして彼女は約束を守る。なぜならば、竜人族だから。

しかし困ったことに、僕は別にどっちだっていいのだ。

彼女が幸せならどうでもいい。

まあ、情が芽生えていないわけではないし、愛着だって
愛着と
という言葉人間に使うのがふさわしいかは知らないが
そのよう
なものだって、ないわけじゃない。

一緒にいれるなら、きつと楽しいだろう。

あと、この世界の常識を僕もマナフも知らない。

なので彼女がいてくれたら助かることだって少くないだろう。

……そう考えると、これから先、この世界で生きていくのに彼女の存在は必須じゃないか？

うーむ。

縛り付けるようなことはしたくないんだけど。

一応、意見を求めてはいるわけだし、素直なところを言うておくか。

「僕には君が必要だ。できれば一緒にいてほしい」

省略しすぎた感じがなくてもないが、簡潔にまとめれば、こんなように言語化される。

レヴィアは。

目を丸くして。

それから、視線を逸らす。

そしてなぜかニヤケをこらえるように口をもごもごさせながら、言う。

「そ、そうか！　そこまで言われればついて行かないわけにはいかな！　ご主人様が求めるなら従う　なぜなら私は竜人族だからな！　しょうがないなまったく！　いやあ、竜人族である我が身をこれほど呪ったことはないぞ！」

「え？　嫌なら無理強いはしないけど……じゃあレヴィアにはここに残ってもらって」

「待て待て待て！　待てい！　なぜそうなる！　ちょっとは察しろ！　行くから！　一緒に行くから！　置いていかないで！」

本当はこの土地にいたいという、彼女の気持ちを察したつもりだったんだけど……

他にどのような察し方ができたというのか。

僕にはよくわからなかった。

レヴィアマママが笑う。

そして、僕の手をギュツと握った。

「娘を地上に残してから、十年と少し……様々な出会いがあったよ
うじゃな」

「……え？ まあ、そうかもしれないですね……僕が出会ったのは最
近なんで、よくは知らないんですけど」

「まだ幼い娘じゃ。そのあたり、どうか、よく覚えておいてほしい」

「ああ、本当に幼かったんですね……まあ覚えておきますけど」

「約束じゃからな」

「はい、もちろんです……？」

ギチギチと握られた手に込められた力が強くなる。

碎ける碎ける。

にしても……なんだ？

遠回しにお誕生会でもしろと言われているのだろうか……？

レヴィアママは、最後になっこり笑う。

なぜだろう、威圧されているように感じた。

そして、彼女は僕の手を放して、ひざまずく。

レヴィアママに倣うように、周囲を取り囲む観衆たちも、一斉に
ひざまずいた。

……二度目とはなるものの相変わらずささましい光景である。
気後れするというか、逃げ出したいというか。

「改めて、竜人族一同、御礼申し上げます」

レヴィアママが代表するように口を開いた。

僕は浮き足立つ心で『苦しゅうないとか言えばいいのだろうか』
との外れなことを考えるだけで精一杯だった。
言葉が出ない。

反対に、レヴィアママはすらすら話す。

「新たな神よ。あなた様の建てられたこの街で、我らは新たな
歴史を生きていきます。そうして呪いがもし完全に解けたのであれ
ば 再び、人と交わり暮らすことも、できるでしょう」

それは、きつと、いいことなのだろう。

竜人族はもとより人を守るといふ理念を持った種族なのだと思い
た。

ならば本懐を果たせる未来は、希望があふれている。

……まあ、人間を守るべくしてドラゴンを産みだしたはずの神様
が、なぜ本懐を守っているはずのドラゴンに呪いをかけたのかとい
う謎は残るが。

それこそ僕にとってはどうでもいい。

神様と対面とか、RPGでやってくれ。

僕は都市開発するから。

「願わくば、あなた様の前途に幸多からんことを。もしも前途の暗
雲たちこめし時は、我らにお声がけを。竜人族一同、もしあなた様
に必要とされれば、どのような困難にも立ち向かう所存でございます
」

できれば避けたい助力だった。

今回の旅でなんとなく思ったことだが

まっとうなRPGみたいな展開になった時点で、僕の負けである。

槍で突かれて実感した。

僕は無力で、脆弱で。

ただ 違うルールで生きているだけなのだ。

だからこういう旅とかはもうやめて、街に戻ってゆったり都市開発をしよう。

大丈夫大丈夫。

もう魔王は二人倒した……倒した？ し。

これ以上、僕が旅しなきゃいけないようなイベントは、もうないって。

「我らの魂はいつでもあなた様と共に。そして、我らの宝も、いつでもあなた様と共に。行つてらっしゃいませ。そして、行つてらっしゃい、我が娘、我が宝よ」

最後に顔を上げて、笑顔を見せる。

僕は視線に見送られながら、電車に乗りこんだ。

プシューッ、という音とともに扉が閉まり。

電車は、ゆっくりと発車する。

レヴィアは、窓から竜人族の里 僕が開発した街を、眺めていた。

いつまでもいつまでも。

見えなくなっても 噛みしめるように、ずっと、眺め続けていた。

25話

たぶんここからの会話はただの蛇足だろう。

帰るまでが遠足とはよく聞く話ではあるが、僕らの旅も帰るまで続く。

帰る。

どこに帰るのかと言えば、そりゃあもちろん、最初に行った街だ。マナフによつて壊れた街。

今ごろは資料もまとめ終わり、復興作業にいそしんでいるかもしれない。とあれば僕の出番だ。うまいこと権利をもらって復興開発拡張発展としていきたい。

元の世界には 別にいいかな、とっている。

帰り方を調べるといふのは、僕の方だと余裕でできそうな気がしない。

ストレスがたまりそうだ。

だったらそこまで未練のない元の世界なんか捨てて、この世界で都市開発をして行く方がいいと僕は判断した。

ファミレスもあるし。

ベッドもシャワーもあるし。

よくよく思い返せば、エアコンもあつた気がする。

ゲームをしてたら異世界に来ていた。

そんなことは、今でもありえないと思うけれど。

ここが死後の世界や夢の世界に該当するのであれば、帰ろうだな

んて思わないのが吉だろう。

というわけで初めて来た街に帰る途中である。
マナフがいきなりこんなことを言い出した。

「あたし、よくわかんなかったんだけど、レヴィアの旅はおしまいでいいの？」

不思議そうに首をかしげる。
ふむ、少し考えてみよう。

「目的にしてた竜人族と出会うことには成功したし、家族も見つかったし、ルーツとか歴史についてはまあ、好きな時に質問できるわけだし、冒険を始めた当初に抱いていた目的は達成されたんじゃないかな？」

視線をレヴィアに向ける。

彼女はまどの外を眺めていた。

すでに竜人族の里、というか空中都市は遠い。

ニムシュ山すらもう見えない。

だから、ただぼんやりと外を眺めているだけなのだろう。

彼女はしばしの間のあと、けだるげに口を開く。

「……そうだな。私の旅は、さつき終わった」

マナフが『ふうん』と言う。

それから。

「ルーツが知りたい。仲間がいるか知りたい。家族を見つけないか。あとは　なんだっけ？　いじめられるのが納得いかなかったんで

すっけ？ アナタ、色々納得できたの？」

「……さてな。捨てられた理由については納得できるような、できないような、不思議な気持ちではある。そのほかのことについてはどうだろう。一概に納得できることばかりでもない。少なくとも幼くして育った場所を飛び出し、大人のフリをして旅をした苦労は報われた」

報われたならば、よかった。

……いや、本当は、僕は余計なことをしてしまったんじゃないかとドキドキしてもいたのだ。

間違いない彼女の人生を早めた。

そのことで恨まれないかなという心配は絶無ではなかった。

「あたし、よくわかんないのよね。ルーツとか気になるもの？ 端役が主演と違うのは当たり前じゃない？ 衣装みためとか配役かんがえかたは、役に合ったものになるのが当然だと思うのよねえ。自分が他と違うなら、それ、自分はスペシャルってことでしょ？ わざわざ『自分がスペシャルな理由探し』なんて、面倒であたしならしないけど」

「それはマナフが人並外れて強いからだ」

「そう？ アナタも戦えばあたしとそんなに変わらないんじゃないやなくて？ まあ、あたしが勝つけど。何て言うの？ 主演補正で？」

「力は自信があるがな。……私は心が弱かった。魔王という存在ほど、迷いのないものでも、精強なものでもなかった。ようするに

普通の、人族に過ぎないのだ。私はな」

「ふうん。脆弱で大変ね。でも、その弱さはちよつとوراやましいわ」

「どついう意味だ？」

「えっ？ どついう意味って……言ったまんまだけど？ ほら、あたしって天才女優じゃない。だから下積みの苦労とかよくわかんないのよね」

「私はお前の言っていることがわからん」

レヴィアが半眼になる。

マナフは、しばらく悩んで。

「世界って難しいって思ったのよね」

一言言って、彼女はまた悩む。

悩み悩み、言葉を紡ぎ出す。

「あたしは、滅ぼされるのが嫌なら抵抗すればいいと思うし、仲良くしたいなら話かけてきたらいいと思うのよ」

それはそうだ、という話だった。

マナフの言葉は正論だ。

ただし、実際に行なうのは難しいタイプの、正しすぎて正しくない正論だった。

言葉は続く。

「でも、みんながみんな、そういう感じでもないのよねえ。ほら、あたしは封印されるの嫌だから封印しようとするやつらみんな滅ぼそうって思ったし、実際、人間どもはあたしを封印しようっていつもやってくるから、あたしが人族と敵対する以外の脚本なんてないと思ってたのよ」

過去を懐かしむように。

あるいは 過去の自分を恥じるように、笑う。

「でも、あたしを封印しようと思死な人族の中にも、本気であたしを封印したいヤツはそんなにいないっぽくて。何て言うの？ あた

しの目の前にいるのにあたしを見てないっていうか、あたしと同じ舞台上に立ってるのに、そいつは違う舞台にいるつもりでいるっていうか

首をかしげる。

彼女自身、わかっていないことを言語化しようとしているようだった。

しばし、悩んで。

「誤解してる」

発見した、とばかりにそう言った。

彼女は勢いよく語り出す。

「お互いに誤解してるのよね。実は戦わなくてもいいのに、脚本の要求で無理矢理戦うことになったりとか、実は仲良くしたいのにそういうセリフが出てこなくて仲が悪くなっちゃうとか。なんかみんな、自分自身よりも大きな力に無理矢理操られて生きてる感じで、本音が見えないのよ」

それが不思議なことだと、彼女は首をかしげる。

……まあ、自由に生きていけないのは社会に出ればよくあることだ。

人に本音をさらさないのも、よくある話である。

それをマナフは、新発見のように語っていたのだ。

「でも、この世界に多くいる弱者^{エキストラ}っていうのは、そういうものなのよね。あたしはそのへんの、なんていうの？ 自分の意思じゃない何かをする人たちの気持ちがさっぱりわかんなくて、こじれて誤解して、今まで封印されたり戦争したりしてきたんだと思う」

だから弱さがうらやましいの。

弱い人はきつと、弱い人の気持ちがわかるから。

そう、彼女は言った。

それから、はにかむように。

「役作りの一環だけだね。ほら、色んなことを知ると演技に深みが出るじゃない？ だから、この旅でレヴィアが何らかの納得とか、答え？ を掴んだなら、あたしも真似して、自分がスペシャルな理由探してみようかなと思ったのよ。ちよつとだけね？」

恥ずかしそうな顔をして。

視線が、僕へ移った。

「ま、まあ、全部管理人次第^{マネージャー}だけだね。あたしは面倒なのとか嫌いだし。誰かと一緒じゃないとまた勘違いで封印されそうになるかもでしょ？ そしたら争わない自信がないもの。だってまだまだあたしは、弱者^{エキストラ}たちの弱者なりの苦労とか葛藤を知らないんだから、考慮して演技なんかできないわよ、そんなの」

言い切って。

そして、照れ隠しをするように咳払いをする。

「それで、これからどうするの？」

これから。

僕の行動方針は決まっていた。

「ずばり『なるべく一箇所から動かず都市開発をする』だ。

が、そういう長期的な話はしない方がよさそうだなと感じた。

だって、僕は弱いし。

きつと目標を立てたところで、不意のトラブルとかで変わることもあるだろう。

そういう弱さ やりたいことをやりたいまま貫けない人間らしさは、きつと、マナフにはまだよくわからなくて、彼女を混乱させてしまつかもしれない。

だから、絶対に、動かしようのない、また外的要因で変更させられない目標だけを告げる。

「家を建てたい」

住む家を。

落ち着く先を。

定住する拠点を造りたい。

本当に、他者の予定とか、そういうの抜きで自分のためだけに何かを建築するというのは、実のところ、この世界に来てまだ一度もやっていなかったことだし。

その最初が自分の家というのは、なんとなくいいことのような気がした。

マナフがうなずく。

「いいわ。お城みたいなおうちにしてね」

……彼女も住む気なのか。

確かにそれは自然な流れのようにも、思えた。

マナフは見た目はこうだし、色々考えているようにも思えるが、その内面はやっぱりまだまだ子供で、そのくせ強すぎる力をもって

いる。

誰かが監視する必要があつて。

僕じゃない誰かに監視を任せて、彼女がまた人族と敵対する可能性を思えば、同じ屋根の下で寝起きするというのはストレスを避けられていいことだろう。

とか思っていると、レヴィアが遠慮がちに言う。

「私は、別に狭くてもかまわんぞ。旅暮らしで安宿にも慣れているからな」

……彼女まで住む気なのか。

確かに、自然な流れのようにも、思えなくもなかった。

レヴィアは実際にまだ子供らしいし、竜人族のレヴィアママからもよろしくと頼まれている。

それにレヴィアの旅で得たこの世界の常識、知識は、それらを持たない僕にとって非常に有用なものなのだ。

彼女が一緒だと、日常のアレコレがうまく進むだろう。

「……わかつたけど、あんまり期待しないでほしい。テクスチャの問題だと思っけど、そこまで細々とした注文に応えた建築はできないんだ」

てくすちゃ？ と同時につぶやき顔を見合わせる二名。

僕は笑って『何でもない』と答えた。

これが、帰り道の途中にあつた会話の一つ。

僕が心にとどめおいた、まだ何のフラグでもない雑談である。

26話

夜。

暗闇の中にぼんやりと、かがり火が焚かれた街が見えてきた。

僕の心中は安心していっばいだった。

その理由は長旅の末に家に帰ってくるとなんだかホッとするといい当たり前のそれではなくて、もっと深刻で僕以外にはわかり得ない悩みがあったからだ。

つまり。

鉄材が少ない。

というのも、竜人族の里、というか都市からここまで、整地して資材を回収することなく、ずっと線路を引き続けてきたからである。レヴィアにはいつでも帰れる自由が必要だろう。

だから、彼女の帰り道を整地してしまうわけにはいかなかったのだ。……いや、普通に行くのはあんまりにも大変そうだしね。

だから、街が見えて、残りの鉄材でどうにか線路も駅も建てられそうだなと判断できた時、僕は心底からホッとした。

まあ残る距離は短いので、歩いて普通にも普通に余裕だろうけれど。

ここまで電車で帰ってきたら最後まで電車に頼りたいという、怠惰な気持ちはそう簡単にぬぐえるものではなかった。

闇夜の中、電車を地上へとだんだん近付けて行く。まだ空の中だ。高度を下げ切るにはしばし距離が必要だろう。

実は暗い時間に電車を走らせたことは、ニムシユ山に突撃した時以来だ。

何せ街灯がないので、辺りが真っ暗になるのである。

サイクロプスであれば、あるいは闇などものともせず電車を運転してのけるのかもしれないと思わなくもない。

しかし彼女を信じて任せるというのも、なかなか危ないように思えたので、夜の移動は基本的に避けていたのである。

今日は街が近いので、ついやってしまったが……
明かりがついててよかった。

考えてみればそりやそうだという話で、街には人が住んでおり、全員が行儀良く日が沈むと同時に眠るわけではないだろう。

まして今は復興作業中なのだ。

夜まで起きて仕事をしている人も、また、日中の疲れを癒やすため酒盛りをしてる人なんかだっているだろう。

「ついにここまで来た……いや、戻ってきたのだな」

レヴィアが感慨深げにつぶやく。

彼女が『戻ってきた』と言った。……そのことがなんだか嬉しい。

ガタンゴトンと電車は進む。

街は次第に大きくなっていく。

……それにしては明るい。

まさか僕らが帰ってくるその日を待つて、暗くても迷わないように火を絶やさないでいてくれたのだろうか？

だとしたら嬉しい気遣いだ。

気のせいか、歓声みたいなものも、聞こえてくる。

僕を出迎えてくれている？

……闇夜を走る電車はライトぐらいつけているだろうけれど、それだけで僕が帰ってきたと判断できるものなのだろうか？

微妙な違和感。

小さな不自然。

あるいは、空に光の筋が見えたら大喜びする文化でもあるのか？

疑問に思うあいだにも、どんどん街は大きくなって。

ついに、その全貌が見えてきて

僕らは、街が何者かの襲撃を受けていることを知った。

かがり火ではなく、戦火だった。

歓声ではなく悲鳴だった。

人々は逃げ惑い、次々街から出て行くこととしている。

僕が設置した橋と、城壁が整地されているお陰でかなり逃げやす

そうなのが救いである。

というか。

「また襲われてるのかあの街!？」

思わず叫ぶ。

いくらなんでも泣きつ面に蜂というか、短い頻度で危機に陥りすぎじゃないかあの街!?

領主のおねーさんが熱心に建てていたのは、僕の死亡フラグじゃなくて自分の死亡フラグだったとでも言うのか……! 帰ったら結婚しようとか言うから!

電車はあと数分で街まで到着するだろう。

そのあいだにも街の状況は刻々と悪くなる。間に合うだろうか?

「ちょっと管理^{マネージャー}人! あたし、助けに行くわよ!」

主に僕の頭が混迷を極めていたその時。

雷光のように響き渡る、一人の声があった。

マナフだ。

彼女はごく自然に立ち上がり、ごく自然にそう言い放った。ただ

「どうやって!? まだ街はあんなに遠いのに!」

「転移するわ。だからここから出してよ!」

そういえば、僕の造った建造物はテレポート系の能力も遮断するのだった。

しかし走る電車から出るってどうすれば……そういえば、電車に

は緊急時に手動でドアを開けるレバーみたいなものが設置されていたはずだ！

僕は視線を巡らせ、ドアそばにあるそのレバーを発見する。当然ながら操作したことがなかった。

なのでまごつきながらもレバーを引っ張り、どうにかドアを開くことに成功する。

成功して。

「開けたよ！」

「じゃあ行くわよ！」

と。

ごく自然にマナフに腕を掴まれ、ドアから外に出た。

……えーと。

ちなみに電車はまだまだ空中を走行中だ。

高度はそりゃあ、ニムシユ山に登った時よりは断然低いけれど、まだまだビル七階とかぐらいの高さは余裕である。

つまり。

落ちれば死ぬ。

「僕はパラシュートなしでスカイダイビングできるタイプの人間じゃないんだけど!？」

まあ。

そんなタイプの人間は、それもう人間じゃない。

我ながらわけのわからないことを叫びつつ自由落下スタート。
落ちる落ちる。

マナフは僕の腕をつかんだままだ。

さすがのレヴィアも、この高さから落ちて無事ではられないの
だろう。

電車のドアから、慌てた顔で僕らを見下ろすだけで、ついでに来
なかった。

地面が迫るまで、体感では一分ぐらい落ちていた。

実時間はもつとずっと短かったことだろう　走馬燈のように流
れたのはこの世界で起きた出来事ばかりで、元の世界に大した思
い出がなかったことがわかってしまい、微妙にへこむ。

マナフは何もしない。

ただ僕の腕を放さないようにしているだけだ。

僕らは当然の物理法則に従って地面に落ちて。

どぶんと。

影に飲みこまれるように、地面に沈みこんだ。

27話

まばたきして。

目を開けたら燃えさかる街の中だった。

「ちょっと！ ここにはあたしの弱者がエキストラいっぱいいるんだから！
勝手に襲わないでくれない!？」

マナフの叫びに釣られて、そちらを見る。
すると、彼女はすでに街をこんなにした元凶……まあさかのぼ
ってしまえば元凶はマナフ自身なのだけれど……と対峙していた。

それは、あまりにも巨大な化け物だった。

周辺にはまだ無事な家屋もあるのだけれど、そいつは二階建ての
家屋より余裕ででかい。

二階建てのおうちを高さ五メートルぐらいとした場合、倍ぐらい
あるそいつは十メートルはある計算になる。

冗談みたいな大きさのそいつは、牛のような顔をした、人のよう
な体の生き物だ。

その特徴を持つ化け物には、元いた世界でゲームなどをした際
にお目にかかったことがあった。

ミノタウロス。
牛頭の化け物。

理性のない、赤く濁りきった瞳がこちらを捉える。

頭部の大きさに比すれば、小さく、つぶらですらあるその目には、しかしこちらの呼吸さえ停止させかねない嫌な迫力があつた。

「

！」

咆哮。

およそ言語で表わしえない叫び声を上げ、そいつはこちらに接近してくる。

同時に、マナフの影がゆらめき、中から無数の触手が出てきた。切り絵のように薄っぺらい、真っ黒な触手だ。

それぞれの先端は刃物のように鋭角にカットされており、打ち鳴らされるたびに火花を散らしていた。

僕は気付く。

放っておけば、バトルが始まるのだと。

まあ、マナフは魔王だし、放っておいてもどうにかしそつではあるのだが……

RPG的な展開になった時点で自分が無力なのは痛感している。
このままだと戦闘の余波に巻きこまれて僕が死にかねない。

僕が死んだら。

僕は都市開発ができない。

整地する。

視線さえ合わせればカーソルはびたりとミノタウロスにロックされ、意識を集中させればノータイムで整地が完了する。

『肉 を取得しました』のメッセージが見えるころには、ミノタウロスはこの世から跡形もなく消え去っていた。

……きつとまた、何らかの建物を建てれば、従業員として女子化して出てくるだろう。

サイクロプスと似たベクトルの行動だったので、そのキャラクタ―性に一抹の不安を覚えた。

「さすがあたしの管理^{マネージャー}人ね。女優に力仕事をさせないなんて、いい
気遣いよ」

マナフが笑う。

気遣いのつもりはなく、どっちかと言えば自分のことだけ考えた自己防衛なのだが。

結果として、魔王である彼女を守ったことになってしまったようだった。

僕は苦笑する。

「それより、他の魔獣はいないのかな？」
「そうね。あんな雑魚が一匹だけとは思えないし、ちょっと見回ってくるわ」

言っが早いのか、どぶん、と影に飲みこまれるようにマナフは消えた。

……放っておいても大丈夫だろう。

あの巨大なミノタウロスを『雑魚』と表現できるなら、他の魔獣にはまず負けまい。

フラグじゃなくてね。

それにしても

なぜいきなり街が襲われたのか。

なぜ、マナフはあんなにも街を守るのにやる気を見せたのか。

「……まあ、いいか。どうにも街は無事で済みそうだし」

気にするほどのことでもないだろう。

最後に一混乱あったが、僕の冒険はようやく終わりだ。

これよりあとに危機はなく。

待っているのは、穏やかな都市開発だけである。

………だけであるといいなあ。

不吉な予感を覚える僕だった。

「神様におかれましては、二度もわたくしどもの危機をお救いください、街人一同、まことに感謝の言葉もございません」

再び。

街人全員と領主のおねーさんにひざまずかれながら、僕はそんな言葉を聞いていた。

街の外である。

中では現在、消火活動が一段落し、今は一応くすぶっている火種はないか、魔獣は残ってはいないかなどの確認作業が行なわれているところである。

それにしてもこの人たちは会話するのにいちいち腰が低すぎる。物理的にも。

人を見下ろすというのは、僕みたいな小心者からすれば、気持ちがいいことではなく、まごついてしまうような一大事なのである。

そのうち慣れるかもしれないが、慣れたくない。

会話の時にいちいち相手にひざまずかせないといけないという立場は、非常に偉そうで、傍目に見たらとても嫌な感じだ。

というか僕が嫌なやつみたいだから、やめてほしい……

まあ、ともかくだ。

僕は咳払いしてたずねる。

「今度はなんで魔獣に襲われてたの？」

理由があるなら、だけれど。

魔獣には理性らしきものがないと思うし、理由なんて特にないだろ。

ところが領主のおねーさんは言う。

「おそらく、街にある聖剣が目的なのではないかと」

聖剣とかあったのか。

いや、まあ、僕にくれても役に立たないだろうからいいんだけどさ、魔王退治に行く際に渡そうとしてくれたってよかったんじゃないかなあ……。

僕はかたわらに立つマナフを見た。

彼女は『なるほど』とでも言いたげにうんうんうなずいていた。

「なんかムカツク街だと思ったらそういうことだったのね。あたし思ったもの。『この街絶対滅ばさなきゃ』って。やっぱりあたしのカンが正しかったわ」

聖剣は魔王にしてみると『ムカツク』らしい。

詳しい効能は知らないが、だいたいRPGにおいて勇者が魔王を打倒するために手に入れる物が聖剣だと考えれば、その印象も納得できる……のかなあ。

僕としては『ムカついた』などという俗っぽい表現ではなく、『聖なる力を感じた』とか『強い波動を感じた』とかそういう意味深い表現をしてほしい気持ちではあった。

「というか『なんかムカツク』のレベルで真つ先に魔王に襲われるのか、この街は。」

「だとしたらあのものものしい城壁も、必要な備えだったのだろう。間違っても丸裸のまま放り出していい街というわけではなさそうだ。」

「……もう『資料をまとめ終わっていない』とか言ってる場合じゃなさそうですね。僕に任せてください。以前を越える強度の城壁……的な何かを用意しますので、どうか許可していただけます？」

「断る理由がないだろう。」

「実際に、被害が出てしまっているのだ。」

「他の建物の修繕はともかくとして、城壁を建てる許可ぐらいはくれるはずだ。」

「もっとも、僕が造れるものの中に『城壁』というのは存在しないので、道路とかその他建造物を用いて城壁代わりの何かを建てるしかないのだけれど。」

「当然来るべき肯定の返事を待つ。」

「しかし、領主のおねーさんの口にした言葉は、僕の予想を裏切るものだった。」

「それは、もう大丈夫でございます」

「……書類をまとめ終わっていないからですか？ そんなこと言うてる場合じゃないと思うんですけど」

「そうではなく、もう聖剣がないので、大丈夫だと思うということ」

です」

「聖剣がない？」

「奪われました」

……おいおい、マジかよ。

大変そうなのはわかるのだが、いまいち何が大変か把握できてないので、僕は鈍い反応しかできなかった。

わからない時は素直に質問しよう。

「ちなみに、聖剣が奪われるとどんな被害が？」

「この街で封印しているものだけではありませんが、すべてが奪われますと、世界中で魔王が復活いたします……魔王マナフの復活も今考えればどこか他の街で聖剣が奪われたからではないかと思われる次第でございます」

「え、つと……ちなみに、ですけど。魔王って全部でどのぐらいいるんですか？」

「八大魔王、と伝承にはございます。つまり八人かと」

……危惧してたよ、この事態。

マナフが嫌なフラグを建てた気がしたんだ。

終末のバーゲンセールである。

魔王が八人とかやめてよ。

ああ、いやいや。

いいんだ。

魔王が八人いたって、僕には関係ない。

そもそもだよ？

僕には魔王を倒す義務なんてものはないのである。

何の流れが、すでに二人ほど魔王と争う事態にはなってしまったものの、それはあくまでもその場の流れであり、僕の負うべき責務とは何も関係がない。

魔王が出ました。

大変ですね。

ところで明日のお夕飯はどうしましょうか？

そんなんでいいんだよ。

魔王の相手だなんていうファンタジーRPGみたいなイベントは、それこそ勇者様にやらせるべきなのだ。

僕はただ、ストレスフリーな都市開発をしたいだけで。

ストレス源を取り除ければそれでいい。

魔王復活。

そりゃあ、多くの被害は出るのだろう。

けれども僕はニューズで知らない人が死んだり、遠くの土地で内戦が起きるたびに『自分が何とかしなきゃ』と思うほど正義感の強い人間ではないのだ。

むしろ、正義感は弱い。

トラブルが起こるなら僕の知らないところで起きてくれと思うタイプの人間だ。

自分の人間性を見つめ直す。

まごうことなき小市民で安心する。

英雄とかガラじゃない。

神だってガラじゃない。

そんな、現実にはない役職振られましてもねえ？

それより、市長とかどうだろ？

将来安定してそうで、よくない？

そういうものに、僕はなりたい。

決定した。

僕は魔王復活をスルーする。

「……いやあ、そうなんですか。聖剣がね。へえー。世界はこれから大変な時期に入っていくんでしょうね。経済とか荒れそうだなあ。ところで街の復興に関することなんですけど」

「マネージャー管理人！ あたし、魔王倒して回りたいわ！」

「おい！？

突然何を言い出すんだこの魔王マナフは！？

僕は関係ないって言ってるじゃん！

いや、言葉には出してないけどさ！

待て、僕、冷静になれ。

どうにか声を荒げそうなのを抑えて、マナフに問いかける。

「……えっと、その、どうしてそんな、魔王を倒したいだなんて思ったのかな？」

「だって、人を殺したり人の街を焼いたりするのは、悪いことだもの！ 管理人言ってたわ。悪いことしたら反省しないとダメなのよ？ 相手が魔王なら、先に復活した先輩魔王としてあたしが罰してあげるのが筋じゃない？ 後輩の演技指導は先輩の仕事みたいなもの

のだしね！」

……ああ、うん。
言った。

そしてマナフも納得した。

わかったわ。人殺しはいけない。

街を燃やすのも、いけない。

覚えたわよ。一度言われれば、覚えるわ。うん、まだ納得は
できないけど。

悪い事をしたなら、反省しないとね。

彼女は確かに反省したのだ。

だからこそ、今、こうして、僕らと一緒に旅をしている。

「だからあたし、この街が襲われてるの見て、がんばって助けよう
って思ったのよ。見て回る時、いっぱい感謝されたわ。……いいわ
よね、感謝されるの。暗闇の世界に光が差した気分。あたしはたく
さんの光を浴びて世界一の女優になるの。それには魔王たちをどう
にかしないと」

……やばいなあ。

すごく立派なこと言ってる。

領主のおねーさんや街の人たちも感じ入っているようで、感動し
たようにマナフを見ていた。

人族にとっての害悪。

世界にとっての災厄。

復活すなわち世界滅亡の始まりである、最悪の存在　魔王。
その魔王が、他の魔王をどうにかしたいという使命に燃えているのだ。

不覚にも、僕だってジーンときた。

どうしようかなあ……

僕はとりあえず、レヴィアを見た。

意見を求めたのだ。

彼女はうなずき、言う。

「魔王退治、か。新たな旅の目的としては上々だが、ご主人様はどう思う？」

ファンタジーからは逃げられない！

RPGに回りこまれてしまった！

僕ががっくりと肩を落とす。

それから、色んな力を振り絞って、蚊の鳴くような声で言った。

「……わかった。魔王退治に行こう」

ここで断る方がストレスが高いという判断である。

領主のおねーさんが進言してくる。

「魔王の封印場所については、東にあります大聖堂の僧侶が詳しいでしょう」

情報があるようだ。

レヴィアが言葉を継ぐ。

「そこなら旅の途中に寄ったことがある。広い森を越える必要があるが……まあ、今までと同じ移動手段を用いれば問題はなかるう」

というこらしい。

こつなれば行動は早い方がいいだろう。

僕はさっそく、坂道を建設した。

暗い闇の中。

わずかなかがり火の明かりに、近代的な二車線道路が浮かび上がる。

「それじゃあ行ってきますけど、ちなみに領主さん、その、建築や補修などの必要は……」

「今回の襲撃に関する被害をまとめないといけませんので……」

これだから行政の仕事は遅いんだよ！

事件は現場で起こってるんだぞ！

……などと言つのも野暮だろう。

もうこつなつたら、全部の魔王を倒して、全部の問題を片付けて、遠慮無く、長々と、どっぶり都市開発ができる環境を作り上げてやる……！

「……じゃあ、ちょっと世界中の魔王を倒しに行って来ます」

坂道に足をかける。

かたわらにはマナフとレヴィア。

見送るのは、ひざまずいたままこちらを見上げる、三万人の人々。

数々の人に見つめられながら僕らは登り始める。

魔王討伐という、この長い坂道を。

あとがきのようなもの

僕たちの今後について少しだけ触れておきたい。

ストレスをなくすという目的で魔王退治なんていうRPGの王道みたいなことを始めた僕らではあるけれど、その旅自体を語る必要があるとはとても思えないからだ。

なぜならば、僕はいつだって僕にできることしかしないから。

つまり 建築である。

よほどのことがない限り僕らは魔王を打倒ないし説得するし。

よほどのことがあったって、現役魔王であるマナフや、竜人族であるレヴィアの力があれば、たいていはどうにかできてしまうだろう。

もちろん、未来のことはまったくわからない。

語るほどの困難に直面する日だって来るだろう。

大聖堂に行つて、魔王の居所について調べる。

判明した魔王の居場所に向かい、打倒や説得を試みる。

聖剣回収なんかの役割も、ありうるかもしれない。

王都に行くこともありうるだろう。

仲間が増えることだってあるかもしれない。

あるいは、もっと近い未来、先ほど整地したばかりのミノタウロスの意外なキャラクター性に度肝を抜かれたりもするだろう。

……それに都市開発をしたいと言っている僕だが、その初志を貫徹できるとは限らない。

彼女たちとの冒険は大変だった。

たくさんの人に注目されるのは苦手だ。

神様みたく崇められるのは、ガラじゃない。

だけれど。

大変だけれど楽しい冒険だったし。

注目されるのはやっぱり苦手でも、多くの人の役に立てることに喜びも感じ始めているし。

それに 見上げられるというのは緊張するし戸惑うし、どうして僕なんかがという遠慮めいた気持ちもないではないけれど、気持ちよさも、なくはないのだ。
少しだけね。

だからきつと、僕の気持ちはどんどんRPG攻略に寄っていくだろう。

変化をするのは悪いことじゃない なんてここで使つと自己弁護のようではないけれど。

自己弁護したっていいじゃないか。

僕は最初の思いを最期まで貫き通せるほど強くないのだから。

きつとマナフには理解してもらえないこの弱さを、いつか彼女も

わかる日が来るだろう。

主演とか、脇役とか。

強者とか、弱者とか。

貴族とか、竜人族とか、魔王とか。

そういうロールを貫き通して生きていけないのが、普通に普通の人間だと、僕は思う。

だから僕はきつと、これからもRPGを拒否していこう。

冒険を拒否しなくとも、役割を演じる遊びだけは、どうにもなじめない。

竜人族とか、領主とか、魔王とか。

そういう役割に徹して色々なものを我慢したり犠牲にしたりする彼女らの強さは、僕には遠く、まぶしいものだ。

僕が彼女らの活躍を語るといふのは、彼女らのそばであたふたする僕の醜態をさらすということでもある。

だから僕はきつと、これ以上、魔王退治の旅について語らない。

……とまあ、今のところはそんな気持ちであることは事実なのだけれど。

初志を貫徹できない僕の弱さは、先ほど僕自身が述べた通りである。

いつかまた。

僕が、どうにか自分のこなすべきロールを見つけて、それをプレイできているなとそこそこの自画自賛ができた時には、きっと語ることもありうるだろう。

まあ、とは言うが、僕が僕の旅路を語りたがるかどうかは、僕にかかつてはいないのである。

僕が何かを決定するなどとおこがましい。
いつだって僕は決定を彼女たちに任せてきたのだから。

「マネージャーねえ管理人、何してるの？」

マナフの声を聞いて、我に返る。
ガタンゴトンと揺れる電車の中。
窓の外には一面の星空。

……うん、らしくないことをつらつらと考えてしまった気がする。
そういえば。

一つ、拾っていないフラグを思い出した。

僕はマナフに『なんでもない』と答える。
そして、レヴィアの方を見た。

「レヴィア、一つ聞いていいかな？」

彼女は、僕の隣で目を閉じていた。
眠っているのかなと思ったが、そんなことはなかったらしい。

片目を開けて、口を開く。

「なんだ、ご主人様」

「そういえば、竜人族の里に行く前、何か言いかけてなかった？」

酒宴の時である。

彼女は酔っ払いがくだを巻くように、つらつらと色々な話をした。だけれど、その中で一つだけ、言っのをやめた話があったのだ。

「この話は魔王を倒してからにしよう、だとかなんとか言ってた気がするんだけど」

「ああ、それか」

弱ったようになる。

何か触れてはいけない、忘れた方がいい話題だったのだろうか……？

僕がためらっているとレヴィアは少し恥ずかしそうに言う。

「実はな、その、なんだ……いや、酒の勢いかどうかはわからんが、少し変なことを思ってしまったものでな……」

「変なこと？」

「まあその、結果としてそうそう変なことでもなかったとわかったのだが、今さら口にするのは恥ずかしいというか」

「恥ずかしいならいいかな」

「待て待て待て！ どうしてご主人様はそう淡泊なのだ！？ 聞いてくれ！ 本当は聞いてほしいということだ！」

本当は聞いて欲しいなら、そう言えばいいのに……

マナフじゃないけど、そこで本音を偽る意味はわからないと言わざるを得ない。

僕は仕方なく続きをうながすことにした。

「何？」

「……う、うむ。実はだな……ご主人様と出会った時、体に稲妻が走ったと言っただろう」

「言っただけ……？」

「言ったかどうかはともかく、走ったのだ！ それで、私はその当時、てつきり、竜人族である私が仕えるべき強大なる存在に出会った衝撃だと思っていたのだが　もう一つ、ありえそうな可能性を思いついてな」

「……はあ」

「つまりだ。あのご主人様と出会った時の衝撃は　運命の出会いというやつなのではないかと思っただのだ！　ちよつとだけな！」

「……」

運命の出会い。

なんだろう、その言葉自体には数々の解釈の余地がある。

だけれど、顔を赤らめながら、少女が男性に対し使う場合は、もう意味合いはたった一つきりしかないというか。

「ご主人様と私は、結ばれる運命の男女なのではないかと思っただ」

恥ずかしそうに。

でも、嬉しそうに。

レヴィアはそんなことを言った。

一方僕は。

目を閉じて考えた末に、答える。

「いや、気のせいじゃないかな」

「いや、気のせいではない!」

断言されてしまった。

うーん、しかし、運命ねえ。

僕はあんまりそういうのピンとこないというか、吊り橋効果的なドキドキは僕だって感じていなかったわけでもないが、それは恋愛とまた違うものだろう。

しかしレヴィアは熱っぽく語る。

「とにかく私は運命を感じた! だから、ご主人様を落とす! 私が落とすと言ったからには、何がなんでも落ちてもらうぞ。なぜならば、私は竜人族だからな!」

なるほど。

竜人族なら仕方ないな。

……ってなるかい!?

と思うのだけれど、レヴィアの顔はもう恋に恋する乙女のそれ、僕がちよつとやさつとの説得を試みたところで心変わりをしそうにもなかった。

……旅に出て数十分。

もはや語るべきこともないと思われていた僕らの旅路に、早くも語るべきことができそうな気配があった。

長い前フリまでした僕が、まるで全力でフラグ建てに走っていた

みたいだった。

……うむ。

レヴィアや領主のおねーさんの発言を聞いて、この人たちは何てフラグばかり建てるのだろう、もう口を開かない方が平和なんじゃないかと思ったりもしたが、僕も結構、フラグを建てて生きているらしかった。

まあ、しょうがない。

僕は建築しかできないのだ。

ただ厄介なことがあるとすれば。

ただの建物と違って、レヴィアの意味は整地できないところぐらいだろうか。

……きつと終始こんな感じで、これからも僕らは旅をしていくのだろう。

これから先を僕が語る可能性は低いみたいなきことをさっき言ったが

また。

近く大事件が起きたら、話の続きをさせてもらいたいと思う。

どうせ彼女たちとの旅路には、色々な建設が欠かすことなくあると思うし。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<https://ncode.syosetu.com/n8528db/>

こんにちはRPGさん。わたくし、都市開発系ゲームから来た者ですが。

2017年10月11日15時39分発行